ゼロの使い魔　木原誠司+αの使い魔生活

核戦争

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔　木原誠司＋αの使い魔生活

【Ｎコード】
Ｎ３５２０Ｓ

【作者名】
核戦争

【あらすじ】
死んだ、それは変わらない。
だが俺はサイトの居る現代日本に転生した。
そして召喚儀式の日、サイトは召喚された・・・原作通りに。
俺を巻き込んで・・・。

1生前　死亡（前書き）

警告

ノリと勢いで書いてる為駄文になりがちです
なのでそれが了承できる方のみご覧ください

1生前　死亡

きはらせいじ

俺の名は木原誠司　ゲームとラノベとアニメが好きな大学生だ　趣味は家でゴロゴロしながら音楽を聴いたりゲームをすることである

今はまってる作品はゼロ魔である

さて　そんな俺は今街角の薬屋の前にいる。

なぜそこ薬屋かっていうと最近夢見が悪いからだ……

なぜか夢を見ると老人が「飛んでくるトラックに気をつけろ」と言って来る　そしてそのあとなぜか毎回右に９０，傾いたトラックが飛んでくるのである　そしてその巨大な車体が当たる瞬間に眼が覚めるのだ

俺はそんな夢を１ヶ月ほど見続けている。

だがそんな夢も今日で終わりだ……いや　終わらせて見せる！

そう心の中で思いながら店員によく聞く睡眠薬を選んでもらい……妙に高かったが……帰宅……している途中でトラックが法定速度を人目でオーバーしていると分かるぐらいの速さで走っていたそしてトラックの先には信号を渡ってい老人が！！

このままでは爺さんは轢かれるだろう　そう思った俺は

「爺さん－－－－－ッ！！　逃げろーーーッ！！」

そう叫びながら爺さんの方にはしった……だが間に合わないそしてトラックが当たる直前　爺さんが振り向き

「そぉぉい！！！」バゴッ！！！
という掛け声とともに持っていた杖でトラックを弾き飛ばした・・・
・・・こちらに向けて

「ハァ？」

俺はそんな気の抜けたような声を発しこう思った。

あ　これって夢と一緒じゃね……

そして俺は向かってきた右９０，トラックに潰されて死んだ

ＤＡＲＤ　　ＥＮＤ（笑）

「んなことになってたまっかゴルァ！！！」という叫び声とともに

左側に向かって転がった　間一髪でトラックを回避できた　そして
こちらに近づいてきた爺さんが
「やはり今回もだめだったかのぅ」
と言った　俺が爺さんに対して
「一体あんたは……」
「そんなことより上　上」　と言ったら
と上を指差した

そこで俺が見たものは　　倒れてくる電柱だった
「あぶねぇ！！！」そう言い今度は右に転がって避けた……のは良いが体に何かが触れた……

「これ……電線じゃ…………阿波ばばばばばばばばばばばばあああああアアアアアアアアアアアアアア！！！！」
そしておれは感電して死んだ。

「そういやあの爺さん　妙に夢に出てきた爺さんとそっくりだったなぁ」
それが死に行く俺が思った最後の言葉だった

「んで俺は何だってこんな黒い空間にいるんだ？？　俺は確かに死んだはずだったんだがなぁ」
確かに俺は死んだはずだ　あの体中を電気が駆け巡った感覚はまだ

残っている　そして
やっぱ死後の世界かなぁ　などと考えていると目の前に老人が立っていた　そして爺さんが
「坊主　ゼロ魔の世界へ転生する気は無いか？　今ならお得な能力つきじゃぞ」
と言ってきた
俺はつい
「のったァッ！！」
と叫んでしまったそして俺の意識は消えた

「やつの能力はっと・・・こんなもんでいいじゃろ」
彼がいなくなった跡にそんな声が聞こえた

1生前　死亡（後書き）

さっそく後悔
次どうしよっかな～

2　転生　第二の人生（前書き）

こっから先は全く寝ないで妙なハイテンション状態で書いたからおかしくなってるとこがあると思う

気にならない方だけ読んでね

なお此処から先はこんな感じのテンションで書いたものが何個かありますからね

2　転生　第二の人生

長く寝ていたような感覚だ　感覚があるってことは無事転生できたって事だろう……どれ　まずは眼を開けてみようか……っとあいた……て　ずいぶん低いなぁ……まるでがガキみたいだなっと

よし　立ち上がれた　　まずは情報収集だな　とりあえずここの構造を把握するかぁ

おっと　なかなか感覚がつかめんな　さて　やりますか

そう思いながら俺は危なっかしい足取りで家の中をあるきまわってった

結果

俺の名は変わってない（木原誠司のまま）８歳だった

お隣さんが平賀家でサイトは昨日８歳になったらしい

俺とサイトは心友らしい

考察

ゼロ魔の世界の現代に転生したらしい

原作開始まで後約８～１０年っぽい

とゆうことでまずは覚えているゼロ魔知識を記録・・・３日間かけて仕上げ　あとは・・・・・・鍛えるか・・・・・・

そう思った俺は早速筋トレを開始した

9年後
〈サイト〉

俺は今誠司と共に修理していたノートパソコンの回収をしていた。
誠司は9年ほど前から急に体を鍛えだした　体を鍛えるために陸上部に入った不思議なやつだ　まぁそのせいでここ最近一緒に遊んでないんだけどな
ここ最近誠司と遊んでなかったから今日はカラオケで思いっきり歌うつもりだ。
……あぁ　誠司ってのは今隣で新作ギャルゲの棚を目を血走らせて眺めている悪友の事だ
誠司を簡単に表現するんなら成績優秀　顔結構いい　筋肉よし　喧嘩が強いってとこかな
ん??　何で俺はこんな事考えてるかって??　なんかやらなきゃいけないような気がしたんだって
「おいさいと　会計終わったぞ　」
「ん　あぁ分かった　払ってくるよ」
「早くしろよ　今回は俺も死ぬ気で歌うんだからな」
俺はそう言い金を払う……あ……やべぇ金たりねぇ
「ん?　どうしたサイト?　・・・MASAKA・・・」
「・・・すまん　金貸してもらえない?」
「・・・いくらだ」

「・・・３０００円だ」
「・・・分かった　ほれ　これで足りるか？」
「スマン！ありがとな誠司」
「気にするな　・・・サイト・・・ワカッテルナ」
「ああ１．２５倍だろ？」
「分かってるんならいい」
足りなかった金額を誠司に借りて会計を済ませる……そして店を出てカラオケボックスに向かっているときにソレは現れた
「うおっ！！！　なんだこれ」
サイトはそう言いソコにあった鏡らしき物に驚き離れようとするが動かない……よく見ると左手が鏡らしき物の中に入っている　俺はすぐに誠司に救援を求めた……が隣に誠司がいない
周りを見回すと売店で肉まんを買っている誠司の姿が見えた
「せ～い～じ～！！助けてくれ～～」
俺はそう叫んだ　そして誠司が俺の異常に気がついたのか全速で走ってくるのが見える　そして
「なんじゃそりゃ」
何でも良いから助けてくれよ（泣）
「……用はそれから引きずりだしゃ良いのか？？・・・わかったよっと　・・・セイッ！！！」
誠司が俺を引きずり出そうとするがまったく動かない……そして
「ぬわぁぁぁぁ！！」誠司
「おわぁ」サイト
二人とも鑑に引きずり込まれた。　俺の意識はそこで途切れた
ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

2　転生　第二の人生（後書き）

前回のＤＡＲＤで早速後悔している

次回は能力確認ＤＡＺＥ

また後悔するのかなぁ

3虚数空間内　能力確認

{誠司}
さて無事にゼロ魔の世界に行くことができるっぽいがあの爺さんが言ってた特殊能力って何だ
そう思っていると目の前になぜか自称オヤシロサマが現れた
「・・・ハァ??」
なぜ羽入？　そう思っていると
「そんな事はどうでもいいのです　せっかく誠司の特殊能力について説明しに来て上げたのに　説明しないで帰るのですよ　あうあう」
・・・え・・・ちょ　説明なしであの殺伐とした世界に放り込まれたら余裕で死ぬる
「…すいません　説明してください　お願いします…」
そういい頭を地面にこすり付ける　すると
「あうあう～シュークリームで手を打つのですよ」
羽入はそう言い俺はその要求を呑んだ　そして

「あうあう～わかったのです　誠司の能力は自分の記憶している機体を装備できることとその機体の本来の力を出すための融合　あと機体の召喚　あと肉体強化みたいです」
マテ　みたいってなんだ　つか装備って何だ
「あう～今のところは～と・・・誠司好きな機体って何ですか」
そう聞かれて俺はとっさに
「ゼオライマー」

と答えた・・・・・・あれ・・・これってやばくね??　あの世界でメイオウ攻撃したら色々と終わるんじゃね・・・そう思った俺は

「すまん　間違えた　Ｂ３グフで頼む・・・後で追加できるか?」

「あうあう～かのうなのですよ～でも今は一つしかとうろくできないっぽいですよ～あと僕にシュークリームくれるなら変更もしてあげますよ～あうあう」

どうやら変更は可能のようだ　なら

「なぁ　三機に分離したり　変形するやつはどうなんだ?　あとＭＡとか」

これは大事な問題である　ゲッターやＺガンダムなどを装備した場合どうなってしまうか聞いておかなければ・・・人の体は３つに分かれないしましてや変形すらしないのである　すると

「あうあう～大丈夫なのですよ～違和感などぜんぜんかんじないのですよ～あとパーツのみも可能なのですよ」

「ならいいや　だったらＢ３のままで変更なしで頼む」

俺はそう羽生に伝えると羽入は

「あうあう～分かったのです～次は使いたい武器を選択してくださいなのです」

「なぜだ?　装備が可能なら武器は要らないだろう」

「あう～そうなのですが装備と融合はとても魔力を使うのですよ

それにレベルが上がると機体を自立稼動させる事ができるのですが

その間は装備ができないのですよあう～」

「・・・?・・・レベル?　なんだそれは」

・・・このアホ神・・・ＭＡＳＡＫＡ言い忘れたわけじゃないだろ

うなぁ

「・・・・・・あう～言い忘れていたのですよあう～」
「・・・・チッ」
「あう～誠司がぐれたのですよ～」
「早くレベルについてＨＡＮＡＳＥ」
羽生はそう言い説明を始めた

今まで羽入が話していた事をまとめると
レベルは９９９までである（いまだに９９９まで到達した者はいないらしい）なにかしら行動を起こせばレヴェルは上がる
機体を装備できる（大きさはだいたい１．８Ｍ～１０Ｍらしい）がまだ装備できないらしい　レベルが上がれば装備可能　レベルが低い状態で無理やり装備・融合を行うと暴走する
パワーノードと言う物を使う事によって機体の登録できる数が１つ増やせるがノードを使う事によって機体の強化も可能らしい　（例　マジンガーＺからマジンガーＺスクランダークルス着き　そしてカイザー）
武器を装備できるらしい（これも後からＳＰ消費で入手できるらしいので手始めにアイザックさんが着ていた（圭）スーツとデッドスペースにでてきたプラズマカッターと近接戦用のグルカナイフを１本もらった（圭スーツは今着ないで財宝内に収納中　ヘルメットもセットだよ）
そのうち羽生がメイドを一人送るらしい（本人曰く一々伝えるのが面倒だから・・・俺の知っているメイドキャラの中から羽入が選択して派遣するらしい）
ＳＰを使って能力を獲得する事ができる
取得した武器はいただいた王の財宝内に保管してあり　いつでも取

り出せるとのこと
「こんなもんか？」
「あう～誠司～似合ってるですよ～」
そう言い羽入はまっすぐ行くと出口ですよと言う
そして出口へ向かおうとした途端　羽入が呼び戻す

「どうした？」

「あう～誠司にプレゼントなのですよ」
そういうと急に体が軽くなる
なにをした？　そう羽入に問いかけると羽入は肉体強化と戦闘技能強化のまじないをしたと答えた

俺は礼をいいその場から去った

3時間後

「やっと・・・たどりついたぁ・・・」そう言い俺は目の前にある

鏡に入っていった

3虚数空間内　能力確認（後書き）

肉まんは何処へいった・・・そして羽入登場

今回は後悔していない

4　召喚　契約　肉まん（前書き）

肉まん美味しいよね

そんな思いが暴走しました

4　召喚　契約　肉まん

眼が覚めたら目の前にタバサが居た・・・あれ・・・タバサルート？
そんな事を考えているとタバサは何かしらつぶやいた・・・言葉が理解できないが多分使い魔と契約するときのルーンかなんかだろう
　そしてそれを言い終わり　タバサがキスをしてくる　そして突然訪れる左腕の痛み

「ぐおっ！！　結構きついなこれ・・・」

「だいじょうぶ　使い魔のルーンを刻んでいるだけ・・・すぐ終わる」

タバサがそう言い終わったころにはルーンは刻み終わっていた・・・
俺のルーンは左腕に刻まれていた・・・なお左の手の甲ではなく左腕である

「さて・・・と　えぇと・・・君の名は」
とコッパゲール（笑）先生が俺の名前を聞いてくる
「俺の名はセイジ　セイジ・キハラっつうモンです　んでなんスか」
「いや　君の左腕のルーンをスケッチさせてほしいんだ　見慣れないルーンだからね」

そういってくる　やはり俺のルーンの事が気になるようだ　そりゃそうだろう　なんせ史上初のニンゲンの使い魔だ気にもなるだろう

「ええ　それはいいんですが　次の召喚を待っている生徒たちがいるのでそれを終わらせてからにしたほうがいいのでは？」　と俺が言うとコッパゲールはハッとおどろいたようなかおをし　振り向い

た　そしてそんな俺たちを睨んでいる生徒が何人かいた・・・そいつら全員が召喚待ちの生徒だった

そしてコルベールは召喚待ちの生徒たちに謝り　召喚の儀式を再開した

俺はサイトが召喚されるまで暇なので主人となったタバサと話す事にした

「もしもし　マスター？」

「・・・・・・（無言）」

「・・・もしもし・・・」

・・・無言・・・本をめくる音しか聞こえない　なので俺はちょっと強硬手段に出る事にした

「なぁマスターは崩壊した精神を元に戻す方法って知りたくないか？？」

「ッツ！！」

マスターは驚き本をおと・・・さ無かった　俺が落ちる本を受け止めたからだ

そして俺を睨めつけて来た・・・結構殺気が出ていた

「あなたは・・・その方法を知っているとでも・・・」

「ああ　しってる」

「ッ！！　おしえて！！今すぐに！！」

そういい俺の喉に杖の先端を押し付けてくる　俺は「夜に教える
だから落ち着け」というと大人しくなった

「ちゃんと教えてくれるの？」

「教えてやるからその殺気を抑えてくれ」

わかったとばかりにうなずく　そしてＺＥＲＯの番が来た　ルイズ
が呪文を唱えるたびに地面が抉れていく　この爆発手榴弾に匹敵す
るんじゃないか？とろくでもない？ことを考えていると召喚に成功
する　そしてサイトが現れ・・・周囲を確認してからこっちに向か
って走ってくる　その手に俺が買ったほかほかの肉まんを抱えなが
ら・・・そして俺に肉まんを差し出してくる・・・

「セイジ　忘れ物だぞ」

しかしなんで召喚されたとき俺が持ってた肉まんをサイトが・・・
？　とりあえず俺は何故持っているか聞いた

「ああ有難う　でもなんでサイトが肉まん持ってるんだ　召喚され
たときには俺が持ってたはずなのに」

「あぁ　羽入って娘がセイジに渡してくれって言ってた」

「ああ・・・そうか」

「しかしあの角は一体なんだったんだ　お前知ってるのか？」

「（角？　娘？　何の話？？）」
「ちょっとそこのへいみ「しらん　だがあいつは自称オヤシロサマだぞ」ちょっと　人の話をさ「そうかってオヤシロサマって言うと・・・ひぐらしのあの羽入か！！」（このサイト君はちょっとオタ入ってます）・・・あんたたち～いいか「（オヤシロサマ？？　ひぐらし？？　一体何の話なの？？？）」あんたまで心の声で乱入してんじゃないわ「おお　そうだ　マスター　このにくまんっつうもんを食ってみんか　結構美味しいぞ」いいかげ「美味しいの？」「ああ　旨いぞ　どれ　食ってみ」「あらそれ美味しそうねぇ　私にもくださいな（キュ）」「いいか　マスター」「いい　はむはむ　もきゅもきゅ　ごくん　彼女は私の親友」「マスターに礼をいいな」「ありがとねタバサ　どれ　かぷ・・・嘘！！　何この味！！　信じられないほど美味しいわ！！」「なぁ　それは私も頂けないかね　ちょっと気になってしまってね」「いいか　マスター」「はむはむ　いい　あともう一つ貰って言い？」「いいぞ　はいよマスター　あと先生とサイトにも・・・あ　これで終わりだ・・・俺の分はあきらめるか・・・」「はい　これ」「いいのかマスター」「私が二個食べなければあなたの分は残っていた　私はあなたに返すだけ・・・でもこれ美味しいから半分しか返せない」「いや　半分もあれば十分だ　有難うマスター」「／／／／／／／きにしないで／／／／／／／」「（やべぇ　シャルが少し赤くなってる・・・テイクアウトしたいなぁ）」「ねぇ貴方達の名前は？」「俺はセイジ・キハラんであそこでにくまんにかぶりついてる奴がサイト・ヒラガ」「そう　これからよろしくね」「あぁ　こちらこそマスターともどもよろしく頼む」「しかしこのナィクルムランという食べ物は美味しいな　ふかふかのパンの中にひき肉と色々な素材を合わせた団子を詰め込んでいるのか」「先生　ナィクルムランではなくにくまんです」「そうか　これは肉まんというのだな」「はいそうですほ
「「「「「「「「いい加減に私の話を聞けぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」」」」」」」」

・・・その大声と巨大な爆発音が俺たちが聞いた最後の声だった

負傷者

サイト　セイジ　タバサ　キュルケ　コルベール先生

4　召喚　契約　肉まん（後書き）

肉マンバンザーイ

5　状況確認　（前書き）

・・・羽入再召喚

5　状況確認

誠司の意識が戻ったのは暗くなってからだった
誠司はサイトよりも早く気がついたようだ　だからサイトをたたき起こす

「おーきーろー！！」
そうサイトの耳元で怒鳴るとサイトが飛び上がる

「うわぁぁぁぁぁぁ　　ってあれ？　ここどこだ……って誠司じゃねぇか　お前も来てたのか　つかなんでここにいるんだ」
サイトは誠司に問う　そして誠司はこう答える皮肉をたっぷりこめて

「誰かさんが鏡らしき物に取り込まれながら助けをもとめていたんでねぇ　まったく　触るものには気をつけろと言ってあっただろうがコルァ」
「すまん・・・んでここどこ？」
サイトはまた誠司に問う　すると　そとにでてみなと誠司が答える
　そしてサイトと誠司は二人で外に出る・・・もちろん出入り口は知らないので窓からだ・・・

二人が外で見晴らしが良さそうな所に行ったところで誠司がこう言う

「上を眺めてみな」
「なんもないぞ」

と　サイトが何もないと答えたのでよく見てみろと誠司に言われ怒られた　そして

「つ・・・月が二つあるだってぇー！！」

「あぁ　始めて見たときは俺も驚いたよ　どうやら俺たちは異世界に来ちまった様だ・・・　しかし綺麗な月だよなぁ　空気が綺麗だから星もよく見えるし」

「ああ　確かにきれいだな～ってんなこと言ってる場合か！！　如何にかして帰らなきゃ」

「どうやってだ」

「え？」

「どうやって帰るのか聞いてるんだよ　帰り方なんて誰もわからんと思うぞ・・・・・まぁ俺たちの後ろでこそこそ話を盗み聞きしているハゲと幼女とマスターならしってるかもな」

サイトにそう言いながら誠司は後ろの城壁に隠れている3人を指差す　5秒ほどしてコルベールとルイズとタバサが出てくる

「なんで私たちが聞いてるのが分かったのよ！！」

とルイズが金切り声を上げながらきいてくる

「なんで説明せねばならん？」

「ハァ？？？」

「何故御前なんかのために説明せねばならんのかと言ったんだ」

「あっ！あんたねぇ私はヴァリエール家の3女なのよ！！　その私に対してそんな口聞いて良いと思ってんの！！！」

「だからどうした　俺の情報は主人にしか話さん！！」

「なっ！！」

そういうと誠司は沸騰しているヴァリエール家の3女に対してこう言った　そしてルイズがそれに対して反論しようとしたところでコルベールが二人を止めた

「ミスヴァリエール　少し落ち着きなさい」

「でも」

「私は落ち着きなさいといいましたよ（怒）」

「わか…り…ました」

「ええと　君の名は？」

「ども　平賀才斗です」

そう言いサイトが簡単に自己紹介をすます　そして沸騰しているルイズに謝る

謝ったときルイズは何もこちらの話を聞いていなかったがこれが俺らの居た国の敬語だと言うと（ウソ）少しおとなしくなった・・・ルイズも名乗ったのはいいがサイトはその長い名前を覚えきれないと思うぞ・・・俺はちゃんと記憶しているからいいんだよ　それにおれの主人はタバサだしな

そしてコルベールがどこの国の出身か聞いて来て誠司がこの国の言葉でたとえるなら東方だと答えた　そしてすぐにこの国に知り合いが居るかどうか聞いてきたから居ないと答えると使い魔として彼女らに仕えないかと聞いてきた　その提案に誠司は乗ったがサイトとルイズが何かしらごちゃごちゃ言ってきたが誠司が

「異国に急に呼び出されて頼れるものが何もない以上その使い魔と言うものになるしかないぞ　それともサイトはサバイバル生活が出来るのか？」
と聞くと俯き了承した

そして誠司とサイトは使い魔になった

「ところで君たちは使い魔が何をするために存在するか知っているかい？」
とコルベールが聞いてきたので二人は首を横に振った　コルベールはルイズとタバサに説明しておく用に言いつけるとどこかへ去っていった

程なくしてルイズの部屋で説明をすることとなったのでルイズの部屋へ向かった　ルイズの部屋に入って少ししてから使い魔についての説明を開始した

どうやら使い魔は主に三つの役割を果たせばよいらしい　だがそのうちの二つの視覚共有と秘薬の素材の回収は出来ない上３つ目の主人を守る事らしいがルイズはサイトの力を信用していないっぽいよってサイトは雑用係として使える事になった

俺はその場を離れ

「部屋へ案内する　着いて来て」

「わかった　マスター」

そして案内されタバサの部屋へ着いた

タバサの部屋へ来た俺はタバサに自分の能力のについてはなし・・・始める前に

「さて・・・　お～い　羽入さんや～ちょっときてくれ～」

と叫んだ

・・・変化はない　シーンとしている　とても恥ずかしいことをしたと後悔していたところで

「・・・頭・・・大丈夫？？・・・そんな事はいいから早く話して」

と　タバサが言ってきた　そして俺はすぐさま体育座りシーケンスへ移行しようとしたところで半透明の羽入が空から舞い降りてきた

「あうあう～よんだのですか～」

「あぁ　ちょっと聞き忘れた事があってな　ステータスってどうやって表示するんだ？」

俺は羽入に聞くと念じてみてくれと言われ　念じてみるとステータスが出てきた

木原誠司

ＭＰ　？／？

状態　普通

ＳＰ　１００

と出てきたがすぐに俺は羽入になぜＳＰが１００もあるのか説明を求めた　すると羽入は神様がソレくらいくれてやれって行ったらしい　羽入は反論したが極上しゅーくりーむにつられたらしい　そう聞いて俺はこのＳＰの使い方についてたずねたすると

「ステータスの横にあるＳＰの項目を触るといいのです」

と言ってきた　俺は空中に出ているステータスのＳＰの項目に触ると画面が瞬時に変化した

そして俺はその変化した画面を眺める　項目には

武器　防具　能力　人物　その他　と出ていた

俺はその中の人物をタッチしてみるとずらーっと作品名が並んだ

　するとその中には有名なものではＦａｔｅやドラゴンクエスト

バイオハザードなどがあり　その中のＦａｔｅをタッチしてみると
キャラ名がまたずらーっと並んだがＳＰがとてつもなく高い　全体
の平均が５００００００ＳＰとか　まじたけぇ　バーサーカーなんて
１０００００００ＳＰだった

予想道理だったけどＷＡＫＡＭＥ（１）と三人娘（格１０～５０
多分癒されるからだろう）は低かった（藤ねぇは以外に高かった
あと赤い悪魔は低かった　多分経済面で役に立たないからとここ一
番でミスをするからだろう　　この世界のメイジよりかは強いと思
うのだが）

さてそんなこんなで色々と確認していったのだがいまだに何もＳＰ
を使っていない　そして最後の能力のバーをタッチしてみた　　す
るとまた作品名が現れた　そしてその中にドラクエのシャナクがあ
った

「このルーンってシャナクで洗脳の部分だけ消せんのか？」

俺はそう羽入に聞くと羽入は出来るのですよ～と答えた

俺はつい獲得ボタンを押してしまった・・・が

「あうあう～でもＤＱの呪文などは「ポチッ」一回限りしか使えな
いのですよ　あうあう～　　って聞いているのですか？　それ７５
ＳＰですよ～ってあう～？」

俺は羽入の話も聞かずに押してしまったのだ　結果　残りが２５Ｓ

Pとなってしまった

「・・・まぁいいや・・・洗脳解けるし・・・ってマスター？　大丈夫か？」

・・・返事がない・・・どうやら気絶しているようだ・・・しょうがないから俺はタバサをベットへ寝かせサイトのところへ向かった

5　状況確認　（後書き）

シャナク独自解釈

ワカメ哀れ

設定（前書き）

誠司君の設定

5／8　追記&改稿

設定

きはらせいじ
木原誠司（１９）♂
能力　召喚　装備　融合　？？？　ステータス確認
好きな作品ははゼオライマーとガンダム第０８小隊とマブラヴ。
転生後の外見はシークレットゲームの高山さんっぽい感じ。味方には優しいが敵には容赦ない　過去に味方であっても敵対するならば殺す。

誠司にとっての敵味方の基準とは自分に好意的に接するものや恩を感じているもの＝味方・自分や味方、知り合いに危害を加えようとするもの＝敵である。なおタバサには絶対敵対しない

羽入のご利益で肉体強化（１．５倍）戦闘技術強化を得ている

今のところの装備は（圭）スーツとプラズマカッター（未だに使用してない　つか使用する機会がない）
神のせいで死んで神のお得な転生プランにのってしまい転生した男。まだ何か能力があるらしい。サイトとは悪友　今のところの目標はタバサ母とカトレアさんの救助　でもカトレアさんはまだ考え中
ルイズは嫌い　タバサ大好き
能力　詳細
ステータス表示
ステータス表示と念じると自分の目の前５０ＣＭ当たりに表示される
ＳＰを使い能力を獲得したりアイテムを入手したりできる
装備
機体を自分の体に合うサイズに変換させ　鎧や武器として使うこと

ができる
全て出す事もできるし一部のみ（例えるならケンプファーの肩のスパイクだけとかアッガイの腕だけとかもできる
ただし装備するためには機体を登録せねばならない
再登録したい場合は登録されてある機体を解除しＳＰを使って機体を購入する
購入した機体は保存される
機体最大登録数は１０である　初期段階では０　レベルが上がりこの能力を覚醒させたときに１つ増える
なおセイジは知らないが登録数が２つ以上存在する場合強制的にゼオライマーが登録される
パワーノードを使うことにより機体登録数を１ふやせるがその他に機体の強化も可能（メイオウ攻撃の範囲拡大とかｗｗｗｗ・・・・・・ガクガクブルブル）
融合
登録してある機体に融合できる　融合と装備の違いは以下の点である
強制的にフル装備である　格部位が切断された場合　その機体のみ傷を負う（腕を切られた場合　その機体の腕の部分の装備が出来ない　ゴーレムとして出しても腕は無い）
消費する魔力は３倍　ただしその機体は全力が出せる
融合時に機体の大きさが変化する事がある　最大５０Ｍ
自分のレベルで制御できない機体がある　ソレを無理やり使用した場合　暴走し　制御不可になる
融合は装備状態から移行させて起動する　装備をすっ飛ばして融合は出来ない
なお使用した場合肉体に負荷が発生する場合がある
召喚

登録していない機体を遠隔操作で起動できる　使用制限はないが使用してる間装備と融合は使用不可になる　最大召喚数は機体登録数－1である　なおゼオライマーは召喚不可

なお全ての能力に関して言える事だが破壊された機体は修復されない

なおこれ能力は神のお得なプランに契約して入手した物である　一応ルールブレイカーで契約破棄可能

ちなみに今のところの機体スペック

B3グフ

全長1・8M
重量　オーク鬼4個分くらい
推力　シャルのフライの3倍の速度
武装
ヒートサーベル
ガトリングシールド
ザクバズーカ
ザクマシンガン
クラッカー

補則

マジンカイザー

全長　２・５Ｍ
重量　オーク鬼７個分くらい
武装
光子力ビーム
ターボスマッシャーパンチ
ギガスミサイル
カイザーブレード
冷凍ビーム
ルストトルネード
ファイヤーブラスター

続々追加してく予定ＤＡ

設定（後書き）

設定こんなもんかなぁ？？

6　起床　説明　薪割り

ＡＭ０１：３０
あの後俺は大体自分の能力を確認した後ルイズの部屋に行った　・・・何故かサイトがルイズの部屋の前で寝ている

俺はサイトを起こして何故そこで寝ているか聞き出した
そしてルイズが言うには寝る場所は自分で確保しろと言う事だったので俺は寝ぼけていたサイトを連れてタバサの部屋にいき事情を説明し許可を貰・・・えなかった（性格には寝ていて寝顔が可愛くて起こせなかった）のでＳＰを３消費してと寝袋を二つ入手しサイトを寝袋の中に押し込み（サイトが寝言で兄貴～や歪みねぇなぁとかいってたような気がしたのだがきっと気のせいだろううんそうだそうにちがいない）

途中まで見ていた能力メニューを見始める・・・あとすでに洗脳は解除しておいた　サイトのも解除しておきたかったがポイントが高すぎるのでやめておいた　俺が今必要としているものを使うためには節約せねばならない　俺が今必要なのは
　　ルールブレイカー　　アヴァロン
破壊すべき全ての符　全て遠き理想郷　　だ　俺はこいつを使っての解呪と治療が一番いいと思っている・・・のだがこいつはポイント数がとても高いのだ
５５００ＳＰであるブレイカーは１０００だがアヴァロンは４５００である　ＳＰためなければどうしようもないのである　あと羽入が言うには「ＬＶうｐで１００ＳＰ追加なのですよ～あふあふあふ～ぼくもうねるのですぅ～　おひゃふみなのれすへいり～」と言って寝てしまった　あと実体化　可視化　不可視化は全て出来るらしい　俺はうまく言いくるめて羽入を偵察係として使うつもりだ　・・

・そんなことを考えながら俺は眠っていった
ＡＭ０５：４５
いつも道理の起床だった俺は日課として毎朝１０Ｋほどランニングしている　もちろんサイトも一緒にやらせてる　本人は反抗しつつもちゃんとついて来るので体力は高いし持久走もけっこう上のランクに入っている　なのでいつも通りサイトを起した

「おきろぉぉぉぉぉぉ！！」
俺はそう叫ぶ　そしていつも通りサイトが起きる・・・おまけにタバサも起きる・・・俺はタバサだけを寝かしつけた　そして
「・・・いつも通り快適な目覚めを有難う」
どういたしまして　さぁいつも通り走るぞー　と心の中で思っていたところでサイトの様子がおかしい事に気がついた
「・・・やっぱファンタジーの世界に来ちまったんだなぁ・・・でもどうして俺はこんなところにいるんだ？？？」

どうやらサイトは昨日の夜の記憶がないらしいなので俺が説明してやった　そしたらサイトが
「有難な　　んでどこにこんな寝袋があったんだ」
サイトは興味心身のようだ　俺はこう説明した
「多分このルーンの恩恵だろうな・・・昨日の夜に気がついたんだ　いちおうサイトには教えておこうと思ったんだがな・・・脳がちゃんと働いてないみたいだったから今説明してるとこだ
んでこのルーンの効果は翻訳と収納っぽい　あとは分からん　後何個かありそうなんだがなぁ　まだ全部翻訳してないんだよ　あと少しで何かが分かるんだがなぁ」
俺は嘘の説明をした　そしてサイトはソレを信用している　少し辛いな　でも本当のことを話すわけにもいかんしなぁ
「そっかなるほど　誠司の能力は物置につかえそうだな　ははは」
「ふっふっふ　そうだな　物置か・・・使えるよなこれ」

俺はそう返答した　そして　「んじゃランニング行くぞ」　サイトにそういうとサイトはいやな顔をしつつも俺の後ろに付いて来た・・・・・ちゃんと走りこみもしたよ　サイトは少し疲れてるっぽい
俺？　少し疲れてるぐらいかな　あと走ってたらなぜかレベルが上がった・・・どうやらあらゆることで経験値がたまってるみたいだ

走り込みが終わって部屋に戻る途中タバサとキュルケとルイズが一緒に走っていた・・・どうやらこれから授業があるらしい　サイトと俺は強制的に連行された

そして

授業が始まった

時間ぎりぎりで間に合った俺達はまだ先生が来ていない事で安堵しているマスターたちに何の授業があるか聞いた・・・錬金って・・・どうやら爆発エンドらしい・・・俺はサイトに小声で

「ルイズが魔法を使うときには気をつけろ・・・爆発するぞ・・・」

「はぁ　魔法ぅ？？爆発ぅ？？」

・・・小声で言ったのにこいつは普通の声で言いやがった・・・当然ルイズが反応する

「・・・てめぇ・・・わざわざ小声で言ってやったのに・・・もういい　知らん」

「・・・どうしたんだセイジ？？」
「なんでもない」
「そう・・・か　わかった」
そんな事を話していたら教師・・・シュヴルーズ先生らしき人が入ってくる・・・と同時にざわめいていた教室が静まり返る
俺はこっそり抜け出した・・・そして5分位して爆発が起きた
それから先は知らない

そして放浪しているとシエスタに出会った
「ようシエスタ」
「セイジさんですか」
「ああ１００％セイジだよ　見りゃ分かるだろ」
「ふふふ　そうですね　ところで何をしているんですか？」
「何もしてないよ　ただふらついてるだけさ」
「そうですか　では私はこれで　薪割りの仕事があるんです」
「・・・薪割りか・・・手伝おうか　コレでも薪割りは結構やってたぞ」
「いいんですか・・・でも・・・ではお願いしていいですか？」
「もちろんさぁ」
そういいシエスタについていく・・・
「これかぁ」
「ええ　これです　本当にいいんですか　これ結構重労働ですよ」
「任せろ　」
「ではお願いしますね　私は厨房に居ます　終わったら呼んでくださいね　御礼に食事を用意しますから」
「分かった　ありがとな」

「それはこちらの台詞ですよセイジさん」
そう言いシエスタが厨房のほうへ駆けていった

さて・・・やりますかぁ
そう言い近くにあった斧を掴み薪を割り始める俺だった

6　起床　説明　薪割り（後書き）

兄貴ぃ　アアアアニィィィィィィキィィィィィィィィィィ！！！ｗｗｗ

7　続　薪割り　そして戦闘へ（前書き）

眠い眼をこすりながら書き上げた一編！！

色々気にしないでください！！

7　続　薪割り　そして戦闘へ

「何をしてるの？」
集中して薪割りをしていたので気が付かなかった・・・
「どうしたマスター　何時からそこに居たんだ？」
「あなたの姿が見えたから来てみた　何故薪割り？」
「あぁ　これか　仕事をしてるんだ　薪割りをする代わりに飯を貰うんだ」
「食事なら用意するけど」
「・・・まぁただの自己満足なんだがな　なんか働いた後の飯って旨いし」
そう言いながら薪を割ろうとする
「・・・それってどうなの？楽しい？」
「・・・まぁ楽しいっていや楽しいかな」
「じー（斧を凝視して）」
「・・・やってみたいのかマスター？」
「・・・こくん（頷いた）」
タバサがやりたそうなので斧を渡す・・・そしてよろめいて・・・持ち堪えた！！
「・・・大丈夫なのかマスター？」
「大丈夫　問題ない」
「・・・ならいいがっと危ないな　ちょっと貸してみ　えとまず足を固定する　そして胸を張るように振りかぶり・・・貯めて・・・貯めて・・・振り下ろす！！」
パカーン！！
いい音がして薪が縦に割れた
「っとこんな感じでやるんだ・・・どうしたマスター　何故俯いてる？？」

「張れる胸が無い場合どうすればいい・・・」

「・・・・・すまん　胸を張るのは忘れてくれ」
どうやらタバサは貧相な胸が気にい「「「アイスニードル！！」」」
ちょやめて刺さる　刺さるってば
「とりあえずやってみるといい　ほれ」
斧を渡す
「・・・足の固定　振りかぶって・・・貯めて・・・貯めて・・・
振り下ろす！！」
ヒュン　ドスッ！！

そして薪は・・・割れなかった　薪には傷一つ入っていない　そして斧は・・・俺の足元に刺さってた・・・

「失敗　次はちゃんと殺る」
「まてぃ！！今の不吉な単語なんだ！！マスター！！俺を殺す気か！！」

「あなたは死なないわ・・・・・・死に掛けても私が治すから（満面の笑顔ＤＥ）」

「いいいいいいいいやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
そして俺は逃げ出した・・・シャルがフライを私用して追ってくる
「何故逃げるの？？ちゃんと殺ってあげるのにぃ」
「やぁぁぁぁめぇぇぇぇぇてぇぇぇぇぇぇ！！　」
逃げる　逃げる　逃げる
・・・どうやら逃げ切れたようだ・・・

そして場面は変わり昼過ぎ辺り

昼食をいただいた俺とサイトは何か礼をしたいといいシエスタはデザートの配膳を手伝ってくれと言ったので俺たちは今デザートを配っている・・・と　シエスタが金髪自称バラ男になにか言われてる
　どうやら原作通りに香水を拾って二股がばれたのをシエスタのせいにしているみたいだ　　ごちゃごちゃ何かを言ってくるナルシストにサイトがこう言った
「なんだ　二股をかけた貴様が悪い」と
案の定ナルは怒り「貴族に対してそのような口を利いていいと思っているのか」といい　原作通りこう言った

「諸君　決闘だ！！！」　　と

決闘フラグが立ってしまった　どうする？
　たたかう
　逃げる
ニア着替える

と言う事で俺は戦闘に備えて羽入にもらった圭スーツを装備する
ヘルメットは装備しないでヴェストリの広場に向かった

〔サイト〕

（きにくわねぇ　なんで香水を拾ってやったシエスタがあんな風に言われなきゃならないんだ）
俺はそう思いながらヴェストリの広場って言うとこに誠司と共に行った　行ったところは昨日俺たちが召喚された広場だった
ついた途端金髪が
「これより決闘を開始する　僕の名はギーシュ・ド・グラモン　二つ名は青銅のギーシュだ　」　そう言ったのでこちらも名乗ってやった
「そうか　俺の名はセイジ・キハラだ　」
「俺はヒラガ・サイトだ……ってセイジ　なんで苗字と名前が逆なんだ」
俺はセイジに聞くがセイジはこの国の流儀に則っただけだと答える
そしていざ決闘を始めようとするとルイズが邪魔をしてくる
「なにやってんのあんたたち！！」
そう言ったがセイジが
「決闘だ　見れば分かるだろう」　といったらルイズが「何でそんな事してんのよ！！今すぐやめなさい！！これは命令よ！！ギーシュもよ！！　決闘は禁止されているじゃない」
「ああそうだ禁止されているな　だがルイズ　それは貴族同士の決闘であって平民と貴族との決闘が禁止されているわけではないだろう　それともなんだ　君はその平民に恋しているとでもいうのか」
「なっ！！」
「これは俺たちの問題だ・・・部外者は口を出すな　早くやろうぜ」
セイジがそう言う
「そうか　ではどちらが先だ？　僕としては二人まとめてでも言いのだがね」　ギーシュは余裕そうな顔をしてそう言った　セイジが何か言おうとしたが俺が
「二股野朗なんか俺一人で十分だっつーの　セイジはそこで見物してな」　と言ったのでセイジはしぶしぶ引き下がる　決闘が出来なくなったのでふてくされている

「ではやるぞ　出ろ！！　ワルキューレ！！」
ギーシュがそう言い　薔薇を象った杖を振ると地面から深緑色の甲冑が出てきた
「なんだそりゃぁ！！」
俺はそういうがギーシュは
「僕はメイジだ　だから魔法を使わせてもらう　いけっ！！ワルキューレッ！！」
そう言いギーシュが操っているであろうゴーレムを俺の正面まで走らせた

ブンッ！！

という風切り音を発するほどの速さでゴーレムが青銅の拳を繰り出す　もちろん俺はとっさに反応できるわけもなくゴスッ！！と鈍い音がし「あぐっ！！」と唸り声を上げながら後ろに１Ｍほど飛んで背中から落ちた
「どうした？平民　もう終わりか？」　ギーシュは相変わらず余裕を持ってそういってきやがった　だから俺は

「っはっ！！　てめぇの人形弱すぎ　ちゃんと操れてんのか？」
「貴様ぁ！！　じわじわとなぶり殺しにしてやる！！」
といってまたもやゴーレムで俺の事を攻撃し始めた

殴られて殴られて倒れて立ち上がって蹴られて倒れて立ち上がって反撃して自分の体を負傷させて・・・そんな行動を何回も繰り返して俺は倒れた・・・まだ辛うじて意識がある状態だった

そんな俺にルイズが近づいてきて俺とゴーレムとの間に立ってこう言った

「もうやめてギーシュ！！　サイトはもう限界よっ！！」
ルイズはそういうがギーシュは非常にもこう言い放った
「そうか　やめてほしいのかい　ならその使い魔に土下座させて（すみませんでしたギーシュ様）と言わせたらやめてあげよう」
「なっ！！」
「それともなんだ？　ゼロのルイズは使い魔に命令すら出来ないとでも言うのかい」

その一言で俺は切れた
「いい加減にだまれよ　糞野朗」
「なっ！！」
ギーシュが驚きワルキューレを構えさせる　俺はそんな事にかまわず言い続ける
「なぁルイズ　俺は元の国へは帰れないんだろう　生きていくためには　洗濯だってしてやる　どんな命令でもきいてやるよ　生き残るためだしなぁ　・・・・・・でもなぁ下げたくない頭だけは下げられねぇんだよ！！！うがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
そういってやつに立ち向かおうとしたが突然目の前に刀身が下に向いている奇妙な形をしたナイフ・・・グルカナイフが突き刺さった
　ナイフが突き刺さった直後セイジが
「サイト　ソイツを貸してやる　思う存分切り刻め！！」
セイジがそう言い地面に突き刺さっていたナイフ（多分セイジが持っていたやつだろう）を手に取り引き抜く・・・ナイフを引き抜くと同時に俺の意識は消えた

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

7　続　薪割り　そして戦闘へ（後書き）

眠い眼こすりながら書くもんじゃないね！！

8　戦闘　第二試合開始

サイトがナイフを手に取ってから動きが早くなった

尋常ではない速度でゴーレムの膝間接を切り裂き体制を崩させる
ゴーレムは何とか切り裂かれた足で体勢を整えようとするがサイト
がゴーレムの後ろに回りこみ体重の乗せて蹴りを打ち込みゴーレム
を前に転倒させる　周囲が唖然としている間にギーシュに近づいた
　やはりサイトはガンダールヴみたいだ　だがサイトの眼に光が映
ってない・・・まるでヤンデレのようだ
そしてサイトが光の映ってない眼でギーシュを見ながら悪魔のよう
に微笑んだ

「う・・・うわぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」
その顔に恐怖したのか　または戦闘力に恐怖したのかは知らないが
ギーシュは残る全てのゴーレムを作りサイトに突撃させようとした・
・・が遅かった・・・全ての戦乙女が出現したときにはすでにサイ
トがギーシュの杖を切り裂いていた　肉体を維持できなくなったの
か切り裂いてからすぐゴーレムらは崩れ始めた

サイトが光の映っていない眼でこう言い放った

「まだ・・・やる・・・か 」

「いや　僕の負けだよ 」
そして決闘は終わった・・・・・・かに思えた

「あはははは！！貴族に逆らう平民め！！　死ぬがいい！！」

そう言い取り巻きの一人・・・ヴィリエ・ド・ロレーヌがウィンド・ブレイクを放つ
そしてそれはサイトに当たるはずだった・・・が急に射線に出できた奇妙な奴・・・圭スーツを着たセイジがサイトの変わりに攻撃を受け止めた
バシュッ！！「ぐおぅ」
そう叫び1歩下がる
するとヴィリエが
「バカな　ウインドブレイクを受けて少し下がっただけだと！！」
　ルーンとご利益のおかげで俺の体は肉体強化1．5が重複している　それは1．5＋1．5＝3である

つまり今の俺の身体能力は3倍なのである　ついでに今は圭スーツ着てるしね　そんな状態だから今の俺には風ライン魔法程度は効果が大して無いのだ　そして俺は奴に聞いた
「・・・何故不意打ちをした？」
そういうと奴は
「ん？　あぁ　友の敵討ちだよ　それに貴族に歯向かう平民なぞ要らんからね　殺そうと思っただけだよ」
俺はその人の命をなんとも思っていない発言を聞いて怒った　だが

ヴィリエは止めることなく言い続ける

「あはははは　そういや君はあの人形の使い魔だそうじゃないか
人形に操られているからか知らないけど使い魔の躾が成ってないみ
たいだねぇ　どれ　ここはこのボクが平民に躾をしてあげますか」

切れた　　俺は瞬時に能力メニューを表示しある能力を購入する

（一回限りの強制融合）
一回限りでのランダムで選択された機体が強制融合される　この能
力で使用した機体は強化でしか入手できなくなる　高確率である機
体が出る　この能力で使うＳＰはレベルに比例する
必要ＳＰ　２０
ーーーーーーー
―　購入？？？―
ーーーーーーー

俺は迷い無くその購入ボタンを押した・・・・・・

俺は怒りをこめて奴に言い放った

俺はソレを購入した後すぐにヴィリエの居る方に体ごと向き

「貴様に決闘を申しこむ！！マスターを侮辱した罪・・・その体で払って貰うぞ！！」

決闘を申し込んだ　そしてヴィリエが受けて立つ

「ッハッ！！　貴族に逆らう事の愚かさをその身に叩きこんでやる！！」

そして奴が杖を構え　詠唱を開始する

俺はその間に奴に聞いておく

「なぁ　殺すのは有りか？？」

俺はそう奴に聞くと奴は

「当然だ　でなければ僕かおまえを殺せないじゃないか！」

奴はそう言う　そして俺は野次馬に対して大声で

「貴族共！！　聞いたか！！　こいつは今自分が死んでも良いと言った　貴様等が証人だ！！　では決闘を開始する　ルールは相手が死ぬか　杖の破壊だ！！」

そう言い俺も詠唱を開始した　俺が詠唱するのはただ一言　脳に流れ込んでくるコトバを言った

「発動　強制融合」

詠唱が完了したと同時に俺の肉体から鈍い光があふれて来て次の瞬間変化した

「さて・・・第二ラウンドの開始だ　覚悟しろよ」

ＳＩＤＥＥＮＤ

〔学園長室〕

コンコンとドアをノックする音が響く　ワシは「入りなさいと告げ　自分の机の下で待機させてあるモートソグニルに伝令を飛ばす…　…すぐ隣に居る秘書のミスロングビルの下着の色を確認して来い…　…と　そして伝令を飛ばし終わった時点でコルベールが何か激しく言っているのに気が付いた

「なんじゃの　えぇと　　コッパゲール君？？」

「コルベールです学園長！！　それより大変なんです！！　この文献を見てください！！　」

コッパゲール・・・コルベール君はそう言いわしの机の上に何か分からん本をドスッと置いた　おいおい　モトーソグニルが怯えるじゃろ　そう言おうとして事の重大性を悟った　そして

「スマンがミスロングビルは退室してもらえんかのう」
ワシはそう言うとロングビルは部屋を後にした・・・そしてサイレントをかけてコルベールと話し合う
「して…あの少年たちのルーンはどうじゃった・・・」
ワシはそう言い　コルベールが
「はい　やはりあの少年はガンダールヴです　・・・もう一人のほうのルーンはまったく分かりませんでしたが」
コルベールはそう言い王室へ報告するべきだとわしに言ってきたが　ワシはそれを却下した　そしてまたコンコンとノックする音が鳴る　ワシは放置するわけにも行かないのでまた「入りなさい」と言った　すると
ミセスシュヴルーズが入り　ワシにこう告げた

「学園長　生徒たちがヴィストリの広場で決闘を行っています　眠りの鐘の使用許可を求めます」
「そうか　ではどの馬鹿が決闘なんぞやっとるんじゃ？」
わしはそう聞くとシュヴルーズはギーシュとルイズの使い魔が行っていると告げた　ワシは子供の決闘ごっこに使う秘法は無いと言った　そしてシュヴルーズが退室してすぐに遠見の鏡を使いコルベール君と一緒に鏡を覗き込んだ

そして彼らが見始めたのはちょうどサイトが反撃し始める所だった

SIDE END

8　戦闘　第二試合開始（後書き）

「・・・私の出番が無い」
「すいません」
「ごめんですんだら衛士はいらない！！」
「ちょ！やめ！アーーーーッ！！！」

9　二戦目開始　終局（前書き）

ヒャッハー

汚物は消滅だー！！

・・・・・消滅させてよかったかな？

9　二戦目開始　終局

「発動　強制融合」

詠唱が完了したと同時に俺の肉体から鈍い光があふれて来て次の瞬間変化した
その体は膝から下と腰　上半身と肘から下がが黒く鈍い輝きを発していた　その太い腕は螺旋を象ったような装飾がしてある
そしてその胸には悪魔の羽を象ったような放熱板・・・ファイアーブラスターが存在している　その中央には金色の円と三角形を二つ組み合わせたような装飾がしてあった　その円の中央には赤い紅玉がはめ込んであり中に文字が浮かんでいた　ハルケギニアの人々では理解できないであろう英単語

操縦者の完全制御下に有るという意味を込めた印・・・「Z」の文字が

今のセイジのカラダを見てこの場にいる全員がこう思っていた
まるで悪魔のようだ・・・と

そして周囲がセイジが発している殺気を感じ取っている間にセイジは完全にソレに同化した

この瞬間　セイジは変化した・・・

神をも超越し　悪魔をも倒せる存在に・・・そう

魔神皇帝（マジンカイザー）へと

そして　皇帝の出す殺気を感じ取れなかったヴィリエが先に仕掛けた

「ははははは　たかが姿が変わっただけじゃないか　驚かせるんじゃ

ない平民風情が！！！　エアハンマー！！」
ヴィリエはセイジの変身した姿に驚いたのかそう言いエアハンマーを放ってきた　その風はたとえるなら暴風を圧縮した巨大な鎚だった

それがいまだ沈黙している皇帝に命中した　それが当たるドゴン！！と鈍い音を発し　同時に皇帝の周りの土を舞い上げる　その風は直撃すれば肉は裂け骨を粉砕させ　並の人間なら即死するであろう強力な一撃だった

だがそれはあくまで普通のニンゲンに対して放った場合である

ヴィリエは勝利を確信していた　あの一撃は自分にできる最大の攻撃だったし込められるだけの魔力を込めた自身の最強の一撃だったからだ　突然現れたあの鎧がどのような強度を持っていてもこの一撃を食らえば確実に死ぬだろう・・・そう思っていたのだ

「はははは　ほれみろ　人形の使い魔風情が貴族たるこのボクにかなうわけ無いじゃないかあはははは」
だがその期待は１０秒後に絶望へと変わった

その場には全くの無傷を保ったままの皇帝の姿があった

「・・・・・・」　と皇帝が何かをつぶやいた　直後
バシュッ！！！　という音と共に
ヴィリエの杖を持っている右手が消し飛び・・・その後方１０Ｍ後に二つの穴が出来た・・・その穴は熱で融解して出来た穴だった・・・
「えっ」
そんな腑抜けた声を上げながら再度ヴィリエは詠唱を開始した・・・だが詠唱が終わっても何も起こらない　当然である　メイジの魔法は杖を媒体として魔法を発動させている　その媒体である杖が腕ごと消滅したのだ　魔法が唱えられるわけが無い
そして
「う　アアアアギャァァァァァ　腕がぁ！！！　僕の腕がぁぁぁぁ！！！いいい痛いイタイイタイイタイイタイィィィィィィィィィィィ！」
そう言いながらヴィリエはのた打ち回る　右腕を押さえているが出血はしていない・・・そもそも熱で消滅させたのだから腕を押さえていても意味が無い　そんな事をするぐらいなら痛みに耐え予備の杖を出しフライか何かで逃げればよかったのだ
だが痛みで気が動転しているせいでヴィリエはそのことに気が付かない　そして皇帝が近づいてくる　そして皇帝はヴィリエの前１Ｍでヴィリエのことを見下ろしていた
皇帝の左肩から件の柄のような物が飛び出す　そして右手でそれを掴み引き抜く　瞬間　皇帝の肩から長剣　カイザーブレードが抜き出された
ヴィリエは悟った　自分は死ぬのだと　これが今まで自分が平民に対して行ってきたであろう行為に対する天罰であると　そして天罰を下す断罪者が始祖ブリミルではなくヒトの姿を偽った悪魔・・・
いや

魔神であると

そしてその魔神は右手に持っている長剣を空高く掲げた　そして終局を迎えんと剣を振り下ろそうとした　その時！！

「この勝負　セイジ・キハラの勝利とする　」

タバサが俺の勝利を宣言した　そして皇帝は振り下ろそうとする剣を止め・・・肩に仕舞い込んだ
そしてタバサに聞いた

「何故止めた　奴はサイトのことを殺そうとした・・・それにマスターのことを侮辱した・・・俺はこいつを許せない・・・俺の事なら侮辱されても耐えられるがマスターのことになるとそうはいかない」

「私は気にしていない・・・それに罰なら受けている・・・彼の右腕はきっと再生できない　それにこの決闘のルールは相手を殺すか杖の破壊・・・すでに彼の杖は破壊されている　殺す必要はない・・

・／／／あとかばってくれて有難う／／／／」
最後に赤くなりながらそう言う・・・皇帝は地面に這いつくばっているヴィリエにこう言ってやった

「我がマスターに感謝しろ！！糞野朗！！」　そういうと突然タバサが俺の方へ倒れてきた
俺はタバサを支え　体に以上が無いか調べた　どうやら眠っているだけらしい

ヴィリエは気絶でもしたのか皇帝の前１Ｍで寝ている　　周りを見渡してみると野次馬全員が寝ている　そして耳を澄ますと非常に高い音波をセンサーが感知した　皇帝はその方向に首を向けると　右手に小さい鐘のような物・・・多分眠りの鐘だろうを持っているコルベール先生が居た・・・そして俺はタバサの部屋に主人を寝かせに行った

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

〜コルベール〜

決闘を行っていた少年　サイト君の戦闘が終わって私と学園長は彼がガンダールヴであることを確信した・・・だがその後のヴィリエ君の放ったウインドブレイクを喰らっていながら１歩しか後退していないセイジ君の方が私として気になった
ウインドブレイクは成人男性を彼が知る最低出力で放った場合でも

３Ｍは吹き飛ばせるほどの威力を秘めている　最大出力では１０Ｍ以上をも飛ばせるはずである
そのウインドブレイクを喰らいながらも全く堪えていないセイジ君に対して私はヴィリエ君は勝てないと思っていた　それどころか下手をしたら彼の命は無いだろう　学園長も同じことを思っていたのだろう　私に宝物庫の鍵を渡し　いざとなったら眠りの鐘を使用しろと言いつけた　私は大急ぎで眠りの鐘を取りに行った　だがいつも置いてあるところに眠りの鐘が無く　探すのに３分ほど時間を使ってしまった　そしてヴェストリの広場について私は絶句した
ナニかがヴィリエ君の頭上で剣を掲げている
私はすぐに眠りの鐘を使用した　そして
「この勝負　セイジ・キハラの勝利とする　だからもう戦う必要は無い」
とミスタバサが宣言したと同時に倒れた・・・いや眠った
あの甲冑はセイジ君なのか　そしてそのセイジ君らしきモノはこちらに首を向け　動かなくなった

そしてその後ミスタバサを抱え　寮搭へいった

セイジ君は一体なんなんだ！！　ウインドブレイクを受けて数歩下がっただけだしなによりあの甲冑　！！
学園長が言うにはあの甲冑の眼の部分から何かが出てソレがヴィリエ君の腕を消滅させたらしいが・・・一体彼は・・・
コルベールの脳内はその事だけで満杯だった

9　二戦目開始　終局（後書き）

「た　大変だー！　親方ァ！　作者が暴走したァ！！」
「なんじゃと　Oズー　ちょっとお前作者ぶちのめして来い！！」
「親方・・・それ俺に死ねって事かよぉ！！」
「呼んだかね（作者）」
「おめぇは・・・作者か！！」
「いい加減にしてくれ作者！！これ以上裏方の俺たちを困らせないでくれ！！」
「裏方の事なんぞ知るかぁ！！　俺は俺の好きなように書・・・あがぁぁぁぁ！！」
「神の裁きを受けるのです～あうあう～」
「貴様ァ　貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様！！」
「死ねぇ！！！」
「アファァァァァァァァァァ！！」

リアルで見た夢・・・俺どしたらいいかな・・・

雑談　第一回　神《作者》との会話ＩＮ誠司

セ「セイジと」
サ「作者(神)の」
セサ「「ろく(裏話)でもない会話コーナー」」
セ「さて始まったな」
サ「始まったな　じゃねぇ！！　前回のあれなんだ！！なんか色々と申し訳ないだろ！！（ヴィリエに対して）いくらあの色々とうざったくて有名なヴィリエ君だけど！！大体片腕失ってもがいて逃げようとしてる相手に剣振り下ろそうとするとか・・・・・この鬼畜め！！」

セ「・・・あぁあの蛆虫か」
ヴィ「貴様ァ！！貴族であるこの僕の右腕を消し去った罪　万死に値するぞ！！」
さ「・・・なんか出てきたね誠司君」スティンガー君風に
せ「しょうがない・・・装備　皇帝！！」
ヴィ「・・・え　そ　それはもう装備できないはずじゃ！！」
さ「あぁ　固有結界　我が妄想(作者の暴走)の具現化使ってるからだよ」
せ「もう一度氏ね！！ギガントミサイル！！」

ドワォ！！

ヴィ「こんな扱いもういやだアアアアアアァァァァァァァ・・・・・」

せ「さて　邪魔者が居なくなったところで・・・感想の返信といきますか（皇帝状態で）」
さ「だな・・・えと空気扱いの光子力ビーム使ってるとこがいいみたいな感想貰いました・・・どんどんマイナーな武器使っていけばいいのか？？」
せ「いや　これはどっちかというと一応マイナーな武器も使ってくれということじゃないのか」
さ「なるほど・・・まぁ使う気だったけどね」
さ「しかし何であの時（前回の光子力ビーム後）大火力兵器使わなかったんだ・・・その方が受けがよかっただろうに」
セ「俺に殺人鬼になれと・・・あんなところでファイヤーブラスターとか撃ってみろ　熱で周囲が色々と終わるぞ・・・それにマスターも居るし」
さ「・・・んじゃブラスター撃ってた場合のシュミレーションでもしてみるか」
せ「やめてぇぇぇぇぇ！！」

前回の一部からスタート

そして　皇帝の出す殺気を感じ取れなかったヴィリエが先に仕掛けた

「ははははは　たかが姿が変わっただけじゃないか　驚かせるんじゃない平民風情が！！！　エアハンマー！！」
ヴィリエはセイジの変身した姿に驚いたのかそう言いエアハンマーを放ってきた　その風はたとえるなら暴風を圧縮した巨大な鎚だった

それがいまだ沈黙している皇帝に命中した　それが当たるドゴン！！と鈍い音を発し　同時に皇帝の周りの土を舞い上げる　その風は直撃すれば肉は裂け骨を粉砕させ　並の人間なら即死するであろう強力な一撃だった

だがそれはあくまで普通のニンゲンに対して放った場合である

ヴィリエは勝利を確信していた　あの一撃は自分にできる最大の攻撃だったし込められるだけの魔力を込めた自身の最強の一撃だったからだ　突然現れたあの鎧がどのような強度を持っていてもこの一撃を食らえば確実に死ぬだろう・・・そう思っていたのだ

「ははははは　ほれみろ　人形の使い魔風情が貴族たるこのボクにかなうわけ無いじゃないかあはははは」

だがその期待は１０秒後に絶望へと変わった

その場には全くの無傷を保ったままの皇帝の姿があった

「オ・・・オオオオオ」

「効いていないだと！！！バカな！！」

皇帝の双眼が黄色く発光する　そしてその螺旋を象った装飾が施されている両腕をヴィリエが居るであろう方向へと向け

「さぁ回避して見せろ・・・　タァァァボスゥマッシャァァァ！！！　パァァァンチィィィィ！！」

叫ぶと同時に皇帝の両腕が回転　直後　全員が自らの眼を疑っただろう　その両腕が回転しつつ射出　　火を吹きヴィリエめがけて飛んでいくのだから

そして皇帝が射出した右腕がヴィリエへと　左手が９０度真下に向き皇帝の目の前の土を堀り上げ撒き散らす　そして落下した土が周囲に降りそそぎ砂埃を引き起こさせる

「んなぁ！！　腕が飛ぶだと！！　だが遅い！！」

ギリギリのところでヴィリエが回避に成功　だがその回避自体が意味がなかった

「無駄だ！！　喰らえ！！　ルストォ！！トルネィィドォォォォォ（弱酸性ヴァージョン）！！！！」

皇帝の周囲で引き起こされた砂埃を掻き分けヴィリエが回避したと

ころめがけまるで竜巻を横にしたような乱風がヴィリエを襲った
そしてヴィリエが吹き飛ばされ後方に存在していた壁に叩きつけられ　地面に倒れる
「うぎゃぁ！！　くそぉ！！　オマエェ！！」
叫びながら立ち上がろうとする　そして直後絶望した

「どうした　立ち止まってんじゃねぇよ　そんなに死にたいのか
ならコロシテヤルよ」

「あ　あああ　ぅあああああああああああああ！！！！！」
ヴィリエが詠唱しつつ突っ込んでくる　俺は最大の攻撃でヴィリエに対抗する事にした

「うわぁぁぁ！！　ウィンディアイシクル！！」
この極限状況でトライアングルクラスに目覚めたのか知らないが奴はウィンディアイシクルを放ってきた・・・ってお前周囲の事考えてないな

「死ね　ファイァァァァァァァァ！！ブラスタァァァァァァ！！」

「うあああああああああああ！！！」
そしてヴィリエの蛆虫としての生涯は幕を下した

さ「こんな風になるけど」
せ「酷いね作者って」
さ「でも実行したのお前ｗｗｗ」
せ「まぁヴィリエだからいいんじゃね」
さ「因みにこの後コルベール先生と学園長来襲して戦闘　サイトのルーン解除してシャル連れ出して異世界へと逃げるようなプランも存在して居たんだよ」
せ「まじで　」
さ「でもその世界バイオハザードだけどねｗｗｗ」
せ「一瞬でも期待した俺が馬鹿だったよ！！」
さ「そんなに別の世界に生きたいのか？」
せ「こんな世界ごめんだね！！　こんな屑貴族しか居ない世界なんか嫌だよ！！」
さ「・・・なら読者に聞こう！！　さぁみんな誠司君を送り届けたい世界があったらアンケートを送ってね　出来る範囲で答えるからね（どこぞの教育番組風に）」
せ「・・・俺は一体どんな世界に飛ばされるんだ・・・」
さ「大ジョブ　行くとしてもキミの分身だし・・・それにバイオハザードの世界は確定してるからね」
せ「鬼ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」
さ「さて　そろそろ終わろうと思います　では皆さん　今後の誠司（笑）君の活躍に期待しやがれ！！」
せ「最後口調ヒド！！　つか（笑）ってなんだ！！」
さ「んじゃね」
せ「はなしをきけぇぇぇぇぇ！！」

雑談　第一回　神《作者》との会話ＩＮ誠司（後書き）

アンケートをとります

誠司君を送り出したい世界がありましたら感想に行いて送ってください

出来る範囲で誠司君を送り出します

あとこんな駄文を読んでくれて有難う！！

次回も世路死苦！！

１０　戦後　説明会　（前書き）

あるぇ～？
こんなんだっけ～
・・・まぁいいや～（，３，）／

１０　戦後　説明会

記憶をたどりながら何とかタバサの部屋に着いた
足でドアを蹴りあける・・・だって両腕がふさがってるし・・・
そんな事を考えながらタバサをベットへ入れ　羽入を呼んだ

「おーい　羽入ー」

すると羽入が呼ばれて・・・寝ていたのだろうか？？？とても眠たそうな顔をしながら出てくる　そして
「なぁ　羽入　何故こんなに一気にレベルが上がったんだ？？？っておい　お～き～ろ～」

・・・どうやら羽入は寝ているようだ　なので俺は羽入の耳元で叫んだ

「・・・羽入！！起きないとハバネロ入りシュークリームを喰うぞ！！」

そういうと羽入は飛び起きた

「はうあうあうあ～からいのはいやなのです～　はうあうあうあ～！！」

「・・・そこまで嫌か・・・まぁいい　おい　何故いきなりこんなにレベルが上がったんだ　答えろ」

「はうあう～セイジがひどいのです～まぁいいのです何故そんなにレベルが上がったかと言うとですね・・・そうしなければセイジ以外の人が皆死んでしまうからなのです」
「なんだって？？」
「だから～あのままだと暴走して皆死んでしまうから特例措置でレベルを上げたのですよ　かんしゃすればいいのです」
「・・・そうか・・・感謝する　んでポイントはっと・・・何故２０００も・・・１５レベ上がったから１５００なら分かるんだが「それは皇帝起動イベントとメイジ撃退イベントが同時発生したからなのですよ」・・・そうか・・・なら・・・ためとくかぁ
そんな事を羽入と話し合っているとベットのほうから物音がする・・・
「何話して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・どうした・・・・」
「どうしたのですか　どこか異常なところがあるのですか」
・・・返事が無い・・・ただの屍のよ「生きてる」・・・どうやらまだ生きてるらしい
「それはなに」　タバサが怯えながら聞いてくる・・・俺はまず能力について説明する事にした

「それは置いといて・・・まずは俺の能力について説明するよ　俺の能力はこれだ」

そう言い俺は装備する・・・カイザーではなくB3グフに・・・強制融合使ってたからもう使えないし

「あうあう～かっこいいのですよセイジ～」

「・・・さっきの姿じゃない・・・でそれは何??」

・・・二人とも反応が違うなぁ・・・まぁいいや

「これが俺の能力の一つ・・・装備だ・・・んじゃ後は羽入に聞いてくれ」

「羽入って・・・この浮いているこれの事??」

タバサはそういいながら羽入と距離をとる・・・あぁ　そういやタバサって幽霊とか苦手だっけ・・・しょうがない

「羽入!　ちょっと実体化してマスターに俺の能力の事を説明してやってくれ」

「あう～でも実体化するとお腹がすくのですよ～魔力もけっこう使うんのですよ～」

「ヤレ!!でないと・・・（目線をその他メニューのハバネロ入りシューに向けて）・・・ワカッタネ??」

「はうっ!!・・・わかったのです・・・あうぅ～」

そういい羽入が実体化・・・タバサが驚いている・・・そして羽入が説明を開始した

俺は羽入が説明してる間に残っている２００２ポイントで購入をすることにした・・・そして武器メニューの中の特殊カテゴリをクリック・・・ルールブレイカーを購入した・・・と同時に天井からジグザグと変な形をしているナイフ・・・ルールブレイカーが落ちてくる・・・刃を下に向けて俺の頭めがけて・・・って

「あぶねぇ！！！」

そう言い横に転がりよける・・・刀身が半分ほど床の木にめり込んでた・・・そして俺の後ろのほうで「ッチ！！」っと聞こえた気がした・・・テメェ・・・後で覚えとけ羽入！！　そんなこと考えつつメニュー漁りを再開した

そしてアイテムメニューでノードの特売セールスをやっていたから７個を購入・・・５００ＳＰだった　そして２つ登録用に使用　ゲッターとスサノオ四型を登録しようとしたが何故かゼオライマーが勝手に登録されていた・・・なので変わりにゲッターを装備した
二つをＢ３の強化に使用した（ブースト・バーニア・の出力倍化
攻撃力２倍）　そして余った５０２ポイントの中の５０ポイント残して全て能力につぎ込んだ

結果

ホイミの使用が可能になった　ただし魔力を使用する　１５０

思考伝達のスキルの入手　指定した人物との思考会話が可能になる
　設定したのは今のところタバサ　キュルケ　サイト　羽入だ　指定した人物同士なら俺が介入しなくても思考会話できる　２０

黒い軍用ブーツ（つま先と踵にチタン製の鉄板を入れてある）とヒートサーベル（Ｂ３仕様）　それに　防刃製の生地の下に対爆耐火使用の生地を重ねた裾が膝ほどまである黒いロングコート（ＢＩＯ３のネメシスのを想像すればいい　もちろん右肩は千切れていない）と　丈夫な藍色のジーパン・・・コートの下に防弾防刃製の黒いシャツ・・・そして黒いサングラス・・・そして購入したＳＰＡＳ１２メタルストック付きとスリングベルト　１２ゲージショットシェル１００発　スラッグ弾１００発　Ｍ７９グレネードランチャー（ベルトつき）と２０ｍｍグレネード弾を２０発を入手・・・弾薬をすぐ取り出せるように弾薬を装填済みのベルトを各一つずつ購入（ＳＡＰＳのほうは４０発　２０ｍｍの方は１０発装填されている）

これが今回入手した物の全てだ・・・なおタバサ用に黒っぽい青の防刃防弾対爆耐火仕様のコート（能力により重さは普通のコート並みになってる）　を送ってあげるつもりだ・・・こんなもんでも生き残るためには役に立つだろう

・・・そして待つ事３分・・・どうやら羽入の話が終わったらしい

「あなたの能力は把握した　あなたが異世界から来たというのも分かった・・・ところであなたの能力の中に心を直す道具や薬は無い？　もしあるのなら入手してほしい　条件があるのなら何でもする・・・だからお願い・・・母さまを助けるために力を貸して」

「わかった・・・マスターの母は俺が治す・・・だが二つ条件がある　一つは俺をマスターの正式な使い魔としてくれ・・・もう一つはマスターの名前を呼ぶ事を許可してくれ」

「・・・そんな事でいいの？」

「あぁ　俺はマスターの名前は知らなかったからな・・・そもそもマスター自己紹介してくれなかったし・・・まぁ名前は分かったけど勝手に読んでいいのか分からんかったからなぁ・・・」

「・・・そういえば色々あって名前言ってなかった・・・ごめんなさい」

「いやあやまらんでくれ・・・俺が名前を聞けばよかったんだから」

「そう・・・私の名はシャルロット　シャルロット・エレーヌ・オルレアン　」

「あれ　聞いたのはタバサって名だったんだが・・・」

俺は本名を知ってはいるが知らないふりをする

「タバサは偽名・・・二人きりのときはシャルロットでいい」

「んじゃシャルって呼ぶわ」

「／／／分かった／／／でも二人きりのときだけにして　」

シャルはそういうが俺は認識阻害の魔法があり　ほかの人からはタ

バサと呼んでいるように聞こえるようになる魔法があるから大丈夫だと言う　そしてメニューから認識阻害魔法を購入　シャルに使用した

そして羽入で実験する

「なぁシャル」

「何　セイジ？」
シャルが答える

「羽入　効果はあるか？」

「大丈夫なのですよ　ちゃんとタバサって聞こえるのですよ　ああう」

どうやらちゃんと聞いてるらしい

「セイジ　母様は何時治るの？」

シャルが聞いてくる

「直そうとするならいつでも出来るが今はかくまう場所がない・・・ルイズはだめだろうし・・・いや　カトレアさんを治して頼み込むか・・・？？・・・でもその為にはアヴァロンが必要だし・・・キュルケの家はどうか・・・あと少しして信頼されてからか・・・そうなるとやっぱ湖イベントの後辺りか・・・よし　シャルの母さんはあと何ヶ月かしたら俺が治療する　そのための道具もついさっき入手したしな」

「・・・母さまが・・・治る・・・・」

そういうとシャルが泣き出した・・・俺はシャルのことを慰めようと思い軽く抱きしめ頭をなでた　シャルが驚いたのか俺の目を覗いてくる　俺は嫌だったか？と聞く　シャルは「大丈夫　ただ驚いただけ」という

そして頭をなでながら俺は

「もう何ヶ月かしたらラグドリアン湖で水の精霊退治の任務が言い渡されるはず・・・そしたらシャルの母さんを治すからな・・・だから安心しろ・・・これからは俺がシャルの剣となり盾となる・・・シャルが望むなら世界でさえ敵に回す・・・だから安心しろ　俺がシャルを守る　だからもう戦わなくていいからな・・・」

俺が話し終えたときにはシャルは「すぅすぅ」といい声をさせながら眠っていた

・・・さあて・・・次の展開は・・・フーケ・・・の前にデルフか・・・あのおんぼろに触ったらどんな反応するのかなぁ

そんな事を考えつつ眠ってしまったシャルをベットへ寝かせて・・・ベットを離れようとしたところで急に体が引っ張られる

「のぅわぁっ！！」

そんな叫び声を上げ体がベットへ引き込まれると同時にセイジの意識が落ちた

ＳＩＤＥ　シャル

母さまが治る
私はそのことを考えると涙が勝手にあふれてきた・・・慰めようとしたのかセイジが私のことを軽く抱きしめてきた　そして私の頭に手を置いてくる・・・私は驚いた「嫌だったか？」セイジが私に優しい顔をしながら聞いてきた
「大丈夫　ただ驚いただけ」と私がいうとセイジは私の頭をなで始めた

私は頭をなでているセイジが何か言ってきた　私には何を言っているか分からなかった　私の感覚はもう無い　すでに眠気に感覚を奪われている

「「もう何・月・・・・・・ドリア・湖で・の・霊退治の任務が・・渡・・・はず・・・そしたらシャルの母さんを治すからな・・・だか・安・しろ・・・」

あぁ　だめ　よく聞こえない　私は眠っていく脳でそんな事を考えていた・・・だけど後半は何故か聞き取れた

「これからは俺がシャルの剣となり盾となる・・・シャルが望むなら世界でさえ敵に回してやる・・・だから安心しろ　俺がシャルを

守り続ける・・・だからもう戦わなくていいからな・・・」

そしてセイジが私のことを・・・いわゆるお姫様抱っこでベットへ運ぶ・・セイジが私のことを起こさないようにそっとベットへ寝かす・・・私は最後の力を振り絞り彼の服の裾を掴み・・・・・思い切り引っ張った

「のぅわぁ！！」

ゴンといい音をさせセイジの頭が壁に当たった・・・セイジは間抜けな顔をさらしながらベットへ倒れこむ

私は倒れてくるセイジの体をすかさず受け止め布団をかぶせる・・・そしてセイジの腕に抱きついて眠る・・・

やっと見つけた・・・私を救い出してくれる・・・私だけの・・・イーヴァルディ・・・

私は消えていく思考の中でそんな事を考えていた

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

１０　戦後　説明会　（後書き）

「うははははは」
「親方ァ！！」
「どうしたパ０ー」
「作者が狂ったぁ！！」
「なんじゃと！！」
「色々ネタが出なくてついに暴挙を引き起こしたんだぁ！！」
「しょうがない！！ワシらで食い止めるぞ！！！」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」
「死ねぇ！！」
ドン！！

作者が星に成った

今回色々終わってるような気が・・・

１１悪夢　起床　お買い物（前書き）

徹夜明けって怖いね　とんでもないネタがポンポン出てくるＹＯ

因みにこの小説の書き方は

勢い　ノリで書く　もしくは徹夜明けのハイテンションで書く

変更しないで少々の修正を入れる

投稿して後悔

その後修正

という漢字で書いております　見苦しい　理解できない点が幾つもあると思いますがどうぞ誠司君を生暖かい眼で見守ってやってください

１１悪夢　起床　お買い物

オーケー　そろそろ現状をまとめよう

気が付いたら俺はタバサ・・・いやシャルと一緒のベットで寝ていた・・・ＮＡＺＥ・・・いや・・・落ち着こう俺・・・そうそう
昨日はたしか能力について話してたはず・・・あぁ　俺たしか服引っ張られて・・・まぁいいやこの現状を如何にかせねば
そんなこんだでこの現状を打破する方法を考えている俺だがとりあえず日課のランニングをしようと思いたった
ベットから出ようとして・・・俺の腕にシャルが絡み付いているのが分かった・・・何故・・・まぁいいや　たまにはゆっくり寝ますかぁ・・・
そんな事を考えながら俺の意識はまた落ちていった・・・

「「おう　セイジ！！ランニング行こうぜー！！」」

・・・・・・そんなときに限ってサイトがやってくる・・・

俺はしょうがないからシャルが絡み付いている腕を引き抜いた

「・・・わかったっておわぁ！！」

ベットから出ようとしたところでまたも服が引っ張られつんのめる

そして顔から落ち・・・俺の意識が消えた

ＳＩＤＥサイト

セイジが上半身が床に　下半身がベットの上という奇妙な状態で気を失ったので俺は近づき

「お～い　だいじょぶかっておい！！」

・・・と言ったのだが俺は驚いた・・・今までセイジが寝ていたベットに・・・確かタバサって子がセイジの服の裾を掴んでいたから・・・ってセイジが落ちた原因ってこの子か？？などと考えているとセイジが動き出した

ＳＩＤＥ　ｅｎｄ

〜セイジ〜

うはぁ　俺は一体・・・そうだサイトが来てたんだっけ・・・とりあえずこういっとくか

「知らない天じ「知ってる天井だよな！？　昨日見てただろ！？それに今セイジが見てるのは天井じゃなくて木製の床だからな！？」

こいつ・・・俺のネタを潰しおって・・・つぶしてくれるＷＡ

そんな事を考えながら俺は立ち上が・・・れなかった・・・シャルが俺のシャツの裾を掴んでいるからだ・・・これ外れん・・・クソ！！ランニングは諦めるか・・・

「そういうことだから一人でランニングしてこいサイト」
「ねぇ！！何が一体そういうことなんだ！？　そしてお前の横で寝ていた子とはどういう関係だ！！　答えろやコラァ！！」
「はうあう～ボクの眠りを妨げた糞野朗は何処のドイツですか～！！！　徹底的に爪で切り刻んでやるでガスよ～　あうあう～！！！」
怒りに任せてザッシュザッシュと羽入がサイトを切り刻み始める
そして窓から急に黒タキシードを着てグラサンをかけたワルドが突入　はぁ！？

「僕の嫁に手を出すなぁぁぁぁぁぁ」
といいサイトをかばう　そして羽入を吹き飛ばす
「あうぅぅぅぅぅぅ」
「ワ・・・ワルドさん！！！　どうしてここに！！」
「話は後だ・・・早く一つになろうではないか・・・」

「は・・・はい！！」そして服を脱ぐサイト　気が付くと背景がどこぞの地下牢みたいなモンに変化していた　どうやら俺は動けないが見えてもいないらしい・・・そして俺の目の前でワルドとサイトが絡み合い・・・１８禁のＢＬ世界という名の地獄が始まった

「「「「「「「アーーーーーーーーッ」」」」」」」

「「「「「やめてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ　もうワルXサイは嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁ！！！！！！！」」」」」

そういい眼が覚めた・・・俺は見た夢の内容を脳から消去した

時間は8時を過ぎていた　俺は変な格好で寝ていたせいで体中が痛い

そして鳴り出す腹・・・どうやら空腹で眼が覚めたらしい・・・

隣を見るとシャルも目を覚ましていた・・・

シャルも空腹で眼を覚ましたみたいだ

お互いが同時に大きい腹の音を出して目を覚ましたからそう予測した

「「おはよう」」

ちょうどハモった・・・

「シャル　とりあえず飯食いにいくか？」

「／／／同意する／／／早く行こう　食堂には無いけど厨房なら賄い食があるはず」

「おし　いくか」
「　（こくん）　早く行こう」
軽くやり取りを厨房へ向かった

ガツガツ
ムシャムシャ
ゴキュゴキュ
　見苦しい（セイジの食事が）ので祇園でお送りさせてもらわせてくれ

「旨かったな」
「ええ　とても美味しかった」

そんなやり取りをしながら広場を歩く

「この後はどうするんだ」

「今日は虚無の曜日・・・町にでも行く?」

シャルが聞いてくる
「そうだな・・・この世界の町にも興味があるし・・・行くか」

「わかった　じゃあトリスタニアへ行こう・・・馬を借りてくる
待ってて」

そう言いシャルが馬を借りにいこうとする・・・そういえばここからトリスタニアって馬で４時間くらいだっけ・・・よし　ＲＥＸの登録解除・・・クジラ２０００を購入・装備・融合っと

「シャル　借りに行かなくていいぞ　今から行こう・・・」

「・・・その姿で行く気??」

「まぁな　でも途中で降りるけどな　こんなんで町まで行ったら騒ぎになる」

「・・・わかった・・・でも何処から乗る・・・「ここから」（後部ハッチ開放）・・・分かった」

そんなこんだでやり取りしつつ町に向かい発進する俺とシャルであった

「早すぎる・・・馬で４時間は必要な距離が３０分・・・」

「まだまだ早くなるぞ」

「帰りは最大戦速でお願い　最高速度が気になる」

シャルはそう言いながら町を歩く・・・とスリ発見・・・よし　確保　こいつがスッた財布とこいつの財布を取って財布をすられた人にこいつを渡す

「そこのアンタ　財布　こいつがアンタの財布取ったぞ・・・て何でここにいるんだサイト」

「ルイズが俺用の剣買ってくれるって言うから着いて来たんだよ・・・お前こそなんでここに・・・まぁいいや　とりあえず財布返してくれ」

サイトがそう言ったので財布を返してやる

「そういやルイズは何処に行ったんだ・・・まぁ武器や行けば会えるだろ」

「んでその武器やはどうやって行くんだ??」

サイトは沈黙した・・・そして俺たちに着いてくることになった

「セイジ・・・なんでサイトがここにいるの」
「ルイズが武器かってやるからついて来させた・・・んでそのルイズはサイト置いて先に武器屋に行っちまったらしい・・・ひでぇ主人だな」
「あぁ　あいつめ・・・いくら使い魔だからって犬扱いは無いだろ！！」
サイトが愚痴をこぼす
「だったらなんか手柄でも上げるか??」
「「なんだって??」」
二人そろって聞いてくる
「だから手柄でも上げようかっていったんだ　丁度今オーク鬼の討伐依頼が何件か入ってるみたいだぞ」
そう言い俺は背後の壁に貼ってある張り紙を指差す　そこには

急遽募集　オーク鬼３０匹の討伐　タルブ村

と書かれた張り紙があった
「悪くない」　「そんな事をしていいのか??」
「いいだろ　サイトは実戦がどういうものか知る事ができる　俺とシャルは金を稼げるし経験もつめる　悪くは無いと思うのだが」
そういうとサイトは「やってやるぜぇ」といい俺の提案に乗った

「よし　んじゃ今から行くか　」
「今から??　今からだと・・・平気みたい　時間も間に合うしもし間に合わなくても明日の朝に帰ればいい」
「よし　今から行く・・・前にまずサイトの武器買うか・・・」
「だけど金持ってないぞ　」

サイトはそういうがサイトとシャルはあいつの存在を忘れてる　俺は待っているであろうそいつの名前を告げた

「武器屋行けばルイズが待ってるだろ・・・早く行こうぜ　あいつが切れるととんでもないことになる」

「「・・・忘れてた」」

またまた同時に同じことを言った　そして武器屋に向けて走り出した俺らであった

武器屋の前にルイズがいた　ルイズはサイトのことを見つけるなり

「「「「「遅いじゃないのよ!!!この馬鹿犬!!!」」」」」

そう言い懐から鞭を出しサイトを叩こうとした

やらせはせんぞ!!　これ以上やらせはせん!!

俺はその行動を見て腰に挿してあるヒートサーベル（白熱化状態と通常状態に出来るB3グフのヒートサーベル）を抜き出し鞭を切断

切り返しにルイズの首本に剣を突きつけて言ってやった

「・・・貴様がサイトを置いて行かなければこんな事にはならなかったんだけどね 」

「なっ!!　平民が貴族に剣を向けるとはどういうことなの!!

アンタ!!その剣を下しなさい!!これは命令よ!!　駄犬!!

そいつにその剣を下させなさい!!」

「えっ　でもセイジは俺のことを庇ってくれたんだぞ　なのになんで剣を取り上げなきゃならないんだ!!!おかしいぞこんなの!!

！」

「そうだ　そして貴様は何か勘違いをしてるようだな・・・俺達は貴様が勝手に先へ行ったせいで迷ってたサイトをここまで案内してやったんだ　むしろ咎められる者は貴様だろう？！」

そう言い俺は殺気を体中から発する　ルイズは驚いてその顔を恐怖で歪める

「その辺でやめてセイジ　ルイズ　あなたも悪い」

シャルがそう言い場を収めた　俺はルイズに突きつけてた剣を腰の鞘に仕舞うと

「シャルに感謝しな！！　」

とそういい俺とサイトとシャルは武器屋に入っていった「「「「ムキーー！！もう嫌よ！！　あんなの置いて帰ってやるわ！！！」」」」

そんな声が外から聞こえた気がした

「いらっしゃいませって貴族様！！うちはまっとうな商売をしておりまっせ　貴族様に何にも言われるいわれはありませんぜ」

「客」

シャルがそういうと店長はホッとする　どうやら安心したみたいだ

「んでどのような剣を所望で？？」

店員が何かを言ってくるが俺はセール品の中からさび付いたインテリジェンスソード　デルフリンガーを取り出す

「おっちゃん　こいつをくれ　」

「はぁ　そんなもんでいいんですか？」
「ああ　こいつがいいんだ」
「分かりました　厄介払いもかねて２０エキューでいいでっせ　おまけにナイフもつけてやるよ」
「いいのか」
「あぁ　厄介払いしてくれた例だ　気にスンナ」
「ありがとな　シャル　金あるか？」
「ある　でもそんなのでいいの？」
「あぁ　サイトにはこいつが適任だ」
「わかった　はい（支払う）」
「まいどありぃぃぃぃ！！　またのご来店をお待ちしております！！！！」

結構気前のいい親父だったなそんな事を考えながら店を出た

「んじゃタルブ村へ行きますか・・・ところでシャル？？」
「なに？？」
「タルブってどっちの方向だ？？」
「分からない・・・」
「そういやシエスタがタルブ出身って言ってたぞ」
「ホントかサイト！！」
「ああ　でも今は学園「サイトさん・・・とセイジさんとミスタバサ？？　さっきタルブ村がどうのって聞こえたんですけど・・・道

が知りたいんですか??」
「ああ　ちょっとオーク鬼退治に「本当ですか!!!　でも最低でも３０匹以上は居る・・・まぁセイジさんなら楽勝ですね???」何故疑問系??まぁいいや　召喚　」「へっ　セイジさん・・・なんですかその大きいの・・・」「のわっ!!　何だその鯨は・・・ってクジラ２０００か　ゲッター豪とか懐かしいな～」「あぁ　（ハッチ開放）とりあえず乗れ　シエスタはこっちに来てくれ　」「はい　分かりました」「ちょっと!!　なんなのよそれは!!説明しなさい駄犬!!」「・・・なんか関係ないのが来たから行くぞ!!早く乗れ!!」
そう言い俺は皆を押し込みハッチを閉める　そして浮上　そして

「全速全身ＤＡ!!!」
最大戦速で駆け抜ける
「なんですか?」

「いや　なんでもない　こっちか」

「はい・・・てこの船早いですね・・・ってもう村ですか」
３分とかからなかったな　つかクジラ早いな!!!・・・とりあえず着地・・・ハッチ開放　そして館内放送・・・

「目的地へつきました　早く降りやがれ糞野朗」

人工知能が早く降りろと罵倒する・・・この人工知能壊れてないか・・・

そんな事を考えながら船を降りる俺らであった・・・

メイドさん登場はも少し後っぽい

１２　鬼退治　その前に遺産回収（笑）（前書き）

追記　多少改稿しました

12　鬼退治　その前に遺産回収（笑）

クジラから降りた俺達は早速タルブ村を観光していた・・・だって依頼主のお爺ちゃん居ないんだもん　シエスタはお爺ちゃん探してる間に俺達は観光でもして待っててくれと言い残しダッシュでお爺ちゃん探しに行った・・・

「んじゃシエスタも行っちまったことだし観光でもしようぜ」

サイトが言う　俺とシャルはうなずいて同意を示す

「しかしここの空気は美味いな　日本とは大違いだ　だろセイジ」

「確かにここの空気は日本よりかはましだな・・・まぁ大気中にガスやらなんかがあまり含まれてないからじゃないのか」

空気に何が含まれてるかとかそんなのは俺は知らん

「・・・セイジ　何故空気に味があるって分かるの？　そもそも空気に味なんてあるの？」

シャルが顔を少し斜めに傾げながら俺に聞く・・・少しドキッとしたのは内緒だ

ドキッとしたのは置いといて俺が思う空気の味って奴をシャルに教える

「空気自体に味がないとは言い切れないんだ　シャル　口をあけてみ」

「こう？」

シャルが疑問に思いながらも口を少しあける

「そして深呼吸」

「すぅ～」

シャルが深呼吸する

「吐く」

「ふぅ～」

そして息を吐く

「今「セイジさ～んサイトさ～ん　連れてきましたよ～」・・・この話は今度にしてくれ　早めに退治を済まそう」

話を途中で切り上げたせいか少しシャルの機嫌が悪そうだ・・・

「帰ったら話の続きをしよう　」

「・・・分かった　約束」

「ＯＫ　んじゃ帰ったときのことを楽しみにしておいてくれ」

「セイジさ～ん　早くしてください　もうサイトさんは着いちゃってますよ」

・・・これ以上依頼主を待たせられんな

「んじゃシャル　行こう」

「ん　」

そしてシエスタの家に向かって俺とシャルは走り出した

ーーーーーー家内ーーーーーーーー

「で　爺さんが依頼主か？」

俺はテーブルを挟んで正面の椅子に座ってる老人　ダイゾローさんに質問する

　ダイゾローさんはこくんと軽くうなずいただけで質問に答えた

そして逆にダイゾローさんから質問された

「では聞くがヌシらにあ奴らを倒せるとでも？　そんな細腕で奴らと渡り合おうとでも言う気か？　例えヌシらがメイジじゃったとしともあ奴らにはかなうまい」

・・・完全にこの爺さん俺たちのこと舐めとるな・・・だが俺は怒りを顔に出さずただ依頼された内容について聞き出す

「俺たちの戦力については気にしないでください　俺たちが聞きたいのは依頼されたオーク鬼の退治　それの内容を詳しく聞きたいだけですから」

俺は爺さんの質問には答えず淡々と今必要な事だけを聞き出そうとする

「フン　年寄りには敬意を持って接っせい　全く　所でヌシ　名をなんとう」
爺さんも俺の質問には答えない・・・つかなんか苛々してくんなこの爺さん
「・・・日本から召喚された木原誠司といいます・・・爺さん　依頼の内容を話していただきたい・・・このままでは何も進まない」
俺は爺さんにこのままでは何も進まずただ時間を消費していくだけという事をと告げると共に日本から来たと告げる　佐々木さんイベントが発動してるなら何かしらのアクションを起こすはずという打算を込めて告げた　案の定爺さんは目を見開き　口をあんぐりと開けていた・・・
「・・・ヌシ　もう一度名前を言っとみ」

名前を再度聞かれた・・・という事はやはり佐々木さんイベント発動か？

「日本から召喚された木原誠司といいます　名前を書くとこういう風に行きます」
そして着ている黒コートに懐から紙とペンを取り出す　そして最近使わなくなった祖国の文字で自分の名を書き　爺さんに見せる
「・・・こるぁ・・・ヌシ！！　ちとついときぃ！！」
「はぁ？！　えっ！？ちょ！？」

爺さんがあわてて俺のコートをふん掴み家から飛び出す　そして俺は絶賛引き釣られ中
つかこの爺さん絶対老人じゃないよね！！老人とは思えないほどの力とスピードで俺の事引きずりまわしてるよ！！
「ちょ！！爺さん　まって！！」
「若いモンがこれくらいで音をあげんじゃい！！」
・・・駄目だ　聞いてくれない　しょうがないから俺はコートを脱

ぐ　そして解放され立ち上がる　そして走っている爺さんに並走しつつコートをもぎ取る　そして着て走りながら聞く

「爺さん　いきなりどうした！！」
「黙ってワシについて来い！！」
「とはいってもなぁ！！」
「着いたぞ！！」
「早いな」
気がついたらなんかとてもデカイ建物・・・というか・・・基地？？っぽいのが目の前に鎮座してた
・・・簡単に言うとただの四角い建物（高さが大体２０Ｍくらいあって横幅が大体３０Ｍ　縦幅が４０Ｍくらいあった）に森林迷彩塗装してあって周囲の森に紛れ込ませてある　そして俺から見て正面にシャッターが３つほど付けられてある　そしてそのシャッターの出口からカタパルトが生えている・・・どこかで見た事あるようなカタパルトだな・・・

そんな事を考えていると爺さんに呼ばれた・・・その建物の中ではなく建物の横にある石塊の方からだった
俺は走って近づく・・・そして着いてすぐに爺さんに質問された

「ヌシこの文字が読めんとたうか？」
爺さんが日本語で（にほんごで）俺に聞いてくる・・・どうやらこの墓らしき物の文字が読めるかどうかってことか・・・えと

・・・・・・・・・・・・・・は？？？

「どうしたヌシ？　読めんか？？」

俺は驚愕した・・・何故ならそこに書いてあったのは佐々木武雄でもない全く違う人の名前が彫ってあったからだ・・・でも俺はそんな事では動じないと思っていた・・・墓に彫ってあるこの文字を読むまでは・・・

『国連軍横浜基地所属　　G兵器試験運用小隊副隊長　巴武蔵少佐
異界に眠る　』

そう墓石に彫ってあった・・・って！！！

なんだそりゃぁぁぁぁぁぁっ！！！　なんで武蔵！！　何でゲッター！！　いやそれより国連軍！？　なんでゲッターとマブラヴクロスしちゃってんの！！　つかどっちのゲッター！！　旧！？　真！？　一体

「どうなってるんだぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「のわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

・・・叫ぶと共に爺さんが驚く・・・

「バッ！！バカモン！！　年寄りを殺すつもりかぁぁぁ！！」

正直申し訳ないと思うが今は謝ってられない！！確かめなくては！！
そう思いながら建物へ走っていく・・・爺さんを肩に抱えて

「なんじゃヌシ！！血迷ったか！！」

なんか言ってるがどうでもいい・・・ドアっぽいのがあったのでとりあえずそこに移動　着いてから爺さんを下す

「なんのつもｒ「爺さん！！　今すぐドアを開けてくれ！！！」・・・まったく何なんじゃもう・・・」

しぶしぶドアを開ける爺さん・・・開いたドアの中に入り見渡す・・・そして驚愕した

「・・・・・・さっきの墓石見たときになんとなく分かったような

気がしたけど・・・・・・つかコレも兵器だけど・・・ものには限度ってモンがあるのにそれが分からないのかなぁ神は」

そこにおいてあったのはゼロ戦ではなかった・・・戦闘機という項目では同じであったが

そこに在ったのは三体の戦闘機(ゲットマシン)だった

新品同然の輝き・・・はしていなかった・・・所々の塗装は剥げていたが何度も戦場を乗り越えてきたという雰囲気を発していた

機体の並びは横に右端からイーグル号　ジャガー号　ベアー号と順に並んでいた

俺は黄色く大きいミサイルを装備したベアー号に近づく・・・前に爺さんに許可をとる

「なぁ　ベアー号のコクピットの中に入ってもいいか？」

またも爺さんが驚愕する・・・まぁいきなり入って行ってコクピットに乗せろって正気の沙汰じゃないね

「・・・いいんじゃが　ヌシはこの機体について知っておるんか？」

「ああ　知っている　こいつがどういう目的で作られたかとかどういうふうに戦って逝ったかを」

「・・・ならいいぞ　好きなように弄ってくれ　どうせこの老体には何も出来んしのう」

爺さんが許可を出してくれたのでベアー号に飛び乗る・・・正直興奮しまくりである　だってあのゲットマシンが目の前（注　正確にはあなたの真下です　踏んでいるので）にあるんだＺＥ！！　興奮しないほうがおかしいＺＥ

そんな事を考えつつベアー号のコクピットに入った　コクピットは漫画版みたいに色々とごちゃごちゃしてた　真版ではないらしい・・・計器を調べてみる・・・どうやら全部無事なようだ・・・おかしいとこは無い・・・だが操作方法が分からん・・・メニューを開き操縦技能Ａ＋１０ＳＰを購入（卓越した操縦センスを得ることが出来る　操縦方法は頭の中に入ってくるからもう安心　思ったことを実行することも出来るＹＯ）すると操作方法が手に取るように入ってくる　サイトにはやれんなこれ・・・とりあえず動かしてみっか？・・・でも今動かすとこいつの置き場とか困るしなぁ・・・とりあえず保留でいいか

そしてベアー号を降りる

「して・・・どうじゃったか？　Ｇは動くのか？」

「ああ　動く・・・けど今動かすと色々まずい」

置き場とかがね！！（どうやれ誠司君は完全に貰う気満々なようですｗｗｗ）

「・・・何がまずいんじゃ」

「そいつは聞かないでくれ・・・」

「む・・・そうか」
どうやら爺さんは何かを悟ってくれたようだ・・・
「ほかに何か残ってないか？　手帳とか　何か遺品とかないか？」
「少しまっとれ　今とってくる」
そう言い残し爺さんが走り去っていく　しばらくして布製っぽい袋を持った爺さんが戻ってきた

「コイツで全部じゃ！！」

そう言い袋を逆さまにして内容物を全部出す・・・

入っていたのが

トンプソンＭ１Ａ１と３０連マガジンが２本

ドラグノフ狙撃銃とそのマガジン４個

ＳＡＡと弾５４発

・・・なんで銃火器ばっか・・・

「どうじゃ　コレだけじゃ　」

「手帳とかないんか？」

「親父は何も残さなかった・・・残ってるのはコレとＧ　あと遺言だけじゃ」

そっか・・・て残ってんじゃん！！

と突っ込みたいが抑えておこう

「その遺言とは？」

「あぁ　もしそいつが墓石の字を読めたらこの袋に入っているモンを全部あげてくれと言ってた」

・・・・・・あれ？？Ｇは貰えないの？

「あの～Ｇはもらえませんか？」

「何を言うとるんじゃ！！　コイツはワシのモンじゃ！！誰がヌシなんぞに渡すか！！」

ＷＡＯ　どうやら貰えなさそうです　誠司君がっかり・・・ってこのままじゃタルブ村降下イベントとゼロ戦無双が・・・問題無いなだって俺が装備して普通に無双すりゃ問題無い

「そうっすか　んじゃこいつらを貰っていきます・・・」

「おう　もって行きやがれ！！わしゃんなもんいらん！！」

「・・・で　聞きたいのですが・・・」

「ん??」

「オーク鬼討伐依頼の件なのですが・・・」

「・・・あ”！！」

この爺さん・・・忘れてやがったな・・・しょうがない

「この件については後日打ち合わせるということでよろしいですね」

「大丈夫だ　問題無い」

・・・問題無いじゃねぇ！！このジジィ・・・

そんな事を考えつつその場を後にした俺であった

１２　鬼退治　その前に遺産回収（笑）（後書き）

後悔してないよ
「五月蝿い作者！！つか後半シャル出てないじゃんか！！」
色々面倒だったので
「面倒だったじゃねぇ！！」
んじゃまた今度あいましょう
「今度あいましょうじゃねぇ～！！

13　帰宅　桃色遭遇

爺さんと一緒にシエスタの家に戻って爺さんがシエスタを呼んだ

「戻ったぞー」

「お爺ちゃん！！」
凄い剣幕で爺さんに迫るシエスタ・・・まぁ普通に知り合いが連れて行かれたらこうなるわな

「あまり爺さんを攻めないでやってくれ　爺さんの父親の同郷の奴がいたってことで興奮してたっぽいから」
「そうですか・・・って曾お爺ちゃんと同郷って・・・まさか誠司さん日本から・・・という事はサイトさんも」

「ああ　間違ってない　それに色々貰ったからな」
そういい手に持った袋を掲げる・・・正直袋が破けそうだ・・・

「そうですか　その袋の中って何ですか？」

「曾爺さんの遺品さ　墓の字が読めた奴にコレを渡せって遺言が在ったらしい　んでこれを貰ったんだ」
袋の中のＳＡＡを取り出しシエスタに見せる

「これって銃じゃありませんか？」

「あぁそうだ「おーい誠司！！突然連れ去られて驚いたぞ！！」
コイツは銃だ」

サイトとシャルがシエスタの家から出てくる

「何があったの　突然連れ去られて」

「そうだ　一体何があったって！！それＳＡＡか！！」

「とりあえず帰ろう　帰ってから説明する」

「でも退治は？？」

「説明を受けれなかった！！とりあえずまた今度ってことになった」

「お爺ちゃん　説明しなかったんですか！！　全くもう」

「いやだって色々とあってだなシエスタ」

「もう聞きません　誠司さん　サイトさん　タバサ様！！　失礼します　この爺に教育をしていきます！！」

・・・爺さんが連れ去られた・・・＜（Ｔ　Ｔ）冥福を祈ります！！

そんなこんだで色々あってクジラに乗り帰宅途中の俺たち

周囲を観測していると前方に馬に乗り道を駆けているルイズっぽい奴を発見した

「なぁ　あれってルイズじゃね？」

「・・・どこ？」

「ちょっと待ってろ・・・っと　望遠モード　倍率変更・・・コレでどうだ」

「・・・確かにルイズ」

「だな」

「どうする？拾って帰るか？」
「・・・任せる」
「んじゃ拾ってくか」
そう言い俺は召喚してあるクジラに降下して着地するように命令する　・・・降下し地面から１００M辺りまで降りてきたところで馬が気づき暴れだす　そしてルイズが振り落とされた
「ったぁ！！なんなのよ　この馬鹿馬！！全く最悪よ　馬鹿犬は勝手に平民に着いて行くし馬には振り落とされるし・・・あれもコレも全部あの平民どものせいよ！！」
ルイズはココにはいない俺たちのことを罵倒する・・・こいつに構わないで帰ろっかなぁ・・・
「・・・しょうがねえな」
「・・・回収すべきだなぁ　色々とこいつほっとけないし」
「・・・ほんとに回収すんの？？」
クジラに着地命令を出す

「・・・なに？？急に暗くなって・・・嘘・・・なんなのよあれに　逃げなきゃ！！・・・でもあいつを倒せば・・・」
「オオオオオオオオオオオオオオオ（咆えさせてみたｗｗｗ）」
「嫌！！私はこんなとこで死ねないのよ！！喰らいなさい！！」
ルイズが杖を振る　瞬間　クジラの表面が爆発する　被害はほとんど無い　イラっときたので咆えさせて口を開かせる
「ぅオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」
「・・・うそ・・・全く聞いてない　嫌！！イヤァァァァァァァァァァァァ！！」
ルイズは叫びながらクジラに飲み込まれた　そして気絶した状態で俺の目の前に落ちてきた（何故かは知らん！！）・・・
「どうするよコレ・・・」
「とりあえず放置でよくね？」
「賛成」

「・・・でも一応起こさないか？」
「起こした瞬間桃色ヘアーが爆発するから却下！！」
「・・・いたた　もう！！何なのよあの幻獣は・・・ってここはどこよ！！　ってあぁ！！馬鹿犬　あんたのせいで色々苦労したじゃない！！　どうしてくれるのよ！！」
「・・・とりあえず黙るか落ち着くかしろ　機内で五月蝿くされたら迷惑だ」
「あぁん！！誰に向かって物を言ってるのよ！！　私はヴァリエール公爵家の三女よ！！私に向かってそんな口聞いていいと思ってんの！！」

コイツ・・・少しＯＳＩＯＫＩするか（怒）

「ああ　別にそれはおまえ自身が持ってる権力ではないだろ　おまえ自身に権力が無いんなら別にどんな口でも聞くよ　それに俺は尊敬できる奴にしか敬語は使わん！！」
桃色がうっさかったので言ってやった　ルイズは真っ赤に染まり俯いてる・・・
「あとな　お前今何処に居ると思う？」
「えっ！？」
「今何処に居るか聞いたんだよ」
「えっと・・・幻獣の中？？」
「半分正解だ」
「半分ってどういうことよ！！さっさと答えなさい！！」
「今お前は俺が召喚した幻獣の中に居る・・・そしてお前だけを降ろす事もできる」
「んじゃ早くやりなさい！！」
「・・・後悔はしないな？？」
「後悔なんかするもんですか！！」

・・・どうやらルイズは降りたいらしい・・・とりあえずウザイので降ろす事にした・・・後部ハッチを空ける・・・もちろん空中で
「そら　早く降りなよ　降りたいんだろ？」
風が入ってくる・・・めっちゃ寒い　こいつがフライ使えるんなら叩き落してんだがな・・・
「嫌よ！！早く地面まで降りなさい　コレは命令よ！！」
・・・なんか俺に命令してきやがった　ちょっと懲らしめてやろうかコイツ
「・・・ハァ？　何言ってんの？　お前馬鹿だろ」
「んなっ！！」
「まずお前とは直接的に関係が無い　それにお前に恩義を感じているわけでもない　それ以前に俺はシャルの使い魔だし　お前なんかの命令には従わんよ」
「ア　アンタねぇ！！　そろそろいい加減にしないと魔法を撃つわよ　コレは命令よ　今すぐ降りなさい！！」
「魔法？　ははは　笑わせてくれるじゃねぇか　テメェのそれが魔法！？　ふざけてやがるな　お前はメイジじゃねぇ

お前は家の名を汚し親の足枷となってる唯の屑だ　」
「なっ！！！！」
「セイジ　てめぇ言い過ぎだぞ！！」
「言いすぎ」

・・・おし　ここらでサイトにネタバレすっか

「サイトも言うもんだなぁ・・・洗脳されてるとも知らずに」
「「「えっ！！」」」
サイトとシャル　あとルイズが驚愕する・・・ネタバレネタバレェ

「サイト　お前は洗脳されているんだ　そのルーンの効果でな」

「・・・セイジ　どういうことだ　詳しく聞かせてくれ」

「私も気になる　詳しく聞かせて」

「分かった　だが着いたようだ　詳しくは部屋で話そう」

クジラが学院に着地する　着地して数秒し　ハッチが開く　そして全員が出てくる

クジラを消し去ってサイトに言う

「サイト　右手を出せ　「えっ！」いいから出せ「わかった」」

俺は虚数空間からルールブレイカーを取り出す　そしてサイトの右手のルーンにルールブレイカーを刺そうとしてルイズとシャルに止められた

「あんた！！私の使い魔に何しようとしてんのよ！」「何をする気なのセイジ」

「ただサイトの使い魔のルーンを消して契約解除しようとしただけだがどうかしたか？」

ルイズとシャルとサイトが驚く・・・まぁ当然だろう　使い魔の契約はどちらかが死ぬ事でしか解除できないからな

「・・・そのナイフで彼を殺す気？」

「いや　こいつは破壊（ルールブレイカー）するべき全ての符　といってな　契約　呪い　魔法　などあらゆる魔法的契約　魔法薬の効果　呪いなどを無効

化する　つまりこいつを使えばサイトは使い魔から開放されるんだ・・・あとこれの他に所持者が魔力を注ぎ込むと対象の肉体や病気を治す鞘ってのもあるぞ」
「！！もう一度言いなさい！！なに！！病気を治すって何！！」
・・・やっぱ反応すっか　ならもう少しいじるか

「所持者が魔力を注ぎ込むと対象の肉体や病気を治す鞘ってのもあるぞっていったんだ　どうした？［ズゾゾゾゾゾ！！］！！」
気が付いたときにはすぐ近くに３ｏＭほどのゴーレムが完成していた　その肩には黒いローブを着た奴が立っている　つかこのタイミングでフーケ出没とか！！ふざけんなよ！！

「何よあのゴーレム！！」「多分土くれのフーケだと思う　」「・・・まさにファンタジーだな」「・・・とりあえず逃げたほうがよくないか相棒」「・・・よし　戦略的撤退だ！！」

そして戦略的撤退という名の逃亡を試みる俺とサイトとシャル・・・
そしてルイズは原作通りにフーケに挑もうとする
「撤退！？ふざけんじゃないわよ　ここであいつを倒せばもう誰も私を馬鹿にしない！！こいつさえ倒せば！！錬金　錬金　錬金　錬金」
そう言いルイズは失敗魔法を繰り出していく・・・だが効果は無い
　そもそも半分ほど全く違う方向で爆発しているし当たってもすぐに回復している　全く無駄な行動をしている　そして放った失敗魔法が宝物庫の壁に当たりヒビを入れた
「・・・・・・・」
フーケが何かつぶやいてる・・・だがルイズの爆発のせいで聞こえない　そしてゴーレムが宝物庫の壁を殴る　繰り返し３発殴ったところで壁にゴーレムの拳ほどの大きさの穴が開き　フーケっぽいどが穴の中に入っていった　俺達はすぐ引き返しルイズの居る場所め

がけて走る

「馬鹿！！早く逃げろ！！死にたいのか！！」サイトが走りながら怒鳴る　そして俺とサイトがルイズの元へ到着

「速くつれてって　アイスニードル！！」

「早くそいつを連れて逃げろ！　お前じゃコイツにかなわん！！装備　Ｂ３」

俺がＢ３を装備してる間にシャルがアイスニードルで援護してくれた　援護してる間にサイトがルイズを肩に抱えて寮のほうへ駆ける　ルイズが何かしら文句を言っているようだがサイトはお構い無しというように走り去っていくのが見えた　装備が完了した俺はすぐさまガトリングシールドで牽制　その間にシャルが詠唱　シャルが詠唱してる間に水平噴射跳躍で急接近しつつガトリングシールドとザクマシンガンで射撃　だがゴーレムの体に弾がめり込むだけで意味がない

「畜生！　コイツならどうだ！！」

白熱化させたヒートサーベルで切りかかる　だが表面を溶かし斬るだけなので意味がない　それに切りかかったそばからゴーレムが回復しているので意味がない

「ッチッ！　やっぱ大火力の兵器が必要か・・・」

「下がって！！　ウィンディ・アイシクル！！」

合図を受け下がった　瞬間　シャルが切り札ともいえる一撃　ウィンディ・アイシクルを放つ　ゴーレムとその周囲が凍りつく

「こいつならどうだぁぁぁ！！」

そして凍りついたゴーレムに２８０Ｍザクバズーカを発射　そしてゴーレムが砕け散り土砂に還元される・・・

「周囲の探索をお願いしてもいい？」
「わかった　シャルはどうする？」
「私も探索する　一応二人で」
「サイトとルイズはどうする」
「放っておいても問題ない・・・それに「なにごとですか！！」・・・コルベール先生が来た・・・探索は無しで　このまま居ると色々聞かれる　部屋に戻って寝る」
「・・・わかった　なら行こう　装備　Ｂ３」
そしてグフカスタムを装備　シャルがフライで飛翔　俺はその後に続き噴射跳躍・・・シャルの部屋の窓まで飛んでいく
「・・・少し抱えてもらっていい？」
「・・・・・・シャル　一体どうした？何があった」
「そんなに深刻じゃない・・・ただこのままだとは部屋に入れない　アンロックを使いたいけど魔法の同時使用は私には出来ない　」
「・・・分かった　んじゃ来てくれ　こっちの用意は出来てる」

そういい左手のガトリングシールドを解除して左手を差し出す　ちなみに今の状態は壁にヒートワイヤー打ち込んで右手でワイヤーの一部を持ち体を支えている状態だ　そんな状態だと自然と左手しか出ないのだ
「・・・えい」
そしてシャルが俺の左腕に納まるように・・・ってコレっていわゆる片手お姫様抱っこという奴ですか！！　シャルの顔が瞬時に赤くなる・・・って赤くなられてもこちらが困るって
「アンロック」
シャルが赤い顔のままで窓の鍵を解除した　俺は窓を開け中に入る

そして装備解除してからシャルをそっと下す・・・何故か残念そうな顔をしていた
「お帰りなのです～セイジ～シャル～あうあう～」
帰ってきた俺を羽入が迎え入れてくれた・・・そして背後でドスッと鈍い音がした　振り向くとシャルが倒れていた
「おい　シャル！　どうした！！・・・って寝てるだけか」
安心した俺はまずシャルを抱えベットの方へ移動　シャルを寝かす
そして羽入のほうへ向く
「・・・なんか申し訳ないような面してんな羽入・・・何があった」
俺が聞くと羽入は
「・・・色々とごめんなのですセイジ」
「何がごめんなんだ・・・って何だと！！」
羽入が謝ったかと思うと俺の体が発光　そして足元から掻き消えていく
「てめぇ！　何をした羽入！！」
羽入に怒鳴る・・・羽入は
「ごめんなのです！！　ボクだってこんな事やりたくないのです！！」
だが俺は羽入の言葉を全て聞けなかった・・・羽入が言い終わった頃には俺の体はそこにはなかった
「本当に・・・ごめんなの・・・です」
そしてその場にはシャル以外誰も居なくなった

13　帰宅　桃色遭遇（後書き）

はっちゃけた！！

１４　神の戯れ　弱体化した誠司

「知らない天井だ・・・」

気が付いて俺が発した言葉はネタだった・・・んなこといってる場合じゃねぇな

そんな事を考えつつ周囲を確認・・・白い・・・白い・・・白い・・・そして俺が着ている服も白い・・・って何で白タキシード・・・

「それは気分じゃ！！」なんだこの爺さん・・・ってアンタは

「神ィ　何で俺はこんなところに居るんですか」

「それはじゃな・・・この馬鹿に説明してもらうかの」

そう言うと目の前に羽入が現れる・・・て何したんだコイツは

「・・・・・・」

「早く説明せんか！」

「あう～分かったのです・・・セイジ　今から言う事をよく聞いてほしいのです　場合によってはあなたの命にかかわりますのです」

何を言う気だコイツは

「まずセイジに謝るのです　ゴメンナサイ！！」

「・・・何故謝る　俺は何がどうなってるか理解できてないんだが・・・」

「それを今から説明すんじゃ・・・ちょっと羽入は退室しててくれ　まずお前の能力じゃが」

「能力がどうかしたのか？」

「ああ・・・本来はお前の能力じゃが　装備できるのはマジンガーZの機体とゲッターロボの機体　あと一年戦争時に出てくる機体のみじゃった・・・が」

「・・・俺が何かしたか・・・そういや皇帝装備したな・・・融合もしてたな」

「そう　それがおかしいんじゃ　本来装備できん機体を装備した・・・お前にゃ皇帝を装備できる権利なんてないんじゃ　んで異常を感じたわしは調査した・・・ちゃんとルールに則った上で原作ブレイクしてほしかったからな」
結構紳士だな神
「んで調査した結果羽入が犯人ちゅうことが分かった」
「一体コイツが何をしたってんだい？」
「羽入がお前の能力を変更させてたんじゃ」
「・・・どうゆうことだ・・・」
「お前の能力は本来装備と肉体強化　あと召喚のみじゃったんじゃ・・・だがこの馬鹿が勝手に能力を変更したんじゃ・・・融合とステータス回覧あと召喚ちゅうな」
「・・・おかしいと思わなかった・・・」
「まぁ人選ミスだったちゅうことだな・・・という事で羽入には神としての権威を剥奪　お前には能力の剥奪と・・・ステータス回覧は残しといてやる　あそこだと入手しにくい物資とかあるだろうしな　ポイントは一冊分のストーリーを経過したら１００００００ポイント入るようにしておく・・・後は・・・装備じゃが最大で一時間しか使えなくなるぞ　機体の制限は気にしないで４対選べ・・・ゼオライマーは強制で選択するから残り３だな　あと選択後の変更は出来ん　追加は出来るがな　強化による期待の発展は出来るぞ　それとポイント購入で入手した機体はこの中に当てはまらん　つまりポイント購入した機体は強化不可つうことだ　ああ強化した機体は引継ぎさせてやる　」

なんか色々あったんだな羽入・・・
そんな事を考えつつ選択する機体について考える
１０分後　考えがまとまったので俺は神に言う
「選択する機体だがＢ３（１・８Ｍ）と・・・・・・とゲッターロ

ボ（真仕様　変形機構つき　サイズは１　２が２・１Ｍ　３が１・７Ｍで）で頼む

・・・なぁ神よ　羽入なんだが降格させられた後はどうなるんだ？」

「まぁ多分地獄行きじゃろうな」
神はしれっと答えやがった・・・地獄だと
「何故羽入が地獄なんぞに行かなければならん！！」
俺はつい怒鳴った・・・
「神の力を自分の為だけに使用した罪は重いからな　まあうまく行けば生きて帰ってこれるじゃろ」
「・・・ふざけんじゃねぇ　装備！！ゼオライマー！！」
俺は切れた　そしてつい装備してしまってつい殴りかかってしまった・・・だが当たる直前に何かに阻まれて攻撃が通らなかった・・・
「無駄じゃ　ワシに攻撃は通らん　それに神ではなくなるが地獄に行かずにすむ方法ならあ「教えろ！！」・・・まったく　じゃがお前の覚悟が問われるぞ　それでもか」

「それでもだ　羽生には借りがあるし　それにあいつが居ると色々と楽しいしな」
なら「わしが望むのは４つ　送るメイドの選択権と能力の追加と能力についての選択権と隠蔽する権利じゃ　それを飲めば羽入を助けよう」
「わかった」

「ずいぶんあっさりと決めたのう」
「そんな事でいいんならな・・・」
「なら羽入は今まで通り連絡兼メイドとして行くからな　んじゃ元の場所に送り返してやる」
おいチョットマテ　色々説明してほしい事とかあるんだが
「んじゃな　頑張って原作ブレイクしろよ」
「ちょっとまてーーーーーーーぃ！！」
そして意識がブラックアウトした

「そうそう　後で段ボール箱に包んでプレゼントを贈っておくからな！！」

聞いてネェと思いますぜゴッド

まとめ

現在　肉体強化　装備　　召喚》ステータス回覧　戦闘技術向上
剥奪された能力融合　　肉体強化１．５羽入エディション
機体　ゲッターロボ　Ｂ３グフ　ゼオライマー

武装
ヒートサーベル
黒い軍用ブーツ（つま先と踵にチタン製の鉄板を入れてある）
防刃防弾製の生地の下に対爆耐火使用の生地を重ねた裾が膝ほどまである黒いロングコート
丈夫な藍色のジーパン
コートの下に防弾防刃製の黒いシャツ
黒いサングラス
ＳＰＡＳ１２メタルストック付きとスリングベルト　１２ゲージショットシェル１００発　スラッグ弾１００発
Ｍ７９グレネードランチャー（ベルトつき）と２０ｍｍグレネード弾を２０発を入手・・・
弾薬をすぐ取り出せるように弾薬を装填済みのベルトを各一つずつ購入（１２ゲージ弾のほうは４０発　２０ｍｍの方は１０発装填されている）
ルールブレイカー

能力変化
装備　最大１時間しか稼動できない（現時点では３分）　使用後は丸一日使用不可　日ではなく時間制　２４時間経つと使用可能になる　ノードを使いを使い最大稼働時間を伸ばす事ができる
そのほか使用時の魔力使用はなくなっている（魔力使用をなくすための最大稼働システムの追加である）　そのためセイジの魔力が２５０に下がっている　それ以外のシステムは以前と同じ　なお感覚制御のスキルを入手した場合コクピット目線での活動が使用可になる
レベル制度の廃止　レベル制度自体が羽生の作り出したものだったので神の力で消し去られた

能力追加

?????

不明　現在の状態では回覧不可　・・・発動に条件があるっぽい

羽入がメイドとして送られてくることになった・・・

１４　神の戯れ　弱体化した誠司（後書き）

友人の色々チートｗｗｗ少し弱体化させてみたらどう

この言葉で誠司君が弱体化しちゃったぜ

つかこれで誠司君の異世界転生フラグを叩き折ってやったぜ

15　フーケ討伐部隊結成　そして戦闘へ（前書き）

なんか展開を早めなきゃっというお告げを聞いたので高速で戦闘に入った

15　フーケ討伐部隊結成　そして戦闘へ

俺は今学院長室にいる。・・・なんかシャルと俺が呼び出されたんだよ・・・因みにサイトとルイズも一緒に呼び出されたっぽい・・・多分昨日の事だな
そんな事を考えつつ学院長室に入って今に至る

入って中を覗くと前のほうでごちゃごちゃ騒いでるギトー??って先生と崩れ落ちて泣きながら学院長にしがみついているシュヴルーズ??先生がいる。　どうやら原作通りに事は進んでいるっぽい・・・進んでるよな?、つか俺いまさらだけど原作の知識ってあまりない・・・だって地球のほうで何年か暮らしているうちに記憶が飛んだんだぜ。　でも一応ノートにどういうことが起こるか書いておいたんだけどそのノートは地球に忘れたし・・・まぁ能力あるから・・・そういや能力剥奪されたんだなぁ～・・・まぁそれでも何とかなるレベルだけど・・・つか羽入は何時来るんだ?。

俺はそんな事を考えていた

「おお来たか　君達二人に聞きたい事がある　君達は昨日学院に盗賊が入り宝物庫が破壊され破壊の杖と爆裂の螺旋槍という秘宝が盗まれたという事を知っておるか?　まぁ知らないかもしれないがの　コルベール君が現場で君たちを見たといって折ったのでの　こうして呼んだんじゃ　んで何か見たか?」

「はい　ゴーレムがいました　」

「・・・詳しく話してくれんかの　」

「はい　私は昨日トリスタニアから帰って自分の部屋に向かう途中でした　私は向かっている途中で突然大きな影が出来たという事に気がつきました　不安を感じて見上げたら全長で３０メイルはあろうかというほど大きいゴーレムが出現しました　そのゴーレムは戸惑うことなく宝物庫がある壁を殴り続けました　私はその行動を止めようとゴーレムに攻撃しました・・・ですが全く効果がありませんでした　そして危険を感じ取った私の使い魔が私を抱えて宝物庫から離れて自分の部屋に連れ帰りました・・・それ以降の事はわかりません」

「そうか　じゃぁ次はミスタバ「ちょっとまった」・・・ええと君は？「木原誠司」・・・キハラくん　説明してくれんかの？」

「あぁ　まずこいつの説明の補足をしたい」

「補足・・・か」

「ああ　まずコイツが宝物庫の壁が壊れるきっかけをつくった」

「なんじゃと！！」「なんですって！！」「「！！」」

「これは本当の事だ・・・すいませんがそこにいる先生方　あとルイズとサイトを退室させてくださいませんか　」

「む・・・わかった　スマンがギトー君とシュヴルーズ先生とサイト君とミスルイズは退室してくれんかの」

「「「「何でですか！！」」」」

「・・・聞こえなかったかの？？」

「「判りました」」
最初に退室したのはシュヴルーズ先生とサイトだった
残ったルイズとぎトーが反論する
「何故ですか学院長！！　そのような薄汚い平民の言う事を聞くなんて！！正気ですか？！」
「そうです！！そもそも貴様！！平民の分際で貴族に命令するとはどういうことだ！！そんなに死にたいのか！！」

・・・最近の貴族ってのはこんなもんばっかなのかね　つか俺汚いかな？？

まぁちょっと怒ったしＯＳＩＯＫＩしようかな

「・・・ア”？　死にたいのはどっちの方だ？　またあの屑貴族みたいになりたいのか？　ならかかって来い　ただしその代償として腕か足どちらかを必ず一本頂くぞ」
「上等だ　あのヴィリエは所詮ラインクラス　この私はスクウェアだ！！負けるはずがない！！」
おし　ストレス発散要員ゲット！！　コイツをなぶってストレス発散しよっと
「ならかか「しつれいします！！」」

遮られた・・・

俺の声を遮って突入してきたのはマチルダことミスロングビルだった

「そんなにあわててどうしたのじゃ」

「はい！！　フーケの居場所が判明しました！！」

「「「「なんだと！！」」」」

ふうん　どうでもいいわ

「で　何処に居ったのじゃ？」

「はい　私は聞き込み調査を行っていました・・・結果はここから馬で４時間ほど行ったところにある小屋に陣取っているらしいということしか判りませんでした　他には大柄で黒いローブを被っていた男という事ぐらいですわ」

「そうか　では討伐隊を編成する！！我こそは土くれを退治して見せようと思うものがいるなら杖を掲げなさい　」

そして静寂・・・まぁ誰も死にたくないだろうしね

そんな事を考えているとルイズが杖をあげた

「ミスヴァリエール！！　あなたは生徒じゃありませんか！！生徒を危険なところには行かせられませんわ」

「・・・おうおう　いってやるねぇ　自分は安全地帯にいながら教師は自らの保身を考えてる　そんな中勇敢にも強大な敵に立ち向かおうとした生徒を庇う　最高のシナリオだ！！泣けるね！！んなこと言う位だったらテメェがいってやればいいじゃねぇのか」
「・・・私はちょっと腹の調子が・・・」
「悪いですけど俺もセイジに同意です」
なにっ！！　サイトが俺に同意しただと！！
「少なくとも安全地帯でごちゃごちゃ言っている先生方にはルイズの覚悟はわからないと思います　」
おう　いいこと言った！！

そしてサイトが言い終わったらシュヴルーズは黙った

「なら討伐隊はミスヴァリエールとミスタバサで宜しいかの？」
「ほえ？？」

気がついたときには既にシャルは杖を上げていた・・・何時の間に上げてたんだよシャル・・・

「「はい　杖に賭けて！！」」

・・・俺賭けるもんなんてないからな

「・・・しょうがない俺は主人の名誉にでも賭けるとするよ」
「おう　・・・俺もルイズに賭けるぜ」

そしてここにフーケ討伐部隊が結成された

～～～～～～そして時は流れ４時間～～～～～～

「なぁマスター」
「何セイジ？」
「俺一人できた方が効率よかった気がするんだが」
・・・ゲッター装備して飛べばもっと早く着いたと思うぞ
「・・・たしかに効率はいい　でもセイジだけは行かせられなかった　セイジが行くなら私はついていく」
「そうだ　お前一人でかっこつけんじゃねぇぞ　俺もアイツには一発当てたいからな」
「・・・そうか　愚問だったな　それからそこの桃色」
「・・・なによ」
「突っ走るなよ　今回の目的はあくまでも秘宝の奪還だからな　フーケを倒すことじゃないぞ　つまり危険を感じたら逃げろってことだ」
「・・・わかってるわよ　そのくらい」
・・・本当にわかってるのかね？この桃色爆発娘は
そんな事を考えつつフーケがいるであろう小屋目指して歩いていく
ちなみに一番前で先導して歩いているのがロングビルさん　そしてロングビルさんの横をサイトがデルフリンガーを装備して護衛している　そしてサイトのそばでルイズが俯きながら付いて歩いてる

因みに俺とシャルで後方警戒をしている
「セイジ」
「なんだマスター」
唐突にシャルが話しかけてくる

「おかしいと思わない？」
・・・やっぱシャルも異変を感じていたか
「・・・ああ　確かにおかしいと思う・・・いいたいのは何で馬で４時間かかる距離があんな短時間で往復できたかって所だよな」
シャルが頷く
「しかも情報を得るために聞き込みやらなんやらしているはず・・・そしたら最低でも１０時間以上必要だと思う　・・・だがまだ確証がない・・・一応ロングビルさんに気を付けてくれ」
「わかった　」
「木原さん　ミスタバサ」
「そのロングビルさんがお呼びだ　行こう」
シャルが頷きロングビルさんのほうへ移動する　俺はシャルに付いて行く
「あれが多分フーケが根城に使っている小屋です　」
「そうですか　犬　アンタ行ってきなさいよ」
「・・・犬扱いをやめてくれたらいくよ・・・」
・・・犬扱いって　お前もう使い魔やめないか？
「止めれるなら止めてるよ・・・」
「心を読むな・・・たく　俺が行く　シャルとサイト　桃色は周辺を警戒しておいてくれ」
「わかった」
「一応俺も行くよ」
「犬扱いは嫌じゃなかったのか」
「一人よりかは二人のほうがいいだろ」
サイトと軽口を叩きあいながら小屋へ進んでいく・・・前にサイトに渡しておく
「そうだ　こいつを使え　室内だと剣より散弾銃のほうがいい」
「何処でこんなの入手したんだよ　ったく　ありがとな」
そういいＳＰＡＳ１２を渡す　因みに俺が今もって居るのはトンプソン　弾がなかったからポイントで５００発ほど購入しておいた

ちゃんとドラムマガジンもセットで購入したよ2個　んでドラグノフを背中に背負って腰にM79装備してるんだ

そんな事を考えているともう小屋の前だ・・・さて　鬼が出るか蛇が出るか？

「行くぞ・・・3・・・2・・・1・・・」

ドンッ！！

俺がドアをけり開け突入　続いてサイトがSPAS12構えて突入する

・・・ベットがあるが膨らみはない・・・

「クリア！！」「こっちもOKだ！！」

「・・・所でサイト　この部屋の中央においてある箱二つはなんだ？」

「・・・判らん　とりあえず開けて見るか？」

「罠の可能性も否定できないが・・・周囲の確認を頼む　俺がやる」

「わかった　任せる」

そして俺は箱に近づく・・・さて　何が入っている

そしてまず小さいほうの箱を開けた・・・小さいといっても俺の足の長さ以上はある箱だが

そこに入っていたのは・・・

「・・・サイト　これは」

「・・・なんかもう驚けねぇよ・・・色々有りすぎてさ・・・」

そこにあったのはＭ７２ＬＡＷ　（俗に言うロケットランチャー・・・ではないのだが便宜上面倒なのでそう呼称することにする）が入っていた

「もう一個のは??」
「とりあえずあけてみるぞ」

・・・なんてこったい
「・・・ガトリングか??」
「・・・そうだけど何か違うような・・・サイト　お前ちょっと持ってみ」
そこにあったのはＭ１３４でもなくバイオ３に出てきたような３銃身のガトリングでもなかった・・・いやどちらかと言うとＭ１３４の外見が変化したような感じがする・・・ともかくガトリングガンがそこにあった
そしてガトリングをサイトが手に取る・・・

「・・・なんだよ　南下が頭の中に流れ込んでくる・・・えと　銃種名　ミニガン　使用弾種　２０ＭＭ弾・・・??何だコリャ??えと・・・ヴォルト??なんか聴いたことのない単語が出てくるな??」

ワオ!!　なんで??これって多分フォールアウトに出てきたミニガンって事なのか?
・・・??
「!!」
ズゾゾゾゾゾゾゾゾ!!!!
なんだ??
「セイジ!!逃げて　フーケ!!」

俺は外から聞こえてきたシャルの叫びで状況を把握した
銃火器見てボケッとしてるサイトに状況を簡単に教える
「サイト！！逃げるぞ！！」
「ほえ？？」

「ほえじゃねえ！！　フーケ様の来襲だ！！」
「何だと　！！」
「サイトはＬＡＷを　俺はミニガン持ってく！！」
「持てんのか！？」
「人間必死になれば何とかなるモンさ！！」
そういいミニガンを持ち上げる・・・ヤバイ　これ重い！！
「だったら！！装備！！」
俺の言葉が言い終わる前に小屋がゴーレムの腕で潰された

～～～～ＳＩＤＥ　シャル～～～～

セイジ・・・嘘でしょ・・・サイトまで・・・
何で逃げなかったの・・・・・・なんで・・・なんで私の親しい人
たちは皆消えて逝くの・・・なんで・・・
「なん・・・で・・・そう　あなたがセイジとサイトを殺したの・・
・ならせめて仇は・・・取る！！！」
二人ははゴーレムに潰された・・・だったらせめて仇はとりたかった
そう思った私は詠唱を開始してた・・・もちろん怒りを込めて私が
一番得意な魔法・・・ウィンディ・アイシクルを

「ウィンディアイシクル！！」

そして詠唱が終わり私は自分に在る魔力と怒りを込め魔法を放つ・・
・

瞬く間にゴーレムの足が凍り付いていく　だが凍り付いていくといっても一部分である　そしてゴーレムがこちらに気づいたのかゆっくりと振り向く　そしてゴーレムの足の凍りついた箇所が吹き飛んだ　ゴーレムはその巨大な腕で自らの足を叩き壊していた

フーケのゴーレムは自分でゴーレムを壊して瞬時に再生させたのだ
そしてあらかた氷付いた箇所を破壊しつくし再生させるとこちらに向かいゆっくりと進んでくる

私は戦力の差を侮っていた・・・いや　実際には差は理解していた　でもセイジが殺され冷静さを欠いている今　私に正常な判断を強いろというのが無理な判断だった・・・それでも

「負けられない！！せめてゴーレムだけでも！！」

そして迫り来るゴーレムの体の表面が爆発する　その爆発は私が見慣れた物だった

「ルイズ！！」「錬金錬金錬金！！！」
ルイズが必死にゴーレムの体を錬金する　ルイズの魔法は全て失敗する・・・それでもあのゴーレムを倒そうとしていた・・・彼女もまた悔しいのだろう自分の初めての魔法の結果だから
私は必死にスペルを紡ぐルイズに走り寄る　もうゴーレムは目前で腕を振りかぶっていた

「逃げて！！」
気が付いたときには逃げろと叫んでいた
だが間に合わない　距離がありすぎた　だけど私はそれでもルイズに近寄る　もう知人を死なせたくはないからだ
そしてゴーレムの振りかぶった腕が爆ぜた

「・・・え！？」
そして崩れ落ちていくゴーレムの腕と本体側に残った断面から何かが出てきた・・・そしてそこに居たのは私が見た事のないセイジの姿だった

～～～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～～～

脱出成功！！

いや・・・ホント間に合ってよかったわ

潰れる瞬間にゲッター２装備　そして地面にもぐる　地面を掘ってゴーレムを仲から破壊して・・・まぁいみなかったけど

いまさらだけどゲッター２の潜行能力と男の浪漫って凄いね！！って思ったよ
そんな事を考えつつゴーレムの体の奥からサイトを引っ張り出す・・・まだ生きてるな　よし
「サイト！！　ルイズを助けに行って来い！！　」
「判った　セイジはどうする？！」
「俺か？　俺は自分にとっての姫殿下を助けに行くよ」
「ははは　そうか　んじゃがんばれよ」
「そりゃこっちの台詞だ　後機を見てそいつを打ち込め　」
「コイツか？　分かったけどセイジ　いいのか？」
「ルイズと一緒に打ち込め　一応アイツに手柄はくれてやる」
「なんでだ？　昨日あそこまで罵倒した相手に手柄をやるんだ？？」
「これは俺なりの侘びだよ　んなこと言ってる暇はない！！行け！！」
「応！！」

そして俺とサイトはゴーレムの腕の断面から飛び降り各自の主人の下に舞い戻る

「待たせたな！！・・・ってあれ？？」

・・・えと？？なんで？？

とりあえず現状確認しよう・・・まず左手のアームにミニガンを持っている　バックパックもセットで・・・で俺の正面でシャルが目に涙を浮かべてた・・・俺もしかして死亡扱いされてた？？？

「生きてた・・・よかった・・・」

んでシャルが抱きついてくる・・・それはいいんだが後ろが怖い・・・なんかズシンズシンいってるって！！

「シャル」

「・・・なに　セイジ？？」

まったく　涙を眼に浮かべながら上目でこっち見るな　萌え死ぬだろうが！！

「俺はシャルを置いて死にはしないからな　だから安心しな　これからは俺がシャルを守ってやるよ」

「セイジ？？それって」

・・・好きな子を守ろうと思うのは当然の事だろ！！

そして装備を解除　振り向きＭ７９を使い炸裂弾を打ち込む

ボシュッ！！と軽快な音が鳴り続いてゴーレムの腹に空洞が出来た

空洞が出来たゴーレムから距離をとる　シャルが呆然としていたからシャルを抱えてな

「セイジ　」

「いいか？よく聞いてくれ」

「何？」

「これからサイトがアイツを破壊するために行動を起こす　合図を

したらあのゴーレムから離れてくれ・・・っと結構重いなこれ」
・・・まぁ持てなくもなくはないんだがな
そんな事を考えつつ持ってきたミニガンをもつ　そしてバックパックを背負う
重いから両手でミニガンを抱えるためにシャルを下し耳を塞いでおくように言う
「シャル　耳を塞いでおけ！！」
そして安全装置を解除　トリガーを引く！！
キュラキュラキュラ
六本ある銃身が回転する音が聞こえ　そして
ギャロォォォォォォォォォォォォ！！！！！
そして放たれる無数の銃弾　放つと同時に轟音が当たりに鳴り響くゴーレムの体が瞬時に崩れ去っていく　だが瞬時に破損したところが回復していく
「撃てぇ！！サイトォ！！！」
俺はサイトに合図を送る　サイトのほうはもう準備していたのかルイズと一緒にＭ７２を発射する！！
パシュッ！！っとＭ７２とはまた違う軽快な音を発し　そしてＭ７２から発射された４０ｍｍグレネード弾ともまた違う巨大な爆発音が当たりに鳴り響いた
・・・威力凄いな　４０ｍｍでさえ腹に穴あける程度だったのに・・・上半身吹き飛ばすとか・・・こいつ買い込んでバビロン内に収納しておこうかな
俺はそんな事を考えていた・・・
「・・・やったぜ！！ゴーレム破壊だ！！」
サイトが叫ぶ　そして俺がその雰囲気をぶち壊す
「サイト！！まだ終わっちゃいない！！　フーケが近くにいるはず

だ！！」
そう　まだフーケがいるはずなのだ　そして俺の記憶が正しければ
「動くな！！！」「話なさいよこの！！」
そして振り返る　そこには首を抱えられ動けなくなったルイズとミスロングビル・・・いや
「やっぱり貴様がフーケだったか・・・」
「そうさ　私が噂のフーケ様だよ　んじゃとりあえず全て武器を破棄しな・・・杖もね　こいつを殺したくはないだろ」
そういわれ俺はドラグノフとＭ７２　あとミニガンを破棄する　トンプソンはあの小屋の残骸の中に忘れてきた・・・ｍｏｔｔａｉｎａｉ　サイトが残弾のないＭ７２を捨てる・・・シャルも杖を地面に投げた
そしてフーケがシャルに杖を向ける
だが向けた瞬間　杖が吹き飛んだ
「・・・え？」
「形勢逆転だな　とりあえず動くんじゃねぇ　シャルを狙った罪高くつくぞ！！」
そして俺はＳＡＡをフーケの胴体に狙いをつけつつ話しかける
「・・・なぁ　ティファは元気か？フーケ・・・いや　マチルダ」
そして俺の言葉を聞いた瞬間フーケの顔が変化した　驚きの顔にな
「何でアンタがあの子の事を！！」
「そんな事はどうでもいい　お前はやはり孤児を養うために盗賊をしているのか？」
原作と同じなのか？？　それだけが気がかりだった　まぁこんな所でこいつ殺すと原作通りに行かない可能性があるかもしれないしね
「・・・なんであんたがそんなことを知っているのさ」
「その質問に俺は答えない　質問しているのはこちらだ　その返答だと養っているという事だな」

「ああそうさ・・・結構多いんだよ孤児ってのは・・・私は確かに盗賊をしてたさ・・・でもしょうがなかったんだよ　あの子を養うためにはこうするしかなかったんだ・・・」そう言いフーケ・・・いや　マチルダが独白し始めた
「・・・さて　お前はどうしたいんだ　このまま捕まって死ぬか俺に殺されるか　果ては俺たちを全員殺して逃げ延びるという選択肢があるぞ」
「・・・私は・・・止めれるんなら止めてるよ・・・でももう止まれない所に来ちまってんだよ！！」
マチルダが叫びながら懐から予備の杖を引き抜く・・・だがそれは無駄だった
だしてこちらに向ける前に俺がＳＡＡで打ち落とし

サイトがＬＡＷをマチルダ目掛け投げた！！
「ちょ　ま！！ふげっ！！」
マチルダが変な叫びを上げ地面に倒れる・・・頭に当たるとは・・・とりあえず哀れんでおくよ・・・
「・・・えと　何かまずかったか俺？？」
「もう少し待ってほしかったがまぁいい　んで話し合いたい」
「・・・何を？」
「何をよ」
「このフーケの処遇だよ」
「・・・そうよね　フーケも家族を養うためにやっていた訳だしね・・・正直私としては王宮に突き出したいわ・・・でもフーケを突き出すと養っている子が餓える・・・よね？？」
「多分餓える　そして親を失うというというのは辛い・・・でもこのまま放って置いても駄目だし・・・」
「・・・放置ってわけにも行かないか・・・」
・・・だったらさ

「しかし悔しいな・・・フーケには逃げられるし・・・ロングビルさんは頭打って気絶するしな」

「「ハァ！！」」

「セイジ・・・本当に悔しい　あそこで取り逃がすなんて・・・」

お　シャルは気が付いたか

「そうか・・・たしかにあそこで逃がしたのは痛かったよな」

「・・・どういうことって・・・ああ！！そっか！！そういう事！！」

「そう言うことさ」

つまり俺達はフーケを取り逃がしたという事にするってことだ

つか今回の目的は秘宝の回収だしね

「んじゃ帰りますか」

俺が皆に聞く・・・そして皆が一斉に頷く

「所でルイズや　お前もそう言う考えだとはな・・・」

「なによ　私だって優しさはあるわよ・・・」

「そうか　昨日は言い過ぎた　すまんかったな」

「はぇ？？　」

「何だその擬音は・・・全く　だから謝ったんだよ　さすがにあれは言い過ぎた・・・」

「そ　そう　分かればいいのよ分かれば！！」

「あと俺でよければお前の魔法の調査をするぞ」

そもそも使えないって理由分かっているしね
「え??」
「つまりあなたが魔法を使えない理由をセイジはわざわざ異世界の技術で解析してみるってこと」
シャルが横から説明に詳細を付け加えてくれた
「説明の補足有難うシャル」
「どういたしまして／／／」
シャルに礼を言う
「・・・本当にいいの?」
「ただし条件がある 」
「・・・なに?」
「サイトの犬扱いを止める事と平民への差別をしないこと それだけだ」
「は? それだけ? お金とかそう言うものじゃなくて??」
「ああ それさえ止めればやってやる つか金なんぞいくらでも作れる」
「セイジ それは違法」
「ばれなきゃいいんだ それに俺達はもう既に法を犯してるんじゃないのか??」
「それを言われると何もいえないわね でもその程度の事でいいのならいいわよ 」
「なら・・・そのうちシャルの部屋に来てくれ 解析するから」
「わかったわ」
「あとサイト 何やってんのお前」
サイトがなんかマチルダの頭を弄ってた
「一応傷とかないか確認してた・・・俺のせいで傷とか残ったら嫌だからな」
「そうか・・・ある意味お前が一番気が利くかもしれないな」
「どういうことだよ全く・・・」

「まぁ細かい事はいいから帰らない？？　早く帰って寝たいわ」
「あんたって・・・まぁいいわ　それには私も賛成よ　早く帰って報告しなきゃ」
「同意　帰る」
「んじゃメニュー・・・これかぁ？」
そういや何故か日本にあった兵器とか道具ってポイント低いんだよな・・・えと　残りが３００ポイントか・・・だったらこれにするか
１０ｔトラックを購入　後ろのコンテナを改装　チタン製にして防御力強化　んで防弾性の窓を片側に二つ　計４つつけた
「・・・えと　この目の前に急に出てきた物は何？　何かのマジックアイテム？？」
「１０ｔトラックか　何でこんなもんが出てくるんだ」
「大きい」
なんか反応がいまいちだな・・・まぁ反応に期待してるわけじゃないからいいけど
「乗れ　サイトとルイズ　あとロングビルさんが後ろ　シャルは助手席にでも乗っててくれ」
「ルイズ　こっちだ」
サイトが車体の後ろに回りこみコンテナの扉を開ける　そしてロングビルさんを運び入れた　んでルイズを後ろに入れてサイトも入った　そして扉が閉まる
「シャルはこっち」
「わかった」
そしてシャルを呼ぶ・・・

・・・さて乗るのが大変なんだよな　運転席結構高いし
そんなことを考えつつも運転席に上る・・・案の定シャルは苦戦しているようだ・・・
俺は苦戦しているシャルに手を差し伸べる　シャルが手を取ったの

で強めに引っ張る　そしてシャルの体が助手席内に収まったのを確認してからドアを閉める・・・そしてシートベルトをシャルにつけて俺もベルトをした
「この紐のようなものは何のために使う？」
シャルがシートベルトを挿して聞いてきた
「安全装置って所か？？」
「そう」

そしてキーを捻りエンジンをかける
ブロォォォォ
重く響く音を鳴らしエンジンが動き始めた・・・さて

・・・道が分からん
「私がわかる　そのままっすぐ行けばいい　というよりまっすぐ行けば学院」
「方向音痴ですから」
「そう　だったら私が案内する」
なら安心　そう思いアクセルを踏み込む　そして動き出す車体
「・・・凄い　これは一体何？！」
シャルは興味津々のようだ　お気に召して何よりです姫
「こいつは自動車といって俺らの世界だとこいつが主な移動手段なんだ」
「・・・凄いとしかいえない」
そんな会話をしつつメーターを見る
メーターは４０ＫＭを指していた
もう少し早めるか
そしてメーターが凄い勢いで上がっていく　それに比例して速度も上がっていく

「「あばばばばばばばばばばばばばば」」

速度を下げた　振動が・・・

「舗装されてもいないから振動が凄いな・・・」

「凄い　もう一回お願い」

「えっ！！」

「・・・駄目??」

だから上目遣いで見ないで　萌え死ぬから！！

「分かった　さらに速度を上げるぞ！！ついて来れるか（振動的な意味で）」

「もちろん　私はあなたについていく」

そしてトラックは加速していく　学院に付くまでメーターは１６０を指していたとか

「サイトォォォォォォォォこの振動はなんぃぃっぃぃぃぃぃ！！！????」

「セイジィィィィィ速度を下げあばばばばばばばばばばば」

「何なんだよこの振動はあ”あ”あ”あ”あ”」

そんな悲痛な叫びはセイジには届かなかった　そして学院について扉を開けたセイジはこのカオスな空間を見て三人に謝ったらしい・・・

15　フーケ討伐部隊結成　そして戦闘へ（後書き）

フォールアウト3からミニガン持ってきた　因みに作者は初回プレイ時には極悪人になったよ

１６　そして学園長（前書き）

風ひいてテスト期間中っていうのにネタが浮かんでしまった・・・
結果的に駄文になってしまった・・・スマソ

16　そして学園長

「所であたしはどうなるんだい」
唐突にロングビルさんが俺に聞いてくる・・・そういや気絶してて聞いてなかったね
「どうなるって・・・これからのお楽しみさ」
「お楽しみって・・・」
「セイジ　あまり苛めちゃ駄目」
おっと　シャルに叱られたよ
「・・・ある程度までなら許すから・・・ニヤリ」
・・・シャルが笑いながら弄る許可を出す・・・よし
「とりあえずこの後どうなるかは言わないで置くよ・・・言ったらツマンナイじゃん」
「人のことを弄るな!!あとそっちも弄る許可を出すな!!」
ナイス突っ込み!!有難う!!
因みに俺らは今学院長室に向かっている途中である・・・
「セイジ　誰に向かって説明しているの??」
「テレビの前の大きい子達にさ」
「・・・そう（・・・）」
「ちょ!!待ってくれ」
シャルが歩く速度を速めた・・・俺はシャルの速度に合わせ付いていく
「・・・っととと　まだくらくらするよ　全く・・・」
ロングビルさんはまだ振動酔いの効果が持続しているようだ
因みにあのカオスの後大変だった
〜〜〜回想〜〜〜
「おい　くたばってんじゃない　起きろ!!」
「うぅおぅぉあうおあうおいいおえういおあ”””」注サイト
「ぁあうぅぅぅう」注ルイズ

「おぅぁ」注ロングビル
俺は振動でくたばった亡者共に目覚ましの掌低を叩き込む
「あべし！！」ル
「あつつつ・・・おぅぅあぁぁあぁぁぁぁあ」サ
「いつっててて　アンタ・・・正気かい全く　あんな振動・・・う・・・」マ

そして口を押さえるロングビルさん・・・まさか

「おい！！吐くなら向こうで！！こっちにくるなぁぁぁぁぁぁ！！！」
俺が悲痛な叫びを上げると共にロングビルさんがこちらに近づいてくる・・・そして口内の最終防衛ラインが崩れ去り唇という名の関門が開き・・・
「■■■■■！！！」マ
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」セ
「セイジ・・・何か桶のような物を・・・うっぷ」サ
「わ・・・たしも・・・うげんか・・・い」ル
そして・・・
「「■■■■■！！！」」サ＆ル

「吐きながら近寄るなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！もうやぁぁぁぁめぇぇぇぇてぇぇぇぇ！！！」

嘔吐物パラダイスが始まった・・・

回想終了
「いや・・・これってキハラのせいだよね・・・おえ　思い出したらまた気持ち悪くなってきたよ・・・」
「・・・まぁそのうち治るから・・・正直サイトのほうが酔いに耐性あるかと思ったんだがな・・・まぁあいつも縦の振動には耐性がなかったって所か」
そんな事を考えていると学院長室の前にたどり着く
「策は大丈夫？」
「大丈夫だ　問題ない・・・と思う多分　まぁ合図したら自分の境遇話せばそれで解決だからね」
んじゃ入りますか
「失礼するよ」「失礼します」「しつれい・・・します・・・」
若干弱弱しいのが一人いるがまぁいい

「お帰り　してどうじゃった？　奪還できたかの？」
あんた・・・分かっているくせに　どうせ遠見の鏡とか言うので観察してたんじだろ
「ああ　こいつだろ・・・えと」
財宝内からミニガンとＬＡＷを取り出す　そして机の上におく
「・・・確かに破壊の杖と轟音の螺旋槍じゃ」
・・・因みにミニガンに使ってた２０ｍｍ弾は回収しておいた　使う機会無いと思うけど一応ね
「・・・で　フーケは捕まえられなかった・・・という所かの」
「ああ　んで報酬は何だ？？こちらは要請どおり奪還した　報酬として何か貰いたい」
「その点なら問題ないぞ　ワシの懐から恩賞として全員に合計で１０００エキューを支払う事にしようと思っていたのじゃが」
「なら俺の分はいらないから少し俺と雑談してくれないか　それで

チャラといきたいんだ」「なんだって！！」「！？」
「・・・何を話すつもりじゃ・・・まぁそれで良いんならいいが・・・」
「後コルベール先生を呼んでくれ　あの人にも色々話がある」
「む・・・わかった」
・・・数分後

「学園長！およびと聞きましたが何事ですか！！」
「おおコルベール君！！来てくれたか！！」
コルベールがドア路明け学園長室に入ってくる。
さて・・・話しますか！！
「ではお二人に言いましょう」
「なんじゃ？」「なんですか？」
「・・・フーケの正体がわかりましたと！！」
「「「「！！！！」」」」
そして全員が息を呑んだ・・・因みにロングビルさんはなんかすっごい顔が青い・・・まぁそうなるだろうね
「して・・・だれじゃったかの？」
「その前に１つ頼みごとがあるんすけどいいっすか？」
「・・・なんじゃ言ってみろい」
「・・・ロングビルさんの給料を上げてくれませんか、そしたらフーケが誰か伝えます。いくらぐらいあれば維持できそうっすかロングビルさん？」
「！！ああ・・・そうだね・・・２・５倍ほどあれば何とかなると思うよ」
「だそうです・・・どうですか？」
・・・学園長が渋い顔をしている・・・さて・・・どうするか！？
「・・・わかった・・・そのぐらいでいいのならな」
よし！！飲んでくれたか・・・
「んじゃ誰か伝えましょう・・・まぁここに居るんですけどね」

「「ハァ！！」」
「んじゃロングビルさん、本名と職業をどうぞ」
「あんたって・・・もういいわ、アタシの名前はマチルダ・サウスゴータ、二つ名は土くれだよ」
「土くれ！！では貴女が！！」
「そうさ・・・アタシが噂の土くれとやらだよ」
「んじゃ自己紹介もすんだことだし何でこんなことしてるか説明してあげてください・・・打ち合わせどうりにね（ボソッ）」
そしてロングビルさんが打ち合わせ通りに自分の境遇を話し始めた・・・
数分後
そこには泣いているコルベール先生と涙目のシャル、学園長はなんか俯いていた
「んで聞きます。学園長、この話を聞かなかった事にしてマチルダさんを雇い続ける、もしくは王宮に訴えてマチルダさんを突き出す、まぁ突き出した場合は俺が連れ出して逃げますがね。」
「・・・コルベール君はどう思う？」
「・・・正直訴えようと私は思っています、ですが訴えたら路頭に迷う子供達が出来てしまう・・・難しい問題ですね」
「まぁ訴えた時点でこの学園を破壊しつくしますがねｗｗｗ」
「誠司・・・外道」
「たしかに・・・あんたは外道だよ」
「酷いな・・・シャルにマチさん・・・」
「だけど外道が悪いとは言ってない・・・ニヤリ」
「ああ・・・それには私も同意だね・・・ニヤリ・・・あとマチさん言うな」
・・・なにこいつら・・・恐ろしい子（＋年増）！！・・・ニヤリ
「・・・コルベール君、ワシ達は何も聞かなかった・・・だろう誠司君・・・ニヤリ」
「ええ・・・話を理解してくれる人は好きですよ・・・ニヤリ」俺

「誠司男趣味！？」シャ
「ちょ！！俺はノーマルだから！！」セ
「サイト君とはおホモ達かね？」オ
「学園長！！」コ

「・・・なんだいこのカオス・・・」
これが日常だからしょうがない
「ナレーター、少し黙っててくれ」
ドゴッ！！おうふっ！！

・・・ナレーター沈黙

数分後・・・ナレーター復活

とりあえず曖昧だが何とか問題は片付いた・・・と思った矢先サイトが学園長室に飛び込んできた
「誠司は居るか！！後タバサ！！」
「居るが」「何があった？」
「シエスタが連れて行かれた！！奪還作戦を練りたい！！」
「ちょ！！おま・・アーーーッ！！」
「まって」
・・・そしてサイトが俺とシャルを連れて走っていく

「・・・学園長　本当によかったのですか？」
「コルベール君、君には戦争孤児を見殺せるのかね」
「・・・分かりました」

そんなやり取りがあったとか

「・・・まさかアイツがフーケだとは・・・まてよ・・・これを私

の手柄として奴を・・・ハッハッハッハッハ！！！」
・・・そしてこの話を聞いていた者が他にも居ると言う事をこの場に居た者達は気付けなかった・・・そしてそれが原作ブレイクの引き金になるとはまだ誰も知らなかった・・・。

・・・場所は変わってシャルの部屋

説明
シエスタ奪還作戦の会議のためシャルの部屋移動
不審物（段ボール箱）が部屋の真ん中に
・・・なんでダンボール？
「・・・開けて見るか？」
サイト・・・何が入ってるか分からんのだぞ
「やってみようか？」
「やってみる」
「「「レッツオープン！」」」
そして箱を開ける・・・
「なんじゃこりゃ？！」
「セイジ？どうしたの？」
俺のほうに近づいてくるシャル・・・つか箱の中に入ってたのが？？？何だこの紙？？シリアルコード？？
なんか紙が入っていた　シリアルコードって書いてあるけどなんなんだこれ？・・・メニューに入れる？？そうか！！
俺はメニューを開く・・・案の定欄が追加されてた　それをクリック　そして紙に書いてあるコードを入れていく
入れ終わったらなんか画面に表示された
『コード入力完了　指定された音声メモを再生します』
どうやら何かが再生されるらしい
「誠司ですか？ボクなのです・・・誠司・・・色々と御免なのです・

・・でも今は謝ってるぐらいならとりあえず言えといわれましたので言うのです
まず誠司にプレゼントです
ノードが３個支給されたのですよ　それと同時に今回セイジがやろうとしてることで使える機体がセール中ですよ　あうあう
・・・それとアイテム欄から武装が支給されたのです
今回は８７式突撃銃が非装備状態でも使えるようになったのです
なお使用する弾薬はＰ９０用の物と２５ｍｍ弾が使えますよ　２５ｍｍ弾はマガジンに６発入れることが出来ますです
そして頑張ってください誠司　ボクは誠司のことを応援してますよ
追伸　神様がなんかしようとしてるのです　気を付けて下さいなのです」

・・・何があった羽入・・・
そんなことをかんがえつつ俺はメニューを漁っていく・・・とりあえずセール中の機体でも見ることにした・・・そして発見　確かにこいつならと思いつつ作戦を練っていく・・・
残ポイント・・・６４３０・・・色々原作無視した結果フリッグの舞踏会が明日にあるっぽい・・・明日んなんなきゃポイントも貰えんだろうな・・・
だったら・・・
結果　購入
感覚制御　２５００
ケンプファー（ポイント版　強化不可）３０００
２５ｍｍマガジン二つ　弾薬層填済み
残Ｐ・・・９３０
機体最大使用時間３分ー２０分　強化

今現在の全兵装
８７式突撃銃　マガジン３つ　２５ｍｍマガジン２つ
ＳＡＡ　残弾５４発
ドラグノフ　マガジン４こ　残弾１２０発
トンプソン　マガジン２本　ドラムマガジン二つ　残弾５００発
ＳＰＡＳ１２　残弾１２ゲージショットシェル１００発　スラッグ弾１００発
Ｍ７２　残弾２０発
防弾防刃対爆耐火コート
てっぱん入り靴
ヒートサーベル（存在を忘れ去られている）
グルカナイフ（何処に行ったんだ！？）
ヌカランチャー　安かった残弾３

装備一覧
ゲッター
Ｂ３グフ
ゼオライマー
ケンプファー
・・・・

・・・制圧して救出、その後転進して離脱って所かな？

「よしサイト、シャル聞いてくれ。」
「おう」「わかった」
さて・・・真面目な会議に行くとしますか。
「プランを考えた、
プランその１
皆殺し

プランその2
全滅させる
プランその3
そして誰もいなくなった

・・・どれがいい??」

「全部皆殺しじゃん!!」
「同意・・・やっぱり外道」
おいおい、全部が皆殺しじゃないぜ。
俺は言う・・・サイトの間違いを直すために!!
「サイト・・・それは違う
プラン1は確かにサイトの言う通りだが2はちゃんと生き残らせて
全財産の半分を頂いて行くだけだし3はただ急に使用人含め消え去
るだけだよ。」

「・・・やっぱ外道だ・・・早く何とかしないと」
・・・そこまで外道かな?
「でもそれがいい」
「タバサ!?」
サイトが驚く・・・ナイス判断だシャル
「んだったらプラン4で行くか?」
「・・・どんなの」

・・・聞いて驚け!!

「全部」

「・・・は??」
サイトは呆けてる・・・シャルはキラキラと輝いた眼でこちらを見つめている・・・何があった!?
「だから全部だよ」
「詳しい説明を求む」
サイト・・・お前はそんなに物分りが遅い子だったのかい?
「正確に言うなら財産盗ってヌカランチャーで全てを消し去るだけだよ」
「こいつ鬼だわ!!」「でもそれがいい」
「んじゃ思い立ったが吉日。早速花火を揚げてくるよ」
「なんか字が違うぞオイ!!」
「因みに移動はトラックだから、サイトは勿論後部コンテナね」
「鬼ィィィィィィィィ!!!!!」
「・・・セイジ・・・最高!!」

結局装備しないで銃火器のみで貴族と戦おうと思います・・・By誠司

１６　そして学園長（後書き）

アヒャヒャヒャヒャ！！！

次回の誠司君は現代火器を結構使うよ！！

17　モット伯邸襲撃、（前書き）

17　モット伯邸襲撃、

・・・時間は過ぎて夜、俺とサイトの二人はバスで移動してモット伯領内の森に来ていた。
「誠司・・・本当にやるのか？」
・・・殺るといった事は必ず殺るのさ！！
「大丈夫だ・・・俺が突入する、サイトは俺が陽動してる間に上階を探索、俺はある程度陽動したら下階を探索する。」
「まぁ頑張るよ」
「んじゃ移動するぞ・・・シャルに感謝しなきゃな」
「ああ・・・タバサが地図を描いてくれなきゃこんなに早くこれなかっただろうしな」
そう言いながら俺はトラックを降りる、サイトも同時にドアを開け車体から降りる。
そしてサイトがバタンとドアを閉めたのを確認してから鍵を閉める。
「さて・・・も一度確認しとくぞ

俺が陽動、正面から87式で砲撃、その後サイトが裏に回りこみ突入、俺も突入する。
俺は宝物庫とか漁ってるからお前はメイド助けて来い。
その後はここに集合する、以降の通信は脳内通信で行う」
（この脳内通信って奴だろ・・・正直凄いなこれ）
（！！いきなり話しかけんじゃねぇ！！馬鹿野朗！！驚いたじゃねぇか！！）
（わりい）
（んじゃ行くぞ・・・幸運を祈る）
（応！！）
そしてサイトが走り出した。

因みにサイトには近接用にＳＡＡ貸してやった。
その後俺も走り出す・・・右手に８７式突撃銃を持ち森の中を駆けて行った。

３分後

場所を移動　モット伯が居るであろう屋敷の正面２００Ｍあたりの位置に黒コート着て伏せて８７式構えてる。
（こちら誠司、サイト！仕掛けるぞ！！）
俺は脳内でサイトに通信して開始すると伝える。

「さて・・・陽動開始ＤＡ！！」
俺は８７式の安全装置を親指で押し上げ解除、そして照準する。
「まずは・・・門だよな」
門を狙う・・・そしてトリガーを・・・引く！！

ポシュッ！！
８７式から放たれた２５ｍｍグレネード弾が硝煙を撒きながら飛翔し空中に薄い鼠色の線が一筋走る。
そして飛翔した２５ｍｍがだんだん落ちてきて・・・。

ドワォ！！と爆発が起きた。
「ＨＩＴ！！」
門の上部に着弾、門が爆発の熱風と衝撃で崩壊。そこにはもう門といえる物はなくただ門だった物の残骸が散らばっているだけになった。

次は・・・なんかあわててるっぽい衛兵Ｂでも狙うかな
そう考え俺は陽動中だということを思い出し引き金を引こうとした指を止める。
（こちらサイト！！陽動を確認したぜ！！んじゃ突入する！！）
おい！！まだ兵士が出てきてるわけじゃないぞ！！
「クソ！！あの馬鹿！！もうどうにでもなれやぁぁぁぁ！！！！」
俺は立ち上がりつつ叫び、８７式を屋敷外壁に狙いつけ走る！！
「ＤＩＥ！！」
そして屋敷に向かい走りつつ３発発射、爆発が置き壁の一部が崩れ去ったところでさらに屋敷に向け２発発射、壁が崩れ去ったので進入、最近忘れてた虚数空間に８７式を仕舞い高火力のＭ７２とトンプソンとヒートサーベルを引きずり出す。
「敵兵発見！！いたぞぉぉ！！」
見つかったか！！
俺は心の中で悪態を付きながら俺のことを発見した奴に向かう・・・
なんだ、ただの剣士か。
「五月蝿い、とりあえず黙れ。」
俺は見つけた剣士に引きずり出して左手に構えてたトンプソンの銃口を向け引き金を引いた。
パロロロロロ！！！
そして放った４５ＡＣＰ弾が質の悪い金属を使用していたのか知らんが金属製っぽい鎧を砕いた。だが怯まない。
「うあっ！！何だこいつ！！死ね！！」
恐れるという事を知らないのかその剣士は俺に腰に挿していたレイピアを引き抜き突き出してくる。
「無駄だ！！」
俺は突き出されたレイピアを右手に持ったヒートサーベルで弾き、剣士に蹴りを入れ吹き飛ばす。
ドズッ！！「！！ガファ！！」
トンプソンじゃ貫通しないか。

そう思った俺は再度虚数空間を開きトンプソンを仕舞い代わりにＳＰＡＳを引きずり出す、勿論装填されているのはスラッグ弾だ（そして加工してホローポイント弾風になっている）。
スパスは重かったからサーベルを腰に仕舞い両手で構えた。
スパスを吹き飛ばした兵士に向け

「Ｈａｓｔａ　ｌａ　ｖｉｓｔａ，　Ｂａｂｙ，」
そして引き金を引いた
ダウッ！！
そして轟音と共に一瞬周囲を黄色い閃光が包み込み弾丸が銃口から射出された。
そして射出された弾丸が剣士の胴を抉る。
「んじゃな・・・」
俺はその場を後にした・・・どうせほっといても死ぬんだしな・・・
だったら待ってないで早く宝物庫行って奪取してこなきゃ。
そう思い俺は宝物庫を探し館内をうろつき始めた。

「・・・やべぇ・・・迷った」

・・・迷いました。

その後俺は彷徨いながらも宝物庫を探し歩いていた。
何故か他に敵が存在しなかった・・・というより遭遇しなかったの間違いか。

俺の足音が誰もいない廊下に響く、だがそれ以外にも足音が混じっているのを俺は感じ取った。
コツコツと微小な足音が聞こえる、どうやら足音を隠して移動しなくてはならないような出来事でもあったのだろうかと思いながら足音のした方向に向かった。

・・・足音が止まったか、・・・？部屋があるのか？
廊下の途中で足音が止まった、曲がり角から慎重に覗き込んでみる
とそこにはただ何もなかった。
？？？・・・！！。
俺はあることに気付き足音が消えた付近の廊下の壁に、

ピト、と張り付いた。

そしてＢ！Ｂ！Ｂ！
コン、コン、コン。
少し移動
ズリズリ・・・
Ｂ！Ｂ！Ｂ！
コン、コン、ポミュ！！

「・・・ここか・・・よし」

廊下の反対側の壁際まで移動、Ｍ７９を取り出して、

「Ｆｉｒｅ！！」ドワォ！！
叩いたときに変な音が鳴った壁に４０ｍｍグレネード弾をぶち込ん
だ。

案の定爆砕された壁の先には階段が続いていた。
俺はＭ７９を仕舞いヒートサーベルを取り出す。
ヒートサーバルを右手に装備し階段を下りていった。

階段を降り終わった所に在ったのは宝物庫らしき大きなドアとその

奥に少し小さな木製のドアが目に入った。
「・・・何というご都合主義ｗｗｗ」
俺の独り言が室内に響き渡った、俺は何故か虚しさを感じつつでかいドアの奥の小さいドアに近づいた。
そしてドアを開けた。

「・・・陵辱物のエロゲはやった事が有るけど実際に見てみると酷いな・・・クソッ」

そこには拷問用に使用されるであろう多種多彩な機材があった。
そしてその部屋には牢屋がありその中には全裸の女性が何人も首輪を付けられて入れられていた。
さらにその部屋の奥には何らかの機材に繋がれた裸の女性が放置されていた。
「うぅぅ・・・殺して・・・」
「助けてよ・・・おかぁさん・・・」
「・・私って・・・なんなんだろ・・・」

・・・機材に繋がれた女性らは助けを求めていた・・・だがあの有様ではもう元の生活は出来ないだろう。

「・・・」
俺はまず行動を起こす前にサイトに脳内通信を入れる。
（サイト・・・）
そして数秒後サイトから返信があった。
（どうした？シエスタが居たか？！）
（・・・いや・・・居なかった・・・ただ・・・）
（誠司！？何があったんだ！？）

サイトが慌てて俺に何があったか問い詰めてくる。
（いやさ、実際に監禁陵辱物のエロゲみたいな展開があるわけないと思ってたらあってちょっと鬱ってただけだ・・・サイト。）
（陵辱物のエロゲっておい！！まさかそこにシエスタが居るんじゃねぇだろうな！！）
（俺の話を聞いていたのか？ここにシエスタは居ないと言っただろうが・・・サイト、ここの主人は必ず殺せ、頼んだぞ・・・）
（おい！！誠司）
そして一方的に通信を切った。
さて・・・意識が残ってる奴に話を聞くか。
俺は牢屋に近づいた。
ヒュッ
いや・・・近づこうとしたの間違いだった、俺は一歩踏み出しただけでそれ以外は動けていない。
俺の背中に何か尖った物が押し付けられていた。
「ここに何の用ですか？とりあえず話してください」
そして背中越しに淡々と少女らしき声が聞こえてきた。
「なに、唯の土くれの犯罪に便乗してここに蓄積されてあるだろう宝物を奪ってやろうとしただけだ」
俺はそう目的を告げた。
「そうですか・・・やはり貴方ですね・・・私が使えるべき主人は」
・・・？？ハァ？？！！何をいっとるんだこいつは？？
「・・・とりあえず振り向いていいか？こんな状況だと何も出来はしない、それにまずここにいる女性を助けたいのだが・・・お前はそれを邪魔するのか？邪魔するなら消し去るぞ・・・。」
俺は殺気を出しながら後ろに居るやつに言い放つ。
そして数秒沈黙、俺に背中に当てられていた鋭利な物体がどけられたようなので振り向いた。
「・・・」
そこに居たのは正に美女という表現が当てはまる女性が居た。

髪は銀髪で頭にメイドさんがよくしているカチューシャを着けていて後ろで三つ編みに髪を結っている、そして服装はメイド服でその手にはチェーンソー・・・おい、そんな危険なものを背中に押し当ててたのかアンタは！！
そんな美人さんが片膝をついて黙していた。

さて・・・俺はどうする？
1　とりあえず説明を求める。
2　まずはこの奴隷扱いされている女性達の解放。
3　逃げる。
4　脱走。
5　「不二子ちゃぁぁぁぁん」と叫び飛び掛る。

・・・この場合だと2か？？いや・・・あえて5でも・・・いや・・・まずは1の選択肢を選ぼう。

「どうしましたかご主人様？」
「そのことに関して説明を求める、まず貴方は何者でとどういう経緯で此処に来たかを簡潔に説明してくれ。」
「はい、それがご主人様の要望なら従いますわ。私はただの通りすがりの野良メイドですわ」
・・・野良メイド？？そんな生物が居るのか？？（注　存在しません）
「後俺の名前は木原誠司、一応使い魔をやっとる。」
「分かりました、私の名は粕谷瞳、瞳と及びください。」
「そうか、なら聞く、瞳さんはどういう経緯で此処に来たんだ、あと俺この鍵外してるからその間に話してくれ」
そして俺は牢屋に近づき取り付けられている南京錠的な鍵を開けようとピッキングする。
「私は昨日まで全く別の世界に居ました、私は色々在り生涯使える

べき主人を探していました。」
誠司鍵開けに奮闘中。
「そんな時神を名乗る男に出会いました、その男は私が生涯使えるべき主人は別の世界にいる、その男のＶＴＲが有るから見てみるか？と言われ私はその映像を見ました、そして誠司様のことをお知りなさいました。」
（なんだよ・・・これちゃんと開けられるのか？？）依然と奮闘中・・・。
「そして私は誠司様に惹かれ思いました、私が使えるべき主人はこの人だと。・・・まぁもう一人狙撃兵が一緒に送られる事となりましたけど・・・そして私は昨日この世界の場所は判りませんがどこかに送られました。」
（イライラしてくんな・・・叩き壊すか・・・ニヤリ）・・・誠司苦戦中。
「そしてオヤシロサマを名乗る女に此処まで案内されて今に至るわけですわ。」羽入乙
（・・・ブチッ！！）
「ドラッシャァァァァァァァ！！！」
・・・いい加減に開きやがれやぁぁぁぁぁぁ！！！！
切れて南京錠をヒートサーベルで叩き切る・・・最初からこうすればよかったのに・・・。
そう落胆しつつ瞳さんの方を向く。
「大体事情は分かった、・・・所で修平と言って何か思い出す事は無いか？」
「？？いえ、有りませんわ？そのものが何か粗相をなさいましたのですか？そのような狼藉物は私が切り刻みますから安心してくださって結構ですわ誠司様。」
・・・実際に遭遇するとヤンデレって怖いな・・・それとこの瞳さんはゲーム前の瞳さんって事か。
そもそもゲームを経験していれば主人を乗り換えんか・・・。

「いや、その場合は俺の判断を待ってくれよ、最終的に決めるのは俺だぞ、まず俺に仕えたいのなら以下の条件を守る事だ、まず独断で行動はしないこと、俺が使えてる主人に手は出さない事、俺以外の言葉にも反応する事、そのほかにもいくつか条件はあるが大体はこれを守れるなら俺に使えることを許す、依存があるか？」
てかこうでもしないとシャルとかサイトとかにも襲い掛かりそうだし・・・防止策を付けておかないと・・・でも危険を冒してでも瞳さんを使用人として迎えたほうがいいと思う。
なにせ生身で銃弾を避けれる人だからな・・・そんな人居ないし居たら頼りになる。
そう思い俺は瞳さんを使用人として雇う事にした。
「んじゃ初仕事だ、この捕らえられている人たちを解放させるのを手伝ってくれ。」
「分かりました、それが誠司様のお望みとあればこの瞳、尽力を尽くさせて頂きますわ。」
そして俺がさっき開けた牢屋の中に入った。
「まだ生きてるもの、正気を保っていて逃げたいと思うものはいるか？！」
・・・静かだな・・・、返答がなかったので牢の中で倒れている女性に近寄ってみる。
「・・・だからか・・・そりゃ返事すら出来ないわな・・・」
俺が触った女性の体は既に冷たかった、だがまだ腐敗はしていない。おそらく死後数日辺りしか経過していない女性を床に寝かせ俺は他にも倒れている女性の脈を計る・・・が全員死亡していた。
あらかた調べつくしてみたが俺と瞳さんが調べた牢は全員が死んでいた。
残るはこの何故かとっても頑丈そうな牢、南京錠がなく試しにヒートサーベルで切りかかってみたが無駄だった。
と言う事でヒートサーベルを白熱化、ドアの蝶番らしき所に立て掛けてみた。

案の定溶け始めている・・・すっごい少しずつだが。いまさらだが固定化って凄いんだな。
と言う事で放置、その間にさっきの部屋の分岐点である宝物庫っぽい所に入ろうと思って今そのドアの前に居るわけだが・・・。
「この扉の奥から話し声が聞こえます、・・・内容は不明ですが１０代の女が二人、それと推定して２０代辺りの女が１人この中で篭城していますわ、おそらくこの騒ぎに便乗して財宝を強奪している辺りが妥当かと、どう処分いたしますか？」
との事で今思案中。
そして決断する。
「とりあえず突入だな、・・・ドアの横を４０ｍｍで吹き飛ばす、その後抵抗するようなら確保する。その後事情聴取、障害となるようなら排除する。」
「分かりました、では私が確保してきますわ、誠司様、宜しいでしょうか？」
「ああ、許す、ただし全員５体満足の状態で確保する事、得物の使用は許可するが稼動はさせるな。」
「誠司様のお望みのままに。」
そして俺はＭ７９を取り出しトリガーを引いた。

カチッ、

「・・・リロードしてなかった・・・」
と言う事で薬莢を取り出し虚数空間に仕舞う、そして中に入っている４０ｍｍを取り出して層填、壁に向けて撃つ。
ドワォと爆音が部屋に響き宝物庫の壁が崩れ去っていく、直後瞳さんが突入、降伏しろとか色々言ってたけど最後は鈍い音が３つ部屋に響いて裸で長髪で背の高い服を着た女性と裸の金髪と茶髪の女子を抱えた瞳さんが穴から出てきた。
「確保してきましたわ！！」
・・・どうする？？
１　撫でる
２　褒める
３　怒る
４　抱きつく
５　アーッ！！

・・・毎回毎回思うがなんなんだろこの選択肢、色々カオスなんだけど。
そう思いながらも選択後のルート変化について考えてみる。
１，２、はまず好感度Ｕｐ、３は論外、俺には出来ない。
４５の場合はまず瞳ルート確定、この場合どうなるか創造しただけで身震いする・・・最悪ＮｉｃｅＢｏｒｔに・・・ブルブル。
そう思ってたところでサイトから通信が入った。
（誠司、シエスタを確保したぜ、あとモット伯ってのを生け捕りにした。今は気絶してる。）
（だったらシエスタとモット伯連れてトラックに移動、メイドさんとその他３名そっちに行くからメイドさんが抱えてる３人とモット伯を後ろ手で縛って荷台に積んでおいてくれ。見張りはメイドさんに遣らせるから。）
（了解した、でも何でメイドさん？）
（気にしたら負け）

（おｋ）
そして通信を切る。
「んじゃ瞳さん、この人たちを連れて屋敷から脱出、その後近くにある森に行ってくれ、そこに青いパーカを着た男がトラックと共に居るはずだからその人たちを後ろ手に縛って荷台に積んでおいてくれ、んでその後は俺が来るまで荷台で見張りを頼む。」
「御意、では行って参りますわ、ふふふ」
そして瞳さんは階段を駆け上がりそのまま消えていった。
さて・・・宝物を漁るか。
そして進入・・・。
「光物と・・・銃火器、それに・・・??なんだっけこれ?武器っぽいから跡でサイトに解析してもらうか」
とりあえず全てを無理やり虚数空間内に押し込む、
空になった宝物庫を後にし放置していたヒートサーベルを取りに行った。

「ものの見事に溶けてるな」
溶けた扉の奥には更に牢屋があってそこに服を着た黒髪の女子が座り込んでいた。
「おい?生きてるか?」
話しかけたらピクッと反応した、少なくても生きてるっぽい。
とりあえず牢屋の一部を溶かし切って中に入った。
「・・・生きてるけど・・・?栄養失調か??」
すっごい痩せ細くなっていた、何日閉じ込められていたかは知らないが此処の主人はヒデェことしやがる。
そう思い俺はこの子をかかえ脱出する事にした。

場所は移動してモット伯屋敷より北に５００Ｍ程の所にトラックで移動していたサイトたちを見つけ合流した。

「誠司か?!やっと来たな。早く花火を打ち上げようぜ」
戻った途端にサイトに花火を打ち上げようと言われる
花火・・・それは俺達の間でのヌカ・ニュークの隠語である。
そしてそれを打ち上げると言う事はここら一帯を吹き飛ばすということである。

「ああ・・・そうだ瞳さん!!その中に居る男を引っ張り出してください!!」
アイツにこの光景を見せ付けてやろうと思ったんだ・・・糞貴族の末路をな。
「誠司様!!お帰りなさいませ、それとこの冴えない男で宜しかったでしょうか?」
「ああ、よくやってくれた。有難う瞳さん」
「／／いえ、私は誠司様のご命令に従っただけですわ／／」
そう言い赤くなった瞳さん・・・やっぱ綺麗なんだよなぁ～、でも死亡フラグを回避せにゃいかんからな。
「後この女子も一緒に拘束して荷台に積んどいて。」
そう言いながらもその冴えない男に近寄った。
「何だ貴様等!!貴族であるこの私にこのような狼藉を働いて!!そんなに死にたいか!?」
「黙れ」
俺は五月蝿いこいつの腹に蹴りを入れて黙らせる。
「死にたいだぁ??それはどっちに対して言ってんだ?」
そして虚数空間からヌカランチャーを取り出す。
安全性を考えヌカ・ニュークは装填していない。だからそれも一緒に取り出し装填する。
安全装置を解除、サイトに投げ渡す。

サイトが屋敷に向かい照準を合わす。
「変態技術大国日本万歳ぃぃぃぃぃぃ！！」
サイトの叫びと共にヌカ。ニュークがヌカランチャーより射出された。
射出されたヌカニュークは放射線を描き落下して屋敷に着弾。

ぴかっと閃光が瞬き、次の瞬間には屋敷は消滅し残っていたのはキノコ雲だけだった。

そして俺は振り向きがたがた震えてるモット伯を見ながら言った。

「で、どっちが死ぬって??」
「ヒィッ！！」
「とりあえず今まで殺してきた平民に懺悔しながらジワジワ死ねや」
両手両足を拘束。
高性能な爆薬を搭載した首輪を付けてヌカコーラクアンタムを購入、無理やり何本か飲ませＢ３グフを装備、飛んでちょうど爆心地の中心に放置、首輪に此処より離れたら爆発するように設定して戻って解除した。

（・・・とりあえず放射能で死んでくれればいいし逃げたとしてもそこより５０以上動いたら死ぬし・・・アハハハハハハ！！！）
戻ってトラックに乗る、瞳さんが助手席、サイトと女性何人は荷台・

・・今度改造して振動軽減しなきゃな。
そんな事を思いながらトラックは走り出した。帰るべき家に向かって。

「誰か助けてくれぇぇぇ！！！」
そんな叫びがモット伯屋敷跡地で鳴り響いたとか。

17　モット伯邸襲撃、（後書き）

テストが・・・オワァッタァァアアアアアアアアアアアアアアアア！！！
とまぁそんな感じでハイテンションで書きました、

メイドの扱いどうすっかなぁ・・・

18　どうしよっかこの現状

さて・・・どうするべきか。
俺は今の現状をよく考えてみた。
またもやダウンしているサイト、そしてサイトを背負って前に厳重な牢に閉じ込められていた黒髪ショートの少女をいわゆるお姫様抱っこで抱えて学園内の廊下を歩いている俺。
そんな俺の後ろで瞳さんが金髪を背負って歩いていてその後ろを茶髪ポニテを抱いて着いて来てるメイド服を着た長身で藍色の髪をした女性、（宝物庫に居た人）とシエスタが居た。

うん、カオスだね。なんか最近カオス過ぎて困るわ。
そして歩いていたらシャルの部屋の前に着いた。
無理やりドアを開けてシャルの部屋に入る。
「お帰り、首尾はどう？」
「ただいま、とりあえず屋敷爆破して伯爵を拘束して移動したら爆発する首輪を付けさせて放置、その後拘束されていた女性４名確保、連れてきている。」
「そう、」
「スマンがベッドを借りる、」
「分かった、」
そしてシャルの許可が取れたので抱えていた女子を寝かす、それと共に瞳さんと藍色メイドさんが茶髪と金髪を寝かす。
「ところでその人たちは誰？」
「この銀髪のメイドさんが粕谷瞳さん、んでこっちの人は」
「お初にお目にかかります、私の名はヘレンと申します、」
「と言う事だ、・・・さてこの女子を起こして説明させるか」
「同意ですわ誠司様、では私が、」

「いえ、ここは私にやらせていただけませんか、私はリューネの姉ですから急に起こしたとしても驚かないはずです。」
「んじゃ頼みますヘレンさん」
「ええ」
そしてベッドに近づいて茶髪の女子、リューネを揺さぶる。
少ししてリューネが起きた。
「うぁ・・・おねぇちゃん??ここどこ??・・・・!!そうだ!!逃げなきゃ!!」
「落ち着いてリューネ、ここは・・・??」
「トリステイン魔法学園」
場所が分からなかったようなので教えてやった
「トリステイン魔法学園よ」
「・・・なんで私はそんな有名な所に居るの?」
「それは俺から説明しよう」
「貴方・・・誰ですか?」
睨まないで!!おねがいだから睨まないで!!俺の心のライフはもうゼロよ!!
とまぁそんな感じに心の中で叫びを上げながら自己紹介をする。
「俺の名は木原誠司、いや、こっちで合わせたらセイジ・キハラってとこになるのか?」
「・・・後そこのメイドは誰?何であたし達を問答無用で気絶させたの。」
・・・??
「瞳さん、?」
「いえ、ただ何かしら分からない言葉を叫んでいましたのでとりあえず黙らせましたのですが何処か宜しくない箇所がありましたか?!」
「・・・もしかしてこの人たちの言葉理解できない??」
「はい、実際そこの茶髪達が何を言っているのか理解できませんわ」
・・・どうやら俺が召喚されたときと同じ状況下にあるようだ。

と言う事はあの時問答無用で叩き伏せたってのも理解できる。
何せ降伏という言葉は日本語だ、それに瞳さんは今日本語を使っている。
ハルケギニア語を使用するヘレンさん達に言葉が通じるわけが無い、だから叩き伏せたのか。
「なるほど、如何にかする必要があるな。」
そして俺はリューネのほうを向いた。
「まず非礼を許して欲しい、瞳・・・ああこのメイドさんだが宝物庫に忍び込んでいた奴がいると教えてくれたのでな、一応安全策として確保させてもらった。まずその時に行った暴力的行為を許して欲しい」
そして頭を下げる。
「・・いいです、では何故私達を捕らえたのですか？それについて聞かせてください。」
「それについては私も同意です。何故私達がここに居るのでしょうか。」
「分かった、まず俺達はモット伯に半ば拉致されるように連れ去られたメイドをここに居る青い服を着た男、平賀才斗って言うんだがこいつの頼みでメイドを連れ戻しにあそこに居たんだ。んでどうせなら財宝全部奪い取ってしまえと思ってな、俺が地下をサイトが上層階を探索してたんだ。」
「そうですか・・・色々と鬼畜ですね。で、そのメイドは助けられたのですか？」
「ああ、それについてはサイトが救助した、んで探索してた俺は誰か知らんが足音を聞き取った、んで周辺を調べてみたら何も無い、壁を叩いてみたら壁の奥に空間があることに気が付いたから壁を吹き飛ばして中を探索、その後は貴方達が知るとおりだ。」
「そうですか・・・」
「今度はこちらの番です、何故貴方達はあそこに居たんですか？」
「・・・貴方達に話していいかどうか迷ってます、貴方達が私には

信用できない。」
まぁそれも当然か、問答無用で自分達を叩き伏せたメイドを従えている俺を信用はなかなか出来ない、俺なら信用はなかなかしないな。
「誠司様？どうしましたか？」
「ん、大丈夫だ、問題ない、んであんた達はこの後どうする？何処か行くあてがあるのか？」
「あてはあるのですが、店長に迷惑はもう掛けられないですし・・・」
・・・？店長？？どこかの店に居たのか？？
「・・・姉さん、ごめんなさい。」
「リューネのせいじゃないわ、だからそう落ち込まないで。」
リューネが沈み込みヘレンさんが慰めている。
俺には彼女達をかくまう先もコネも無い・・・。
・・・？？待てよ・・・無いなら作ってしまえばいいんじゃね。
「・・・無いなら作ればいいじゃない！！」
「どうしましたか誠司様！！」
「ああ、なぁリューネ？とヘレンさん」
「何？」「何でしょうか」
「いっそのことこの国から逃げないか？もしくは俺に仕えない？」
「？？？」
「誠司様、もしや私は用済みに「俺が瞳さんみたいな人を手放すと思ってるのか？？」／／／／／／／」（紅化している）
「この国には居られないだろう、だったらこの国から逃げればいい。」セ
「でも何処に行く気？脱走は色々と危険。」シャ
「だから空に逃げる」セ
「・・・空は・・・どう？？」シャ
「どうなんだろな、てか誠司、お前空に逃げるとかどうやってやる気だよ」サ

「別に能力使ってシナプスなりラピュタなり色々作ればいいじゃないか」セ
「・・・そういやお前って論外だったな」サ
「同意、誠司は論外。」シャ
「ちょ、シャルとサイト酷い」セ
「大丈夫ですわ、私は誠司様を裏切りませんわ！！」ヒ
「有難う瞳さん、さて、・・・何にしよっかな～」セ
そしてメニューを開く・・・だがラピュタなんてもんやシナプスがあるわけがなかった・・・いや・・・コレは？？
「・・・？？あえて地下に作るってのもいいかもな」セ
「地下か・・・そうなるとな・・・」サ
「あえて宇宙ってのもいいかもしれん」セ
「一気に飛んだな！！」サ
「そうだ・・・コロニーを作ればいいじゃない」セ
「待て！！色々とヤバイ！！」サ
「コロニー落とし・・・フフフハハハハハハハハハ！！！」セ
「誠司が壊れた！！」サ
「とりあえず元に戻す、」シャ
シャルの攻撃、ミス、誠司に効果が無いようだ。
「効かない・・・」シャ
「俺がやってみるよ」セ
サイトの攻撃、スカ、誠司に効果は無いようだ。
「駄目だ・・・当たってるのに効果が無いのか？？？」セ
「では私が・・・誠司様、お目覚めのキスですよ」ヒ
瞳はキスを使用しようとした、だがそれよりも早く誠司は飛び起きた。
「！！ッ俺は何を・・・なんか悪寒が・・・ブルブル」セ
「ッチッ！！」ヒ
「瞳さん！？どうしたんすか！！」セ
「いえ、何でもありませんわ！！」ヒ

「そう、何もなかった！！」シャ
「とりあえずクタバレ」サ
「何があった」セ
「お前が原因じゃ！！」サ

「・・・そうか」セ
「あの～」リュ
なんだ？と思い声がしたほうを向く、そこにはリューネが何か言いたげに立っていた。
「私を貴方様に仕えさせて下さいませんか」リュ
「私もです、もし宜しければ木原様の使用人として仕えさせて下さいませんか。」へ
・・・いいんだけど、給料が出せんぞ、今は。
「いいけど雇う以前に俺はこの国の人間じゃない、それに資金がないから給料が出せん。だからまずは資金を作ることから始めようと思う、最悪今月分の給料は出せんかもしれん、それでもいいのか？」
「ええ、このままではどうせ死ぬだけですし、それなら楽しそうなところに使えたほうがいいじゃないですか。」
「それにもう店長の所には戻れませんし。戻ったところで迷惑をかけるだけですわ」
「そっか、それでいいのなら雇うよ。これからよろしく、んじゃ明日にでも業務内容をまとめておくから。・・・本当にコロニー作るか・・・それにシャルの母さんも収容すればいいか。でもあえてシナプスとかラピュタ、あえてナデシコとか大空魔竜もいいかも、でも石村建造して色々するのもいいか？？・・・だが・・・木馬か？いや、オーバーテクノロジーの固まりだしな・・・ここはあえてアーガマーとか、・・・駄目だ、落ち着こう俺、この事は後で考えよう。んじゃリューネとヘレンさん、今日は・・・とりあえずこの部屋に布団引くからそこで寝てください。」
「分かった、所でなんで私の名前知ってる？」

「分かりました」
「さっきヘレンさんが呼んでたから」
「そうですか。」
そして虚数空間から以前買った寝袋二つを取り出してオマケに寝袋二つを購入、黒髪と金髪を入れて地面に寝かす。
「んじゃこれに入って寝てください。明日業務内容などを説明するんで。」
「分かりました」「はい」
「分かりましたわ、でも誠司様はどちらへ行かれるのでしょうか？」
「ああ、外のテントだ、あそこ結構風通しがよくて寝心地がいいんだよ」
「そうですか、・・・ふふふ」
そして瞳さんは何も追求してこない、何故だ、何か追及してくると思ったのだが。
「んじゃ解散、後は各自部屋に戻って就寝、明日また会おう、んじゃお休み」
そして俺は部屋を後にした。
「しかし本当によかったの姉さん」
「ええ、それにご主人様と居ると楽しそうだと思わない？」
「まぁそうは思うけど、」
「だからいいのよ」
「・・・何故私の部屋・・・」ブツブツと
そんなやり取りがあったっぽい。

そして俺はそんな事も知らずに外に設置しておいたテントの中に居る、何故かサイトと一緒に・・・。
「何故此処に居る？」
「ルイズに追い出された（泣）」
「そうか」

そしてその３０秒後、俺の意識は消えた。

そして朝、起きた俺はランニングをしながら現在の状況を考えていた。
まずあのメイドさんたちの処遇である。
俺はこの世界に居るための身分として使い魔というものを持っている。だがそれだけでは彼女らを雇うのに色々問題が出る可能性が高い。
だからまずはマチルダさんに頼んであの村に教育係兼雑用として仕事に向かってもらっている間に家か城、もしくは移動要塞を作成、それかシャル母に一時的に雇ってもらうとか、その後正式に雇うって流れにしようと思う。
と言う事で昼にマチルダさんと交渉、渋っていたので入手した財宝の２／５を渡したらしぶしぶひき受けてくれた。眼は輝いてたけど。
そしてその事をリューネとヘレンさん、それに瞳さんに伝えたら瞳さん以外は喜んで引き受けてくれた、瞳さんは頭を３０分ずっと撫でてたら了承してくれた。・・・ただその後シャルにも要求された、なんかすっごい満足してた・・・そんなに俺の手は良い物なのか？？
その後起きてきた金髪と黒髪にこの後はどうするか聞いてみた。
金髪・・・クリスは何処にも行く気がないからマチさんルートに突入させた。
んで黒髪はなんと転生者、神に殺された人間第二号だった、んで来たのはいいけど何故かあそこに転移してその後誰にも気付かれずに放置されていたらしい・・・可哀想に。
んで名前が藤間由井って言って能力がＤＱの呪文が使用可能になるらしい。
戦力として確保、本人も了承してくれたのでとりあえず飯を食わした、凄い勢いで食っていた、そこまで大変だったか、
そして夜、どうやらパーティーが有るらしい、シャルの使い魔とし

て出なくてはと思いメニューより黒タキシードを購入してみて着た。
「うん・・・最悪だ・・・似合ってねぇ」
似合わなかったので黒コートにジーパン、それに黒いTシャツ着込んで出ることにした・・・悲しいなぁ。

そして舞踏場、俺はシャルをエスコートして入場した。
その後学園長の演説があり俺とシャル、それにサイトで飯を食らっている。
「旨いな。」
「本当だ・・・でも自分で作った飯が食いたい・・・ああ懐かしき和食よ・・・どうして消えてしまったんだ・・・」
「能力で如何にかしろ!!」
「どうした」
「・・・いやさ、俺達元の世界に帰れるのかなって思っちまってよ・・・」
「すまん、この場で言う話じゃなかったな、忘れろ」
「いや、セイジが悪いわけじゃないんだ・・・ただな・・・味噌汁が恋しくてよ・・・」
味噌汁か・・・努力して再現しようか・・・。
俺はそう思いつつ手元にあったチキンをサイトに差し出す。
「まぁ今は何もかも忘れて喰らい尽そうぞサイト、そんなこたぁ後で考えればいいんじゃい!!」
「・・・そうか、そうだよな、んじゃ頂くぜ!!」
「誠司、味噌汁って何？」
「味噌汁ってのは俺達の国の・・・??スープってところが妥当か、まぁ汁物だ」
「美味しい？」
「勿論さ、それにバリエーションがいくつもある」（赤味噌白味噌

糞味噌・・・あれ??)
「・・・もし全て終ったら貴方の居る国に行きたい、駄目?」
そして上目遣いでこちらを覗き込んで来るシャル、んな顔しないでくれ、断れないじゃんかよ。
「ああ、そのときは母さんも連れて行くぞ。」
「!!うん、ところで誠司、一曲どう?」
・・・ダンスか・・・小学校の頃にフォークダンスの授業あったけど全く出来なかったからな・・・。
だが此処で断ったらサイト以下だ(笑)!!。
「自慢じゃないが俺はダンスは苦手なのですが・・・、それでも宜しかったら一曲私めと踊ってくださいませんかマスター」
そして俺はシャルに手を差し伸べした。
「喜んで、それに始めては誰でも下手、私も下手だった。」
シャルは俺の手を取り俺を中央に引っ張って行く。
「ちょ、せめて端で」
「駄目、誠司に拒否権は無い」
「酷いな」
「それに隣はちゃんと踊れている、悔しくないの?」
隣を見てみると綺麗に踊れているサイトとルイズが居たってサイト!!テメェ今こっち見て笑ったな!!後で殺す!!
そして俺はサイトを見返そうと思いシャルのほうを向き踊り始めた。
ホールの中央で俺とシャル、ルイズとサイトのペアが優雅?に踊る。
「ダンスが出来ないっていってた」
「出来ないんじゃないんだ・・・ただな・・・トラウマがあって、」
リアルで小学校の頃フォークダンスを踊ることになって相手が男でしかもその相手が俺の脚に引っかかって転んで・・・その後・・・俺は・・・ファーストキス(笑い)を・・・事故だったってのはわかってる・・・ただその相手が中学で男に目覚めて告白されて断ってその後公衆トイレで襲われかけて・・・その後少し引篭もりかけたよ・・・。

「トラウマ??」
「こちらの言葉に訳すと精神的外傷、つまりそれに恐怖を覚えていたりするみたいな意味で解釈してくれると嬉しい」
「そう・・・ごめんなさい」
「気にしないでくれ・・・そうだよ・・・あれは事故、そう・・・事故だった、それに今はなんか楽しいしな」
「そう・・・」
そして俯くシャル、
「なぁ・・・今度何時休暇が出来る?」
「え?」
「今度休暇が出来たらシャルの母さんを治しに行く、だから俯かないでくれ、俯いてると幸せが逃げるぞ」
「母さま・・・やっと治る・・・」
「ああ・・・まあ今を楽しもうぜ」
正直今後の展開をもう覚えていない、だからもうどうにでもなってしまえという考えでシャルの母さんを治しに行こうと思う。
まあ今はそんなことを考えないでシャルと踊ろう。

上手くは踊れたがその後何故か筋肉痛になった・・・何故に・・・。

１８　どうしよっかこの現状（後書き）

・・・ネタが尽きた・・・ネタが欲しい・・・

外伝　復讐者、転生、

・・・何時まで生きていれば良いのだろうか・・・。
もう何回も世界間を渡ってきた、そのたびに俺の精神は擦り減ってきた。
俺の精神の限界が近い、恐らくは次の世界が最後となるはずだ。
・・・俺は最後の世界で奴を殺せるだろうか、俺から全てを奪い取った者を。
いや、恐らく出会えるはずだ、奴がどのような形を取っているかは知らない。
だが何度も異世界を渡り抜いたおかげで知識と経験はある、高確率で神は奴を最後の世界に召喚するはずだ・・・それもあの時の姿で。

・・・俺の眼前で・・・を殺したあの時と同じ姿で。

俺はもう見慣れてしまった黒色の世界に居た。
ここに居ると言う事は死んだか役割を果たしたのだろう。
（また渡るのか、お前も懲りない奴だのう）
「余計なお世話だゼウス、俺は奴を殺すまでは渡り続けるつもりだった。」
（そうか、遂にお前も死を願うのか・・・お主は最後まで粘ると思っていたが・・・見込み違いだったか、それなら新しい奴を探せばいいが）
「ああ、あと俺からの願いがあるのだが」
（なんじゃと、お主からとは・・・まあ予想は付いているがな）
「なら話は早い、次の世界で物理的にも精神的にも俺は終るだろう、だから俺の最後の願いくらいは聞いてくれてもいいだろう」
（・・・分かった、ただし条件を付ける、次の世界にはお主の他に二人、次の転生者候補がいるのでな、そいつ等を味方に引き込みお

主は戦うといい・・・あの時と同じ能力をつけておく。）
「ああ、頼んだぞ」
（頑張れよ・・）
「珍しいな、アンタが俺の名前を呼ぶとはな・・・」
（なに、これで最後だと思うとな、）
「アンタにとっては一瞬の出来事みたいなもんだろ」
（ああ、確かにそうだ、だがそれを悲しむ事はいけない事ではないだろう）
「そりゃそうだ」
「（ははははは）」
（・・・さて、最後に能力確認じゃ、まずお主の能力はあの時と同じメトロイドシリーズのパワードスーツを装備させておく。初期から全部装を展開できるようにしておく。あの時はシュミクラムだったが今回は現実じゃぞ。）
「そうか、ありがとな」
（それと転生者側には瞳とレキが付く。お主には・・・そうじゃな、誰が良い？）
「・・・あの時とは違うか・・・だったら某無敵砲台とノリスを、彼らが一番俺のスタイルと会っている。」
（分かった、ノリスにはＢ３とＭＳ－０６Ｊミサイルポッドを　ＩＳのシステム上で再現できるようにしておく、モリゾーにはＢランク以下の攻撃の無力化を付けておくぞ、）
「ああ、また彼らと会う事となるのか・・・」
（奴の情報を教えてやる、奴の能力は現実世界でのシュミクラムの顕現じゃ、・・・本当に良いんじゃな）
「ああ、俺は奴を殺さなくては死に切れない・・・頼んだ」
（ならば転生せよ、復讐に赴く転生者、・・・・に幸あれ）
「・・・俺の名はもう・・・・じゃない、俺はマサキだ、もうあの時の名前は捨てた」
（ならば逝け、ワシは貴様を応援している）

「ああ、んじゃなゼウス、もう会うことも無いだろう」

・・・そしてマサキの姿が掻き消えた。

（・・・あ～アイツに連絡取っといてくれ、お前んとこの問題児を一時的にワシの管轄に入れておけってな、）

・・・待っていろ、俺は貴様を必ず次の世界で殺す、其の為に今まで追っていた。

必ずコロシテヤル・・・ゲンハ・・・。

俺はお前を殺す事を厭わない、例え全てを捨ててでもコロシテヤルカラナ。

チャントカタキヲトルカラナ、アンシンシテイテクレバチェラ、オレモスグソチラニイク。
ダカラマッテイテクレ、キミガウムハズダッタオレノコトトモニマッテイテクレ。

・・・ハジメヨウ、オレノサイゴノフクシュウゲキヲ。

外伝　復讐者、転生、（後書き）

やっと投降できた外伝、

色々面倒くさい事になりそうだな・・・。

大体1巻分でマサキの外伝を何個か書いて逝きます。

マサキはもう某メイオウを想像すればいいよ！！。

１９　吹っ切れた、サイト乙（前書き）

あ～吹っ切れちゃいました、結構遅くなったのはこれを投降して本当にいいのか迷ったからです、スイマセン。

１９　吹っ切れた、サイト乙

「振りかざーしたそーの手にーお前は何をつかーむのか」
俺はアカペラで歌いながらサイトと一緒にちょっとした工作をしていた。
「熱くたーかぶる勇気は～だーれーのたーめ」
裏庭の一角で風呂を作っていた。
そしてサイトは今薪用の木材を取りに行っている。
まあこんな事になった発端はサイトなんだけどね。

『和食が食べたい和食が食べたい米米米米米米・・・ブツブツ』
朝、久しぶりにサイトとランニングしている時にサイトが呟いてた言葉だ。
そのときはまだサイトは正常だった。多少呟いていたが。
そしてその後の朝食、マルトーのおっちゃんのところで起きた出来事がこれだ。

1、　　2、　　3！！。

～～～ＳＩＤＥ三人称視点～～～

「サイト、飯だぞ」
誠司が右手にスプーンを持ちながら言った。
だがサイトは素知らぬ顔で呆けていた。
「サイト、飯だぞ。」
「ん、ああ、悪りい、頂きます・・・」

再度呼びかけたところで反応してスプーンを右手に持ちおっちゃん特性のシチューを口に運ぶ。
誠司もそれを見てシチューを頂いた。
「やはり旨いですな、・・・おい、サイト・・・どうした？」
サイトはスプーンを口に運んだ時の体制で固まっていた、いや・・・痙攣してるのかスプーンがプルプル震えていた。
「おい！！大丈夫か！！」
「・・・・べ・い・・・・・」
誠司がサイトのことを心配して駆け寄った。
「和食が食べたい和食が食べたい和食が食べたい・・・・・・・・米米米米米米米米米米米米」
プルプル体中を震わせながらブツブツと呟いてる・・・。
「・・・どうしようこれ・・・」
誠司がどう対処すればいいかわからず右往左往していると厨房に誰かが入ってきた。
「おはよ～、・・・どうしたの？えと・・・誠太？？」
「誠司だ、ちょっとサイトが壊れて困ってるんだ、対処法が分からないのだが」
「どんな感じなの？」
由井がサイトのほうに近づいた。
「米米米・・・魚鮭鯖鶏肉鋤焼牛丼鮪刺身・・・あ”あ”あ”あ”！！！」
「うお！！」「ひゃ！！」
そしてサイトが急に叫びだした、その所為で近くに居た誠司と由井が驚いた。
「・・・こんな状態なんだが」
「御免、無理そう。」
「んじゃとりあえず落としておくよ」
そしてセイジがサイトの後ろに回りこみ首を絞めた。
「ウゲ！！」

そしてサイトの意識が飛び誠司に寄りかかるような体制で崩れた。
「ちょ、気絶したけどいいの！！」
「ああ、多分」
そして誠司はサイトを担ぎ由井に言った。
「スマンが俺は行く、おっちゃんに旨かったと伝えてくれ」
「分かったけどどうするの？」
「とりあえずこいつを沈静化させるためにどうにかしてみるつもりだ」
そして由井は少し考えて後で行くといった。
そして誠司はサイトを抱え厨房を後にした。

～～～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～～～

そして今に至る。
俺はとりあえず風呂を作ってこいつを入れることにした。
そうすれば少しは収まると思ったのだ。
「誠兄、これどうすればいい？」
「それは此処に置いといてくれ」
「分かった～」
あの後風呂を造るぞって言った時からサイトが狂った。
その後どっかに走り去ったと思ったら急に戻ってきて俺の事を誠兄と呼び始めた・・・多分幼児退行かなんかだろう。
そこまで嬉しかったのかどうかはサイトしか知らない。
ただ分かるってのがサイトが幼児化したって事だけ、無論体はそのままで。
何も知らないやつが見たら引くだろうな。
「さて、作業に戻るか。」
カンカンドスドスギコギコベキベキグシャァッ！！（作業内容は極

秘なので音声のみでご堪能ください）
バスッバスッ！！ゴスッ。うがぁあああああ！！。誠にいいいい！！！！。

そんなこんだで完成した風呂を俺は逆行したサイトと一緒に眺めていた
「・・・なにやってるの・・・えと？？」
「誠司だ、」
「そうそう、で、誠司は何をやってるの？」
呆けていたらキュルケが話しかけてきた、何故か久しぶりに会ったような気がしてならない、数日前にあったはずなのに。
「風呂をサイトと一緒に作ってた」
「風呂？！こんな所に」
たいそう驚いたのかキュルケは声を張り上げた。まあこの世界の奴らには分かるまい、露天風呂の良さは
「ああ、俺らの国に似たような風呂があってな、それを再現したんだ。」
簡単に説明すると塀の無い五右衛門風呂。
「これが・・・確かに風呂として使えそうだけど・・・煮えちゃわないの？」
まあ元がおっちゃんから貰った鍋だからな、・・・人間の煮つけとか食いたくねぇ！！
「温度調節なら問題ない、それに火傷しない様に木製の蓋を沈めて入るんだ、そうすれば火傷はしない」
煮える可能性は否定できないけどな！！
「そうなの」
納得したのか？
「んで後でフレイム貸してくれないか？あいつの火力が欲しい、そ

の代わりにフレイムを一緒に洗っておくがどうだ？無理か？。」
「そう、それならいいわよ、でも私がやったほうが火力は調整しやすいわよ」
「その場合色々と不都合がある、」
見られたくはない、見られても問題ないけど。
「そう、まあ分かったわ」
ニヤニヤと笑いながらキュルケは了承しその場を去って行った。
さて、残るは和食、こいつさえ如何にかできれば収まるはず。
「どうすっかなぁ～・・・メニュー。」
勿論米なんて有るわけが無い、そうなると作れそうなのが麺類か？
「・・・無理だな、」
俺は一応自炊していた事はあったが流石に麺類を位置から作り出した事は無い。
・・・よくよく考えてみたらルイズの虚無が目覚めたら世界扉を覚えさせてみるか、そうすれば向こうと行き来できるからな・・・。
「とりあえず後で水張るの面倒だから今のうちに入れとくか」
そして桶を手に取り俺は水を汲みに行った。

「何が起きたか説明しなさい」
「ふー！！んー！！（猿轡掛けられてる状況で話せるか！！）」
話は飛び午後、サイトの変異を察知したルイズに俺は何故か猿轡を掛けられて正座させられて足の上に石を乗っけられていた。
そしてそれを眺めてるキュルケとシャル、見てないで助けて！！
「へぇ～なんとしてでも話さないつもり？？それならこっちも考えがあるわよ・・・」
「”” ！！、p：＼：・・／・；・（俺は無実だ！！つか俺のほうが知りたいわ！！）」
「せめて猿轡を外させてあげたらどう？そのままだと誠司は何も話

せないわよルイズ」
「うっさいわね！！ツェルプストーは黙ってて！！」
とりあえずこの猿轡を外してくれないか。
そう思っていたら急に息を吸うのが楽になった。
どうやらルイズが俺に付けられていた猿轡を外したっぽい。
「さあ説明しなさい、どうして馬鹿犬があんな子供みたいになったか！！」
「ウハッ！！ふぅ・・・俺だって知らんよ、まあ原因は大体分かるような気がするが・・・」
「何？言ってみなさい」
「和食が食いたくて食いたくて狂ったんだと思うぞ」
「和食？」
「和食ってのは俺らの国の方法で調理した食事の事だ、」
「そう」
「で、そのワショクってのはどうやって作るの？それを作ればサイトは元に戻るの？応えなさい。」
んなこと言われてもな、そもそも素材が無いんだから。
「分からん・・・とりあえず開放してくれ、厨房借りてとりあえず試してみる。」
「ねぇなんで誠兄正座させられて足の上に石乗っけてるの？」
・・・とりあえずその口調を止めてくれ、見た目とのギャップがあって吐き気を催す。
「開放すべき」
シャルの一言でルイズは俺の脚の上に乗っけられていた石をどかした。
「まずサイトを如何にかせねば、」
そう呟きながらメニューを開く、探索して使い捨てのタイム風呂敷を購入した。
「なにそれ？」
キュルケがタイム風呂敷を見ていった言葉だ、まあ何も知らない人

から見たらただの布切れにしか見えないがな。
「こいつをサイトにかぶせて」
サイトにかぶせて。
「少し待つ・・・すると」
そしてサイトにかぶせたタイム風呂敷を取り外す、そして取り外したタイム風呂敷は俺の手の中で消えていった。

「はい、ちびっ子サイトの誕生で～す」

「「「・・・は？」」」
「・・・何してるの誠兄？あと大きくなってない？」

そこにはちっちゃくなったサイトとちびサイトを見て呆けている主と微熱とゼロ（胸板的な意味で）がいた。

そして無言の状態が何分か続いた、そしてルイズがちびサイトに近づいた。
ちびサイト状態だと背の高さはルイズの胸と同じくらいだ、だから自然とルイズを見上げた形になる。
そう、上目遣いになるのだ！！
「どうしたの？ルイズお姉ちゃん？」
ピキッと何かがひび割れた様な音がしてルイズとキュルケが固まった・・・。

「か・・・かわいぃぃぃぃぃ！！！」
そしてルイズはちびサイトを抱きかかえ頬擦りし始めた。
そして抵抗することなくちびサイトは揉みくちゃにされていく。

「あ～くすぐったいよルイズお姉ちゃん～」
「何この生物、結構可愛いかも～」
「まさか弟キャラ化するとは思わなかった・・・サイト・・・いやあえて言おう！！さらばサイト！！そしてこんにちはサイトきゅん！！」
「サイトきゅん！！サイトきゅん～、あなたが私の使い魔で良かったってはじめて思ったわ～！！」
「いいわね～ルイズは～サイトきゅん可愛い～」
「しかし・・・問題の解決にはなってない様な気が（と言いつつビデオカメラでさりげなく映像を保存している誠司ｗｗｗ）」
「心が崩壊・・・母さまと同じ方法で直せない？」
「・・・シャルの母さんと同じ方法か、そりゃ無理だ、なにせ症状は似ているが経緯が違うからな、
シャルの母さんは魔法薬による被害、サイトきゅんのは精神的な被害だから対処法が違うんだ、・・・そうだ、ラグドリアン湖に行ってシャルの母さん治すついでにサイトの治療用に水精霊の涙貰っていくか、そうすれば一気に二人も治せるしな。」
「それは良いアイディア、早速明日にでもいく？」
「そうするか、使い魔の治療と緊急の帰省ってことにでもしておけば何とかなるだろう、・・・そうなるとトラックを改造しておかねば、」
「頑張って」
「ああ、・・・そうだ、ついでに由井連れて行くか、力の詳細知りたいし、んじゃサイトきゅんの世話頼んだ、俺は改造してくる。」
「行ってらっしゃい」
そして俺はその場を後にした。

「で、能力の詳細が知りたいの？」
「ああ、ドラクエの能力だけだと分かりづらい、詳細を頼む、」

「えっと、今のところは3の呪文で全て使えるわ、」
「立ったら何故脱出しなかった？リレミトを使って脱出するなりイオ系統の魔法で壁を爆砕して脱出する事もできたはずだが？」
「やってみたわよ、そもそもあの壁魔法を吸収しちゃったから全く効果が無かったのよ・・・おかげで出られないしお腹はすくしで死ぬかと思ったわ」
「そうか、それと俺ら明日ラグドリアン湖って言う湖行くけど一緒に来る？」
「行くわ、んじゃ用意しておくわね。」
「ああ、んじゃな」

～～～ＳＩＤＥ　元凶～～～

あ～あ、何やってんだろ私。
心の中で色々考え渋い顔をしながら廊下を歩いているのは洪水こと香水のモンモランシーだ。
彼女の心境は複雑だった。
自作の香水を売って作った金をコツコツと溜め込み昨日例のあの薬を作れるまで金が溜まったからといって町に行きとある素材を購入、そして帰ってきてすぐに作成した・・・のは良かったのだが。
（何で秘薬間違えたんだろ私・・・はぁ～）
彼女は一つ間違って秘薬を購入してしまった、その所為で出来た秘薬は本来作ろうとした物とかけ離れてしまっていたのだ。

（出来た秘薬が心を子供のようにするって・・・駄目だな私、もっと勉強しなきゃ）
そう自分に言い聞かせながら彼女は廊下を歩いて行く。

そしてその秘薬は彼女を保有していない、彼女はその秘薬を知らない間に紛失していた、そして紛失していたのを知るのはもう少し後になる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3520s/

ゼロの使い魔　木原誠司+αの使い魔生活

2011年10月8日22時14分発行